

第6表 整地層出土陶磁器・土器観察表

法量()は反転復原径

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
1	磁器碗	(8.5)	4.7	3.3	ロクロ	染付・透明	外:草		大明年製 一重圏線	肥前			39
2	磁器碗	(9.0)	5.2	(3.7)	ロクロ	染付・透明	外:帆掛船 波	コンニャク 印 版	大明年製 一重圏線	肥前	1690~18C初頭		
3	磁器碗	(9.9)	5.1	(4.0)	ロクロ	染付・透明	外:若松	コンニャク 印 版		肥前	1690~1740年代		
4	磁器碗	(10.0)	—	—	ロクロ	染付・透明	外:蝶 草	コンニャク 印 版		肥前	1690~1740年代		
5	磁器碗	(8.9)	—	—	ロクロ	染付・透明	外:雪輪	口 紅		肥前	1690~1740年代		
6	磁器碗	(8.4)	4.7	(3.4)	ロクロ	白 磁				肥前	1690~18C前半		
7	磁器碗	—	—	(3.8)	ロクロ	染付・透明	外:草花			肥前	1690~1740年代		
8	磁器碗	—	—	(3.8)	ロクロ	染付・透明	外:松 草花	コンニャク 印 版		肥前	18C前半		
9	磁器碗	—	—	(3.8)	ロクロ	染付・透明	外:松 梅樹	コンニャク 印 版	一重圏線	肥前	1690~1740年代		
10	陶器碗	—	—	(3.6)	ロクロ	灰 釉				肥前	16C末~17C初頭		
11	陶器碗	—	—	(4.6)	ロクロ	灰 釉				肥前	1600~1630年代		
12	陶器碗	—	—	4.0	ロクロ	白土・鉄釉	内外:刷毛目		刷 毛 目	肥前	17C後半~18C初頭		
13	陶器碗	—	—	4.6	ロクロ	白土・鉄釉	内外:刷毛目			肥前	17C末~18C前半		
14	陶器碗	—	—	4.6	ロクロ	白土・鉄釉	内外:刷毛目			肥前	17C末~18C前半		
15	陶器碗	—	—	(4.2)	ロクロ	白土・鉄釉	内:刷毛目 外:蛭手			肥前	17C末~18C前半		
16	陶器碗	11.4	5.9	5.0	ロクロ	鉄 釉 白土・透明	外:花 笹			関西	17C末~18C前半		
17	磁器碗	(9.7)	4.7	(4.6)	ロクロ	染付・透明	外:花 柴			肥前	18C前半		
18	磁器碗	(8.8)	4.3	(3.6)	ロクロ	染付・透明	外:松 梅樹			肥前	18C前半		
19	磁器碗	(6.8)	3.8	3.0	ロクロ	染付・透明	外:草花			肥前	18C前半		
20	磁器碗	—	—	4.0	ロクロ	染付・透明	外:草 丸			肥前	18C前半		
21	磁器碗	—	—	—	ロクロ	染付・透明	外:唐 草		大明朝化年製 一重圏線	肥前	18C前半		
22	磁器碗	—	—	3.7	ロクロ	染付・透明			大明年製 一重圏線	肥前	18C前半		
23	磁器碗	(10.0)	5.3	(3.6)	ロクロ	白 磁				肥前	18C前半		
24	陶胎碗	—	—	(4.4)	ロクロ	染付・透明				肥前	18C前半		
25	陶胎碗	(10.5)	7.5	(4.7)	ロクロ	染付・透明	外:植物			肥前	18C前半		
26	陶胎碗	(12.2)	7.2	(5.4)	ロクロ	染付・透明	外:楼閣山水			肥前	18C前半		
27	陶胎碗	(11.0)	—	—	ロクロ	染付・透明	外:松			肥前	18C前半		
28	陶器碗	—	—	4.8	ロクロ	透 明				肥前	17C末~18C前半	京焼風陶器 呉器手碗	
29	磁器碗	(11.0)	6.0	(4.1)	ロクロ	染付・透明	外:梅樹		大明年製 一重圏線	肥前	18C前半~中頃		40
30	磁器碗	(10.8)	5.9	4.6	ロクロ	染付・透明	外:梅樹		一重圏線	肥前	18C前半~中頃	見込蛇ノ目釉剥ぎ	

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
31	磁器碗	(10.5)	6.4	(4.3)	ロクロ	染付・透明	外:草花		大明年製 一重圏線	肥前	18C前半～中頃		
32	磁器碗	(10.7)	4.9	(3.7)	ロクロ	染付・透明	外:竹梅			肥前	18C前半～中頃	見込蛇ノ目釉剥ぎ	
33	磁器碗	(11.9)	—	—	ロクロ	染付・透明	外:梅草花			肥前	18C前半～中頃		
34	磁器碗	—	—	4.0	ロクロ	染付・透明	外:梅樹		一重圏線	肥前	18C前半～中頃		
35	磁器碗	—	—	(3.9)	ロクロ	染付・透明	外:梅樹		大明年製 崩れ銘	肥前	18C前半～中頃		
36	磁器碗	—	—	4.1	ロクロ	染付・透明			大明年製 一重圏線	肥前	18C前半～中頃		
37	磁器碗	—	—	(4.0)	ロクロ	染付・透明			大明年製 一重圏線	肥前	18C前半～中頃		
38	磁器碗	—	—	4.4	ロクロ	染付・透明			大明年製 一重圏線	肥前	18C前半～中頃		
39	磁器碗	—	—	3.4	ロクロ	染付・透明			大明年製 一重圏線	肥前	18C前半～中頃		
40	磁器碗	(11.0)	5.4	(4.0)	ロクロ	染付・透明				肥前	18C前半～中頃		
41	磁器碗	(9.0)	—	—	ロクロ	染付・透明	外:丸			肥前	18C前半～中頃		
42	磁器碗	(8.7)	5.0	(3.6)	ロクロ	染付・透明	外:花 or 紅葉	コンニャク 印版		肥前	18C前半～中頃		
43	磁器碗	—	—	(4.0)	ロクロ	染付・透明	外:菊花	コンニャク 印版		肥前	18C前半～中頃		
44	磁器碗	(10.8)	—	—	ロクロ	染付・透明	内:一重網目 外:二重網目			肥前	18C前半～中頃		
45	磁器碗	—	—	4.4	ロクロ	染付・透明	内:一重網目 外:二重網目 見込:菊花		渦福	肥前	18C前半～中頃		
46	磁器碗	—	—	3.4	ロクロ	染付・透明	外:草若松 見込:若松			肥前	18C中頃～末		
47	磁器碗	(11.3)	5.7	4.8	ロクロ	染付・透明	外:井桁丸 見込:五弁花	コンニャク 印版		肥前	18C後半		
48	磁器碗	—	—	5.1	ロクロ	染付・透明	外:丸 見込:五弁花	コンニャク 印版		肥前	18C後半		
49	磁器碗	—	—	4.5	ロクロ	染付・青磁	見込:五弁花	コンニャク 印版		肥前	18C後半		
50	磁器碗	(10.4)	5.2	(3.8)	ロクロ	染付・透明	内外:雲竜			肥前	18C後半		41
51	磁器碗	(9.9)	5.5	(4.2)	ロクロ	染付・透明	内外:一重網目			肥前	18C後半		
52	磁器碗	—	—	4.0	ロクロ	染付・透明	外:雪輪		大明年製 崩れ銘	肥前	18C後半		
53	磁器碗	—	—	5.1	ロクロ	染付・透明	見込:雨龍		富貴長春 二重圏線	肥前	18C後半		
54	磁器碗	(14.9)	7.1	(5.9)	ロクロ	染付・透明	内:四方襷 外:唐草 見込:松竹梅円形		銘あり	肥前	18C末～19C前半		
55	磁器碗	(11.2)	—	—	ロクロ	染付・透明	外:雪輪梅樹			肥前	18C後半		
56	磁器碗	(10.0)	—	—	ロクロ	染付・透明	外:草花			肥前	18C後半		
57	磁器碗	(8.1)	—	—	ロクロ	色絵・透明	外:葉			肥前	18C代		
58	磁器碗	(7.2)	3.9	(2.8)	ロクロ	染付・透明	外:草				18C後半		
59	陶器碗	(8.6)	4.5	(3.6)	ロクロ	透 明				関西	18C後半～		
60	陶器碗	—	—	(3.6)	ロクロ	鉄絵・透明	外:若杉			関西	18C後半～	小杉碗	

法量（ ）は反転復原径

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
61	陶器碗	(8.8)	—	—	ロク口	鉄釉・透明				瀬戸美濃	18C代		
62	陶器碗	—	—	(4.2)	ロク口	黒釉				福岡	18C代	三足ハマ痕	
63	磁器碗	(8.4)	5.5	(3.8)	ロク口	染付・透明	外:宝 見込:花			肥前	1780~1810年代		
64	磁器碗	(8.4)	5.4	(4.0)	ロク口	染付・透明	外:宝 見込:花			肥前	1780~1810年代		
65	磁器碗	(8.2)	5.6	(3.3)	ロク口	染付・透明	外:朝顔			肥前	1780~1810年代		
66	磁器碗	(7.9)	5.9	3.6	ロク口	染付・透明	外:朝顔			肥前	1780~1810年代		
67	磁器碗	(9.1)	5.9	(2.8)	ロク口	染付・透明	外:藤			肥前	1780~1810年代		43
68	磁器碗	8.3	—	—	ロク口	染付・透明	外:宝			肥前	1780~1810年代		
69	磁器碗	—	—	(3.4)	ロク口	染付・透明	外:鶴			肥前	1780~1810年代		
70	磁器碗	—	—	4.7	ロク口	染付・透明				肥前	1780~1810年代	広東碗	
71	磁器碗	(7.5)	—	—	ロク口	染付・透明				肥前	18C後半~19C前半		
72	磁器碗	(13.0)	4.9	(4.3)	ロク口	染付・透明	外:扇			肥前	18C後半~19C初頭		
73	磁器碗	(8.3)	—	—	ロク口	染付・透明	内:四方襷 外:蜻唐草			肥前	1780~1810年代	筒形碗	
74	磁器碗	(10.4)	—	—	ロク口	染付・透明				肥前	18C後半		
75	磁器碗	(11.1)	—	—	ロク口	染付・透明	外:楼閣山水			肥前	1820~1860年代	端反碗No95とセットか?	
76	磁器碗	(10.4)	5.7	4.1	ロク口	染付・透明	外:「福寿」 見込:「寿」			肥前	1820~1860年代	端反碗	
77	磁器碗	—	—	3.8	ロク口	染付・透明	見込:鳥崩し			肥前	1820~1860年代	端反碗	
78	磁器碗	—	—	(4.6)	ロク口	染付・透明	外:竹筴			肥前	1820~1860年代	焼継	
79	磁器碗	(9.9)	—	—	ロク口	染付・透明	内:渦 外:植物			瀬戸美濃	1820~1860年代	端反碗	
80	磁器碗	(7.5)	5.3	(2.9)	ロク口	染付・透明	外:雨龍			肥前	1820~1860年代	小丸碗	
81	磁器碗	6.4	5.3	2.4	ロク口	染付・透明	外:源氏香草			肥前	1820~1860年代	焼成不良 小丸碗	
82	磁器碗	6.9	5.3	3.1	ロク口	染付・透明	外:蔓草			肥前	1820~1860年代	小丸碗	
83	磁器碗	(11.5)	—	—	ロク口	染付・透明	外:襷			肥前	1820~1860年代	端反碗	
84	磁器碗	(10.1)	—	—	ロク口	白磁				肥前	18C末~幕末		
85	磁器碗	(9.4)	5.1	3.6	ロク口	染付・透明	外:亀			肥前	幕末~		
86	磁器碗	(10.6)	—	—	ロク口	染付・透明	外:鶴			肥前	幕末~		
87	陶器碗	—	—	(3.3)	ロク口	薬灰釉・鉄釉		露胎		萩	19C		
88	磁器碗	8.5	4.4	3.2	ロク口	クロム青磁					明治前半		
89	磁器碗	—	—	3.6	ロク口	白磁		岐「712」		瀬戸美濃	昭和~1945年		
90	磁器碗	(11.1)	6.0	(3.8)	ロク口	染付・透明		山光製		肥前	昭和~		

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
91	磁器碗	-	-	-	ロクロ	青磁	外:連弁			中国	14C末~15C中頃		
92	陶器碗	-	-	4.6	ロクロ	灰釉			露胎	波越	16C末~17C初頭		
93	磁器蓋	-	-	5.7	ロクロ	染付・透明	外:唐子見込:花卉		□明年製	肥前	1780~1810年代	[大明年製]銘 広東碗蓋	44
94	磁器蓋	(9.9)	2.8	(5.4)	ロクロ	染付・透明	外:八卦見込:円文		連弧	肥前	1780~1810年代	広東碗蓋	
95	磁器蓋	(9.7)	-	-	ロクロ	染付・透明	外:雲 or 水			肥前	1820~1860年代	端反碗蓋 No75とセットか?	
96	磁器蓋	-	-	(3.4)	ロクロ	色絵・透明	外:鳳凰			瀬戸美濃	明治~		
97	磁器猪口	(10.2)	-	-	ロクロ	染付・透明	外:牡丹唐草			肥前	17C末~18C初頭		
98	磁器猪口	(9.9)	5.6	(4.6)	ロクロ	染付・透明	外:網干		一重圏線	肥前	17C末~18C初頭		
99	磁器猪口	(6.2)	4.9	(3.2)	ロクロ	染付・透明	外:草花	型紙摺		肥前	1690~1740年代		
100	磁器猪口	(7.3)	-	-	ロクロ	染付・透明	外:松			肥前	17C末~18C前半		
101	磁器猪口	(6.4)	-	-	ロクロ	染付・透明				肥前	17C後半~18C前半		
102	磁器猪口	(7.0)	-	-	ロクロ	白磁				肥前	17C後半~18C前半		
103	磁器猪口	-	-	3.6	ロクロ	染付・透明	外:菊花	コンニャク印 版	大明年製 一重圏線	肥前	1690~1740年代		
104	磁器猪口	-	-	2.8	ロクロ	透明				肥前	18C前半~中頃		
105	磁器猪口	-	-	-	型打	白磁				肥前	17C末~18C前半		
106	磁器猪口	-	-	-	ロクロ	染付・透明	外:松 牡丹			肥前	1670~1770年代		
107	磁器猪口	-	-	-	ロクロ	染付・透明	内:四方襷 外:葉			肥前	18C前半~中頃		
108	磁器猪口	-	-	4.5	ロクロ	白磁				肥前	18C前半		
109	磁器猪口	-	-	(4.0)	ロクロ	染付・透明		コンニャク 印 版		肥前	1690~1740年代		
110	磁器猪口	-	-	(6.6)	ロクロ	染付・透明	外:藤		一重圏線	肥前	18C前半		
111	磁器猪口	-	-	6.4	ロクロ	染付・透明			渦福 一重圏線	肥前	18C前半		
112	磁器小杯	(5.7)	-	-	ロクロ	染付・透明	外:雨降			肥前	1690~1740年代		
113	磁器小杯	(5.5)	2.6	(2.4)	ロクロ	染付・透明	外:菊花 鶴		一重圏線	肥前	17C末~18C前半		
114	磁器小杯	(6.4)	2.8	(1.5)	ロクロ	染付・透明	内:一重網目 外:一重網目		菊花	肥前	1820~幕末	薄手酒杯	
115	磁器小杯	-	-	2.5	ロクロ	染付・透明	内:楼閣山水			肥前?	19C前半~中頃	薄手酒杯	
116	磁器小杯	-	-	(2.8)	ロクロ	染付・透明				肥前	19C前半~中頃		
117	磁器紅皿	(3.4)	-	-	型打	白磁				肥前	17C末~18C中頃		
118	磁器小杯	(6.8)	3.3	(2.6)	ロクロ	染付・透明	外:竹筴			肥前	18C代		
119	磁器小杯	(6.2)	3.5	(2.2)	ロクロ	白磁				肥前	1840~19C後半		
120	陶器皿	-	-	-	ロクロ	鉄絵・透明				肥前	1590~1610年代	絵唐津	45

法量 () は反転復原径

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
121	陶器皿	—	—	4.0	ロクロ	灰 釉				肥前 (内野山)	1600~1630年代	砂目積 溝縁皿	
122	陶器皿	—	—	(4.0)	ロクロ	灰 釉			露胎	肥前	1600~1630年代	砂目積	
123	磁器皿	—	—	(9.2)	ロクロ	染付・透明	見込:植物			肥前	1630~1660年代		
124	磁器皿	—	—	—	ロクロ	染付・透明	見込:植物			肥前	1630~1640年代		
125	磁器皿	—	—	(9.0)	ロクロ	色絵・透明				肥前	1640~1650年代	古九谷様式	
126	磁器皿	—	—	(9.0)	ロクロ	染付・透明	見込:「寿」			肥前	1655~1670年代	染付寿字鳳凰文皿	
127	磁器皿	—	—	11.3	ロクロ	染付・透明	内:草花 (芙蓉手)			肥前	17C末~18C初頭	ハリ支え	
128	磁器皿	—	—	(14.5)	ロクロ	染付・透明	内:草花 (芙蓉手)			肥前	17C末~18C初頭		
129	磁器皿	(23.4)	—	—	ロクロ	染付・透明	内:芙蓉手			肥前	17C末~18C初頭		
130	磁器皿	—	—	—	ロクロ	染付・透明	内:芙蓉手			肥前	17C末~18C初頭		
131	磁器皿	—	—	—	ロクロ	染付・透明	内:芙蓉手			肥前	17C末~18C初頭		
132	磁器皿	(12.6)	3.2	(6.7)	ロクロ	染付・透明	内:芙蓉手 外:連続唐草		一重圏線	肥前	1690~18C初頭		
133	磁器皿	(13.7)	2.6	8.8	ロクロ	染付・透明	内:野菜 外:松葉?		一重圏線	肥前	1660~1690年代		46
134	磁器皿	11.0	2.1	7.3	ロクロ	染付・透明	内:折枝花			肥前	17C末~18C初頭		
135	磁器皿	(13.4)	2.7	(8.3)	ロクロ	染付・透明	内:唐草		一重圏線	肥前	17C末~18C初頭		
136	磁器皿	—	—	—	型打	染付・透明	内:紅葉 外:折松葉			肥前	17C後半		
137	磁器皿	—	—	—	型打	染付・透明	内:紅葉	口紅 コンヤク印版		肥前	1690~1710年代	糸切細工	
138	磁器皿	(9.6)	3.0	(5.2)	ロクロ 型打	染付・透明	内:流水 外:連続唐草	口紅 型紙摺		肥前	1690~1740年代	八角皿	
139	磁器皿	—	—	—	ロクロ	染付・青磁	内:花			肥前	17C後半~18C前半		
140	磁器皿	(19.5)	3.0	(13.6)	ロクロ	染付・透明	内:雲気 外:連続唐草		一重圏線	肥前	1690~18C初頭		
141	磁器鉢	—	—	—	ロクロ 型打	染付・透明	内:草木 外:連続唐草			肥前	1690~18C前半		
142	磁器皿	(30.3)	—	—	ロクロ	染付・透明	内:牡丹唐草 外:連続唐草			肥前	1690~18C前半		
143	磁器皿	—	—	(7.6)	ロクロ	染付・透明	内:唐草 見込:龍	陽刻	渦福 一重圏線	肥前	1690~1740年代		
144	磁器皿	(19.6)	—	—	ロクロ	染付・透明	内:雷 外:連続唐草	墨弾き		肥前	18C前半		47
145	磁器皿	(13.5)	3.5	(8.7)	ロクロ	染付・透明	内:雷 外:連続唐草	墨弾き	□□化□□? 一重圏線	肥前	18C前半	「大明年製」銘	
146	陶器皿	—	—	3.8	ロクロ	鉄絵・透明	内:山水		清水(刻印) 露胎	肥前	17C後半~18C初頭	京焼風陶器	
147	陶器皿	—	—	4.3	ロクロ	透 明			露胎	肥前	18C前半	京焼風陶器 足付 ハマ痕	
148	磁器皿	(14.5)	3.3	(8.6)	ロクロ	染付・透明	内:雪輪 宝 外:連続唐草		□□化□□? 一重圏線	肥前	18C前半	「大明成化年製」銘	
149	磁器皿	(18.0)	2.7	(6.3)	ロクロ	染付・透明	内:雪輪 梅樹 外:連続唐草		一重圏線	肥前	18C前半		
150	磁器皿	—	—	—	ロクロ	染付・透明	内:唐草 外:花唐草		□□年製 一重圏線	肥前	18C前半	「大明年製」銘	

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
151	磁器皿	(27.1)	5.1	(17.7)	ロクロ	染付・透明	内:花唐草 外:連続唐草		一重圏線	肥前	18C前半		
152	磁器皿	13.7	4.2	8.0	ロクロ	染付・透明	内:雪輪 松竹梅 外:連続唐草		大明年製 一重圏線	肥前	18C前半		
153	磁器皿	(26.6)	4.3	(16.0)	ロクロ	染付・透明	内:菊 柘榴 外:連続唐草		一重圏線	肥前	18C前半		48
154	磁器皿	—	—	(13.0)	ロクロ	染付・透明	内:草花		一重圏線	肥前	18C前半~中頃		
155	磁器皿	—	—	(11.6)	ロクロ	染付・透明	内:山水		大口年製? 一重圏線	肥前	18C前半~中頃	「大明年製」銘	
156	磁器皿	(21.2)	—	—	ロクロ	染付・透明	内:窓絵・花 櫻 外:連続唐草			肥前	18C前半~中頃		
157	磁器皿	—	—	—	ロクロ	染付・透明	内:宝		□□成□年製 一重圏線	肥前	18C前半~中頃	「大明成化年製」銘 ハリ支え	
158	磁器皿	(11.8)	3.8	4.2	ロクロ	白磁			露胎	肥前	18C代	見込蛇ノ目釉剥ぎ	49
159	陶器皿	(11.8)	—	—	ロクロ	透明				瀬戸美濃	18C代		
160	磁器皿	(10.0)	1.9	6.3	ロクロ	染付・透明	内:松 笹 外:宝			肥前	18C中頃~末		
161	磁器皿	—	—	(15.8)	ロクロ	染付・青磁	内:笹 雲			肥前	18C後半~1810年代		
162	磁器皿	—	—	(6.6)	ロクロ	染付・透明	内:唐草			肥前	18C後半	見込蛇ノ目釉剥ぎ	
163	陶器皿	(12.6)	5.2	(5.2)	ロクロ	鉄釉				肥前 or 福岡	18C中頃~末	見込蛇ノ目釉剥ぎ 高台置付にアルミナ塗付	
164	磁器皿	5.7 (短径)	2.2	2.7 (短径)	型打	青磁	内:葉	陽刻		肥前	明治~		
165	磁器皿	—	—	(15.8)	ロクロ	染付・透明	内:軍配 外:連続唐草			肥前	18C末~幕末		
166	磁器皿	(29.2)	5.1	(17.2)	ロクロ	染付・透明	内:山水			肥前	1820~1860年代		
167	磁器皿	—	—	(10.9)	ロクロ	染付・透明	内:楼閣山水		一重圏線	肥前	18C末~19C前半		
168	陶器皿	(31.6)	—	—	ロクロ	白土・鉄釉	内:刷毛目			肥前	17C後半~18C前半		50
169	陶器鉢	(34.4)	—	—	ロクロ	白土・鉄釉 緑釉				肥前	17C後半~18C前半	二彩手	
170	陶器鉢	(41.4)	—	—	ロクロ	白土・鉄釉		象嵌		肥前	17C後半~18C前半	三島手	
171	陶器鉢	(29.0)	8.2	(10.4)	ロクロ	白土・鉄釉	内:刷毛目		露胎	肥前	18C前半		
172	陶器鉢	—	—	—	ロクロ	白土・鉄釉	内:刷毛目			肥前	17C後半~18C前半		
173	陶器片口	—	—	10.2	ロクロ	白土・鉄釉	内:刷毛目		露胎	肥前	17C代	胎土目積	
174	陶器片口	—	—	10.2	ロクロ	白土・鉄釉	内:刷毛目		露胎	肥前	18C前半~中頃		
175	陶器片口	(19.0)	—	—	ロクロ	白土・鉄泥				肥前	18C代		
176	磁器蓋	6.3	1.9	—	ロクロ	色絵・透明	外:菊			肥前	17C末~18C前半		51
177	磁器蓋	(6.8)	1.7	—	ロクロ	染付・透明	外:花唐草			肥前	18C前半~中頃		
178	磁器蓋	(9.0)	—	—	ロクロ	染付・透明	外:松葉			肥前	18C後半~19C初頭		
179	磁器蓋	(10.0)	—	—	ロクロ	染付・透明	外:唐草			肥前	18C後半~19C初頭		
180	陶器蓋	5.0	1.2	1.9	ロクロ	透明			露胎	関西	19C代		

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
181	磁器蓋	(10.6)	—	—	ロク口	染付・透明	外:椿草			肥前	18C前半		
182	磁器蓋	(11.6)	4.6	—	ロク口	染付・透明	外:青海波			肥前	18C後半		
183	磁器蓋	(5.8)	—	—	ロク口	青磁				中国 (龍泉窯系)	15C代		
184	陶器蓋	(7.8)	—	—	ロク口	白土・鉄釉	外:刷毛目			肥前	18C代		
185	磁器蓋物	(10.4)	—	—	ロク口	青磁・透明				肥前	17C末~18C初頭	No186と同一個体	
186	磁器蓋物	—	—	(7.2)	ロク口	青磁・透明		蛇ノ目釉剥ぎ して鉄錆塗布		肥前	17C末~18C初頭		
187	磁器蓋物	(8.6)	—	—	ロク口	染付・透明	外:七宝			肥前	18C代		
188	磁器蓋物	(11.4)	—	—	ロク口	染付・透明	外:松皮菱			肥前	18C後半~19C初頭		
189	磁器蓋物	—	—	(7.8)	ロク口	染付・透明	外:唐草		二重圈線	肥前	1690~18C前半		
190	磁器合子蓋	(6.4)	0.9	—	ロク口	染付・透明	外:文字「肥後 大 一 鳥犀」			肥前	19C前半	「肥後 大□ 一処入 鳥犀門」	
191	磁器合子蓋	(9.0)	1.5	—	ロク口	染付・透明	外:桜 唐草			肥前	18C後半~19C初頭		
192	磁器合子	(4.5)	2.0	(2.9)	ロク口	ルリ釉 透明				肥前	17C後半~18C代		
193	陶器向付	—	—	—	ロク口	染付 長石釉	見込:水?			志野	16C末~17C初頭		
194	陶器向付	—	—	(11.1)	ロク口	染付 長石釉	見込:鳥?			志野	16C末~17C初頭		
195	磁器仏飯器	—	—	4.2	ロク口	染付・透明	外:雨降		露胎	肥前	18C代		
196	磁器鉢	(10.5)	—	—	ロク口 型打	染付・透明	内:楼閣山水 外:連続唐草			肥前	18C中頃~1780年代		52
197	磁器鉢	(13.7)	—	—	ロク口 型打	染付・透明	内:梅紫ぎ 外:窓絵に山水 菊花			肥前	19C初頭~幕末	六角鉢	
198	陶器鉢	(16.9)	7.9	(6.6)	ロク口					関西	18C後半~19C初頭	三足ハマ痕	
199	磁器鉢	—	—	(8.9)	ロク口	染付・透明	内:葉			肥前	18C後半~19C初頭		
200	陶器瓶	(3.2)	—	—	ロク口					備前?	17C~18C前半		
201	磁器瓶	(4.1)	—	—	ロク口	透明				肥前	18C後半~19C中頃		
202	磁器瓶	—	—	(6.1)	ロク口	染付・透明				肥前	17C後半		
203	磁器瓶	—	—	(6.4)	ロク口	染付・透明				肥前	1630~1640年代		
204	陶器瓶 or 蓋物	—	—	(5.0)	ロク口					九州	18C~		
205	磁器瓶	1.9	15.4	5.2	ロク口	染付・透明	外:植物			肥前	18C後半		
206	磁器瓶	—	—	—	板作り	染付・透明	外:松			肥前	18C前半~中頃	角瓶 No206と同一個体?	
207	磁器瓶	—	—	—	板作り	染付・透明	外:山水 松			肥前	18C前半~中頃	角瓶 No205と同一個体?	
208	陶器瓶	—	—	(9.8)	ロク口	黄褐色釉				瀬戸美濃	18C代		
209	陶器銚子	—	—	(5.4)	ロク口	白土・鉄釉 透明	外:梅樹			関西	19C代		
210	磁器香炉	—	—	(4.4)	型打	染付・透明	外:禪 紗綾形陰刻			肥前	17C末~18C初頭	八角香炉	54

法量 () は反転復原径

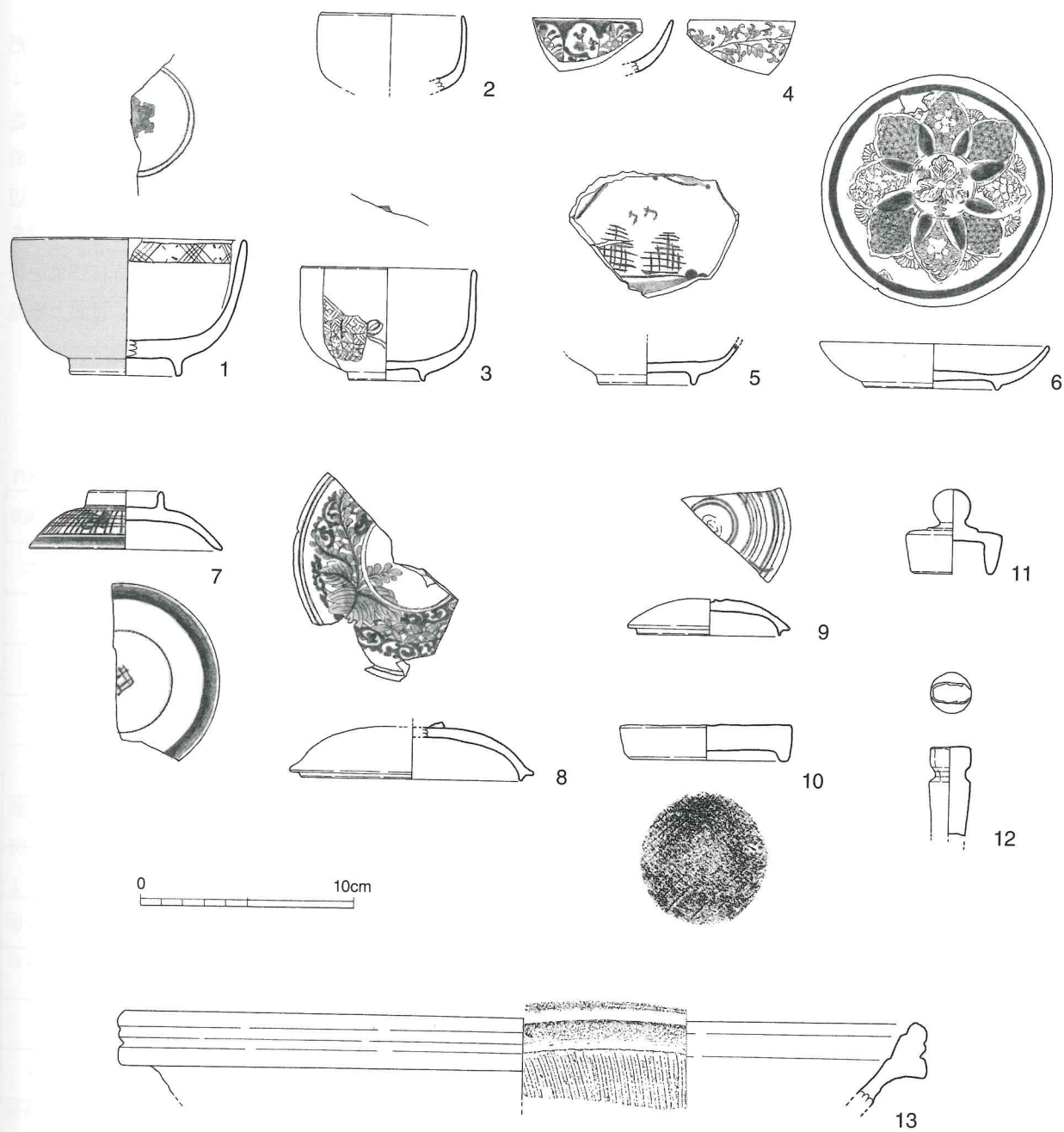
番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
211	陶器香炉	(10.8)	6.2	4.8	ロクロ	鉄絵・透明	外:草		露胎	肥前	17C末~18C前半	京焼風陶器	
212	磁器香炉	(6.8)	—	—	ロクロ	染付・透明	外:唐草			肥前	18C前半		
213	陶胎火容	—	—	6.1	ロクロ	染付・透明				肥前	18C前半		
214	陶胎火容	—	—	(5.5)	ロクロ	染付・透明			鉄泥	肥前	18C前半		
215	磁器火容	11.8	7.9	5.2	ロクロ	青磁				肥前	18C中頃~末		
216	磁器火容	—	—	4.8	ロクロ	青磁				肥前	18C中頃~末		
217	磁器火容	—	—	6.0	ロクロ	青磁				肥前	18C中頃~末		
218	陶器火容	—	—	(7.6)	ロクロ	透明			露胎	関西	18C後半~		
219	土師火容	—	—	(14.8)	ロクロ	白土			練り込み		18C後半~		
220	磁器火容	—	—	—	ロクロ	染付・透明	外:植物			肥前	18C代		
221	磁器香炉	—	—	—	ロクロ	青磁				中国	15C代		
222	陶器火容	11.5	6.8	10.6	ロクロ				扇型刻印	備前?			
223	陶器火容	(11.4)	5.8	(10.3)	ロクロ								
224	陶器火容	(11.2)	6.1	(10.7)	ロクロ								
225	陶器火容	(11.8)	7.2	(12.2)	ロクロ								
226	陶器火容	(11.4)	6.6	(11.4)	ロクロ								
227	陶器火容	(10.8)	6.9	(10.7)	ロクロ								
228	陶器火容	(9.9)	—	—	ロクロ								
229	陶器鉢	(11.2)	—	—	ロクロ	透明	外:山水		露胎	肥前	17C末~18C初頭	京焼風陶器 水指 or 火容	
230	陶器蓋	(6.5)	2.2	4.1	ロクロ	透明				関西	18C後半~		55
231	陶器蓋	(5.8)	1.8	(4.6)	ロクロ	鉄釉				九州 or 関西	18C後半~		
232	陶器蓋	6.2	1.9	4.5	ロクロ	鉄釉			糸切り (右)	九州	18C後半~		
233	陶器蓋	7.5	2.8	4.2	ロクロ	鉄釉				九州 or 関西	18C後半~		
234	陶器蓋	(6.3)	—	—	ロクロ	緑釉・鉄釉				関西	18C後半~		
235	陶器土瓶	(10.1)	—	(8.6)	ロクロ	鉄釉・白釉				九州	19C		
236	陶器土瓶	—	—	—	ロクロ	鉄釉					18C後半~		
237	陶器急須	—	—	—	ロクロ					関西	19C	素焼	
238	陶器行平	—	—	—	型打	鉄釉	把手:軍配			関西	18C後半~		
239	陶器蓋	13.4	4.1	—	ロクロ	白土・緑釉 鉄泥	外:飛びガンナ			関西	18C後半~		
240	陶器蓋	(15.0)	—	—	ロクロ	透明				関西	18C後半~		

法量 () は反転復原径

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
241	陶器鍋	(18.5)	-	-	ロクロ	鉄 釉				九州 or 関西	18C後半～		
242	陶器鍋	(19.4)	-	-	ロクロ	鉄 釉				関西	18C後半～		
243	陶器 灯明受皿	(12.4)	2.6	(4.8)	ロクロ	透 明			露 胎	関西	18C後半～		
244	陶器 灯明受皿	(11.0)	2.2	4.5	ロクロ	透 明			露 胎	関西	18C後半～		
245	陶器盆?	-	-	(5.0)	ロクロ				糸 切り (右)			焼き締め陶器	
246	陶器 灯明受皿	(8.8)	-	-	ロクロ					九州	18C後半～	素焼	
247	陶器甕	-	-	(12.6)	タタキ	薬 灰 釉				福岡	16C末～17C初		56
248	陶器甕	(13.6)	-	-	ロクロ	黄褐色釉				福岡 or 肥前	18C代		
249	陶器甕	(35.8)	-	-	ロクロ	鉄 釉				関西	18C後半～19C		
250	陶器火鉢	(14.2)	-	-	ロクロ	緑 釉				瀬戸美濃	18C後半～19C		
251	陶器火鉢	(14.7)	-	-	ロクロ	緑 釉				瀬戸美濃	18C後半～19C		
252	磁器水滴	-	-	-	型 打	染付・透明	外:菊花	陰 刻		肥 前	18C中頃～19C前半		
253	磁器根付	-	-	-	型 打	白 磁	福祿寿			肥 前	18C～幕末	背面に2個の紐通し孔	
254	磁器水滴	-	-	-	型 打	色絵・透明	人形			肥 前	17C後半～18C前半		
255	磁器水滴	-	-	-	型 打	色絵・透明	人形			肥 前	17C後半～18C前半		
256	磁器人形	-	-	-	型 打	色絵・透明	鳥?			肥 前	17C後半～18C前半		
257	ガラス瓶	2.4	6.5	4.6						[M] 陽 刻	近代～		
258	ガラス瓶	-	-	4.3							近代～		
259	ガラス瓶	1.9	9.2	3.1							近代～		
260	磁器蓋	1.9	2.2	0.9							近代～	鉄製留具	
261	陶器播鉢	-	-	-	ロクロ					備 前	16C代		57
262	陶器播鉢	-	-	-	ロクロ					堺	18C前半～中頃		
263	陶器播鉢	-	-	(2.6)	ロクロ					備 前	17C初頭		
264	陶器播鉢	(28.4)	11.2	(13.4)	ロクロ					堺	18C前半～中頃		
265	陶器播鉢	(30.0)	-	-	ロクロ					堺	18C後半		
266	陶器播鉢	(34.4)	-	-	ロクロ					堺	18C後半		
267	陶器播鉢	-	-	(16.8)	ロクロ					堺	18C前半～中頃		58
268	陶器播鉢	10.0	-	-	ロクロ					堺	1820～幕末		
269	陶器播鉢	-	-	(14.0)	ロクロ								
270	陶器播鉢	-	-	(8.0)	ロクロ					肥 前	17C前半		

法量 () は反転復原径

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
271	陶器播鉢	(17.0)	—	—	ロク口					丹波	17C代		
272	陶器播鉢		—	—	ロク口					丹波	17C代		
273	陶器播鉢	(23.0)	—	—	ロク口	鉄泥					19C代?	第17図88と同一個体?	
274	陶器播鉢	(41.0)	—	—	ロク口	鉄泥				肥前	18C前半~中頃	志田窯	
275	小師小皿	(9.4)	—	—	手捏ね								59
276	土師小皿	9.9	1.8	—	手捏ね							口縁部スス付着	
277	土師小皿	(10.2)	—	—	手捏ね							口縁部スス付着	
278	小師小皿	(10.4)	—	—	手捏ね								
279	小師小皿	(10.8)	—	—	ロク口								
280	土師小皿	(10.4)	2.0	—	ロク口								
281	土師小皿	—	—	4.2	ロク口	柿釉			糸切り (右)				
282	土師蓋	7.1	2.0	—	板作り 内面布目					堺			
283	土師蓋	7.3	2.4	—	板作り 内面布目					堺			
284	土師蓋	7.4	2.0	—	板作り 内面布目					堺			
285	土師蓋	7.1	1.6	—	板作り 内面布目					堺			
286	土師蓋	(7.5)	2.0	—	板作り 内面布目		刻印: □壺塩 □□			堺?	17C末~18C初頭	「御壺塩師難波浄因」or 「御壺塩師堺湊伊織」?	
287	土師蓋	5.7	1.2	—	ロク口 ミガキ					京都 (深草)		刻印は「深」以外判読 不能	
288	土師身	4.7	9.2	5.6	板作り 内面布目		刻印: □□□□ □□□□			堺?	17C末~18C初頭	「御壺塩師堺湊伊織」?	
289	土師三足ハマ	6.8	1.2	—	ロク口				糸切り (右)	関西		窯道具	
290	土師皿?	(21.8)	1.4	(21.0)	ロク口 ミガキ								60
291	瓦質焜炉	(16.5)	—	—	板作り ミガキ							三足 火窓	
292	瓦質焜炉	—	—	(18.7)								外: ハケ状工具痕	
293	土師焙烙	(35.6)	—	—	ロク口						18C末~19C前半		
294	土師焙烙	(31.6)	—	—	ロク口						18C後半		
295	土師焙烙	(30.4)	—	—	ロク口						18C末~19C前半		
296	土師焙烙	(43.0)	—	—	ロク口								



第46図 III層出土遺物 (S=1/3)

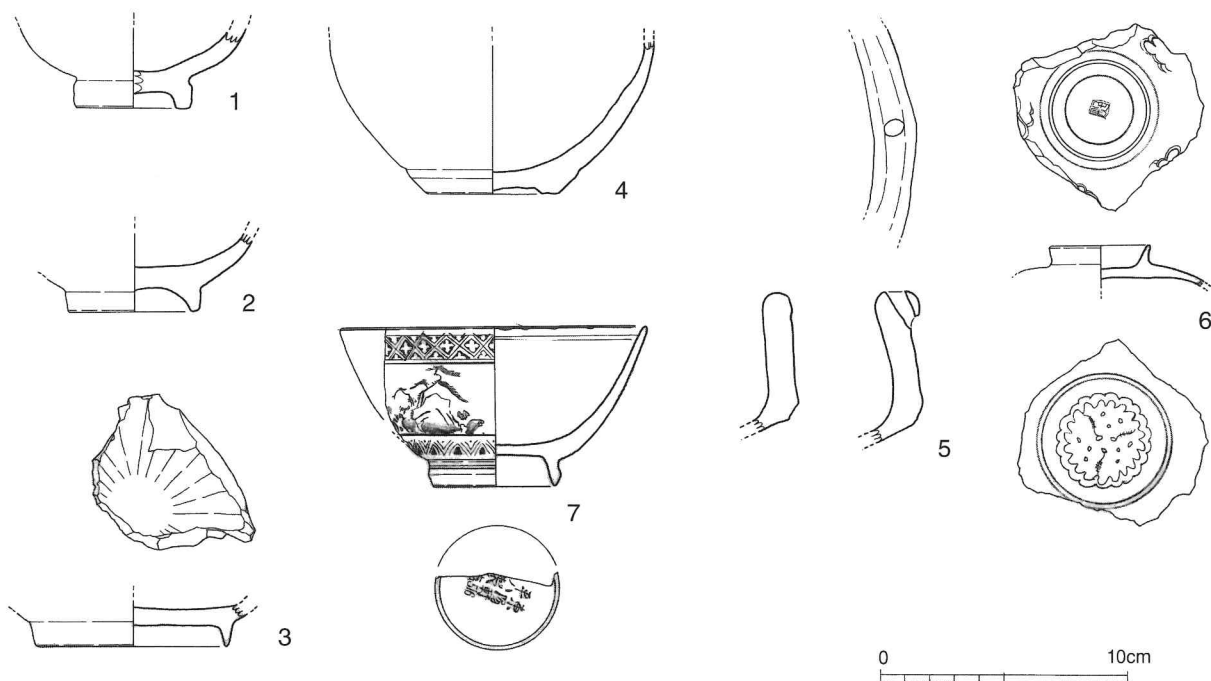
Ⅲ層（第46図・第7表）

1は肥前青磁染付碗で見込みの五弁花はコンニャク印判による。18世紀後半の製品である。2は18世紀代の肥前白磁碗。3は肥前染付磁器湯呑碗で年代は1780～1810年代に比定される。4は18世紀前半、5は18世紀後半～19世紀中頃の肥前染付磁器皿である。6は色絵磁器皿。近代以降の製品で産地は不明。7～9は肥前染付磁器蓋である。7は1820～1860年代に生産された端反碗に伴う蓋である。8は比較的上手の製品で17世紀末～18世紀前半、9は18世紀後半～19世紀初頭にそれぞれ比定される。10は土師質土器焼塩壺蓋で内面には布目が残る。渡辺誠のB類、小川望のイ②類に属する⁽⁴⁰⁾。11・12は近代以降のガラス蓋である。13は陶器播鉢で口縁部内面に段をもち播目は口縁部付近で強くナデ消されている。白神典之のⅡ型式、堀内秀樹Ⅲ-a 1類⁽⁴¹⁾に分類され18世紀後半に比定される。Ⅲ層出土遺物の年代は18世紀～近代に属し17世紀以前に溯るものは認められない。Ⅲ層と整地層は調査の段階でも明確な区分ができず、遺物の年代も重複するためⅢ層の年代を特定するのは難しい。

第7表 Ⅲ層出土陶磁器・土器観察表

法量（ ）は反転復原径

番号	器種	法量（cm）			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
1	磁器碗	(10.9)	6.4	(5.1)	ロクロ	染付・青磁	内：四方襷 見込：五弁花	コンニャク 印版		肥前	18C後半		72
2	磁器小杯	(6.6)	—	—	ロクロ	白磁				肥前	18C代		
3	磁器碗	(8.1)	5.2	(3.5)	ロクロ	染付・透明	外：宝			肥前	1780～1810年代		
4	磁器皿	—	—	—	ロクロ	染付・透明	内：草花 外：連続唐草			肥前	18C前半		
5	磁器皿	—	—	4.3	ロクロ	染付・透明	内：風景			肥前	18C後半～19C中頃		
6	磁器皿	10.8	2.1	6.4	ロクロ	色絵・透明	内：花卉				近代～		
7	磁器蓋	(9.0)	2.7	(3.2)	ロクロ	染付・透明	外：格子			肥前	1820～1860年代	端反碗蓋	
8	磁器蓋	(10.2)	—	—	ロクロ	染付・透明	外：桐唐草			肥前	17C末～18C前半		
9	磁器蓋	(6.6)	—	—	ロクロ	染付・透明	外：円圈			肥前	18C後半～19C初頭		
10	土師 焼塩壺蓋	(7.5)	1.7	—	板作り 内面布目					堺			
11	ガラス蓋	3.8	3.9	—							近代～		
12	ガラス栓	—	—	—							近代～		
13	陶器播鉢	(17.0)	—	—	ロクロ					堺	18C後半		



第47図 1・2トレンチ、2号埋桶、廃屋土坑出土遺物 (S=1/3)

1・2トレンチ (第47図・第8表)

1・2は肥前陶器碗で、1は1600～1630年代に製作された砂目積段階のもの、2は17世紀末～18世紀前半の京焼風陶器である。3は型打成形の肥前白磁皿で年代はやはり17世紀末～18世紀前半に比定される。4は1600～1630年代の肥前陶器壺。5は土師質土器焙烙で粘土を貼り付けた把手部分に貫通孔を有する。難波洋三の把手a1類、府内城三ノ丸遺跡のⅢ期に対応する⁽⁴²⁾。1・2トレンチは1号側溝に伴う遺構の有無を確認するため整地層の下層を掘り下げたものである。遺構は検出できなかったが、遺物の年代は18世紀前半以降に下るものは認められず1号側溝の埋没年代と同時期のもので構成されている。

2号埋桶 (第47図・第8表)

6は18世紀末～19世紀初頭の肥前染付磁器蓋で、2号埋桶底板付近で発見された。よって遺構の埋没年代は19世紀以降と考えられる。

廃屋土坑 (第47図・第8表)

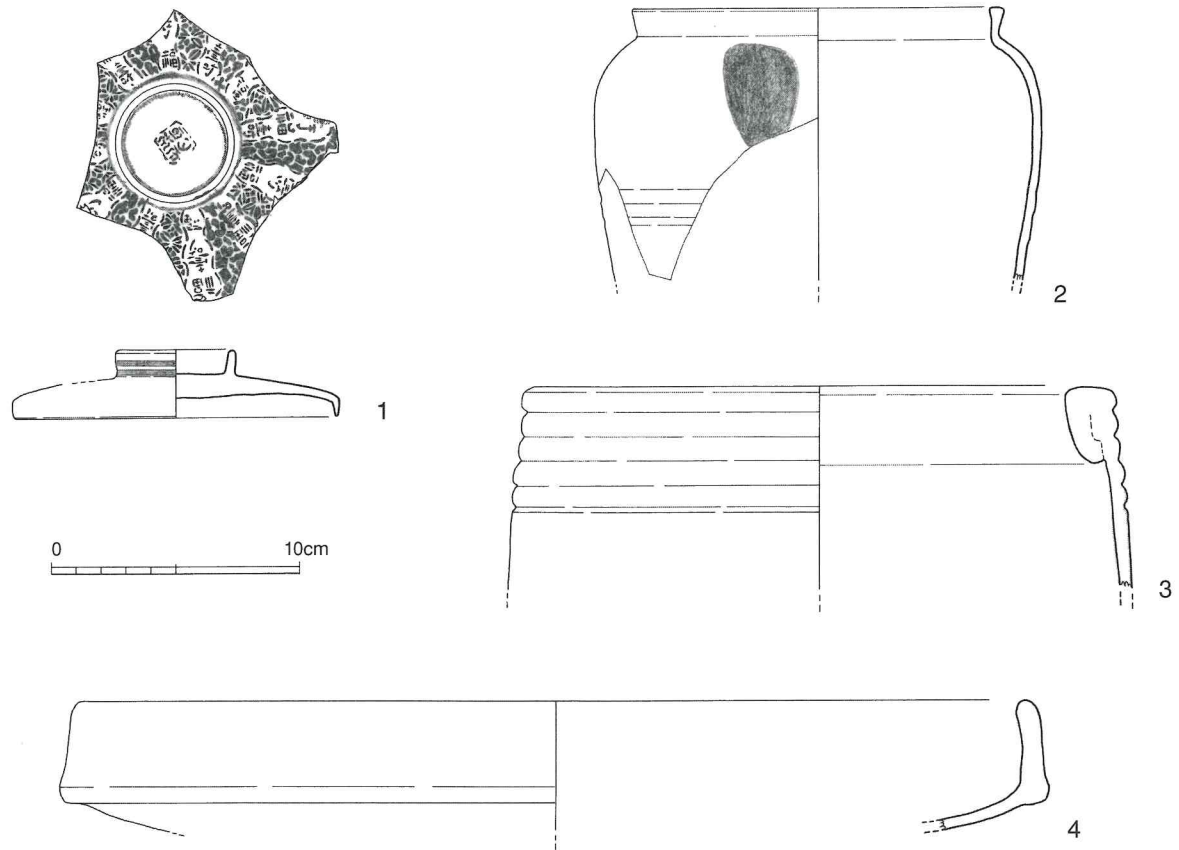
7は瀬戸美濃産染付磁器碗である。装飾はゴム印で高台内に「東陽軒平八製 岐516」という銘をもつ。「岐516」とは戦時統制下における陶磁器生産業者の番号を意味し1945年(昭和20)以前に生産されたものである⁽⁴³⁾。

表土層 (第48図・第9表)

1は肥前染付磁器蓋で外面の文様は型紙摺による。明治前半の製品。2は関西系と考えられる陶器甕、3は瓦質土器火鉢である。いずれも製作年代は不明である。4は土師質土器焙烙で府内城三ノ丸遺跡のⅤa期に対応するタイプである。

試掘調査 (第49～54図・第10表)

試掘調査出土遺物を参考までに掲載する。個々の説明については観察表を参照していただきたい。



第48図 表土層出土遺物 (S=1/3)

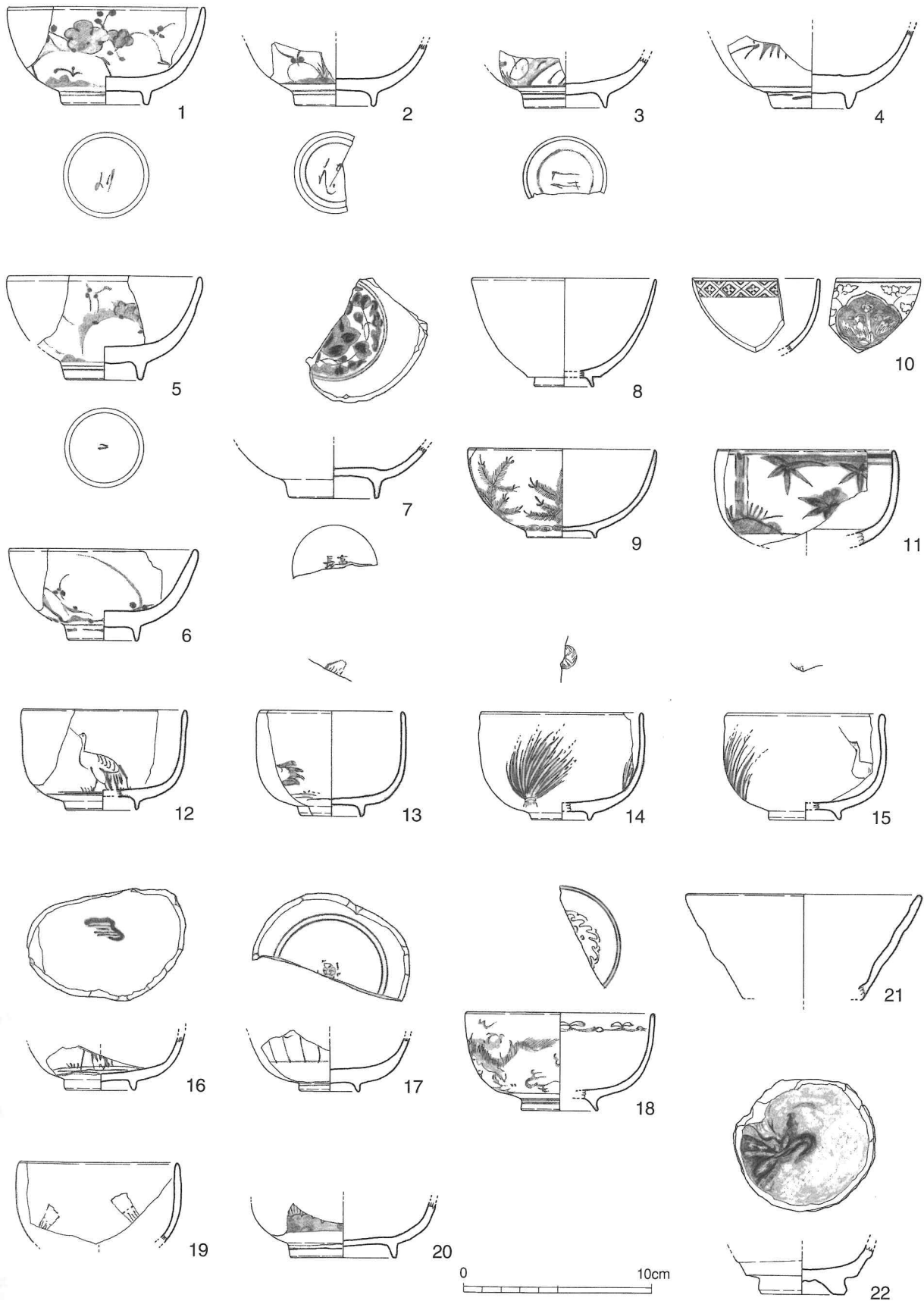
第8表 1・2トレンチ、2号埋桶、廃屋土坑出土陶磁器・土器観察表 法量()は反転復原径

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
1	陶器碗	-	-	(4.6)	ロクロ	長石釉			露胎	肥前	1600~1630年代		74
2	陶器碗	-	-	5.3	ロクロ	透明				肥前	17C末~18C前半	京焼風陶器 呉器手碗	
3	磁器皿	-	-	(7.6)	ロクロ	白磁				肥前	17C末~18C前半		
4	陶器壺	-	-	(5.3)	ロクロ	灰釉			露胎	肥前	1600~1630年代		
5	土師焙烙	-	-	-	ロクロ						18C前半~中頃		
6	磁器蓋	-	-	4.1	ロクロ	染付・透明	外:雲		変形字銘	肥前	18C末~19C初頭		
7	磁器碗	(12.3)	6.4	5.0	ロクロ	染付・透明	外:四方襷 岩松 連弁	ゴム印	東陽軒平八製 岐「516」	瀬戸美濃	昭和~1945		

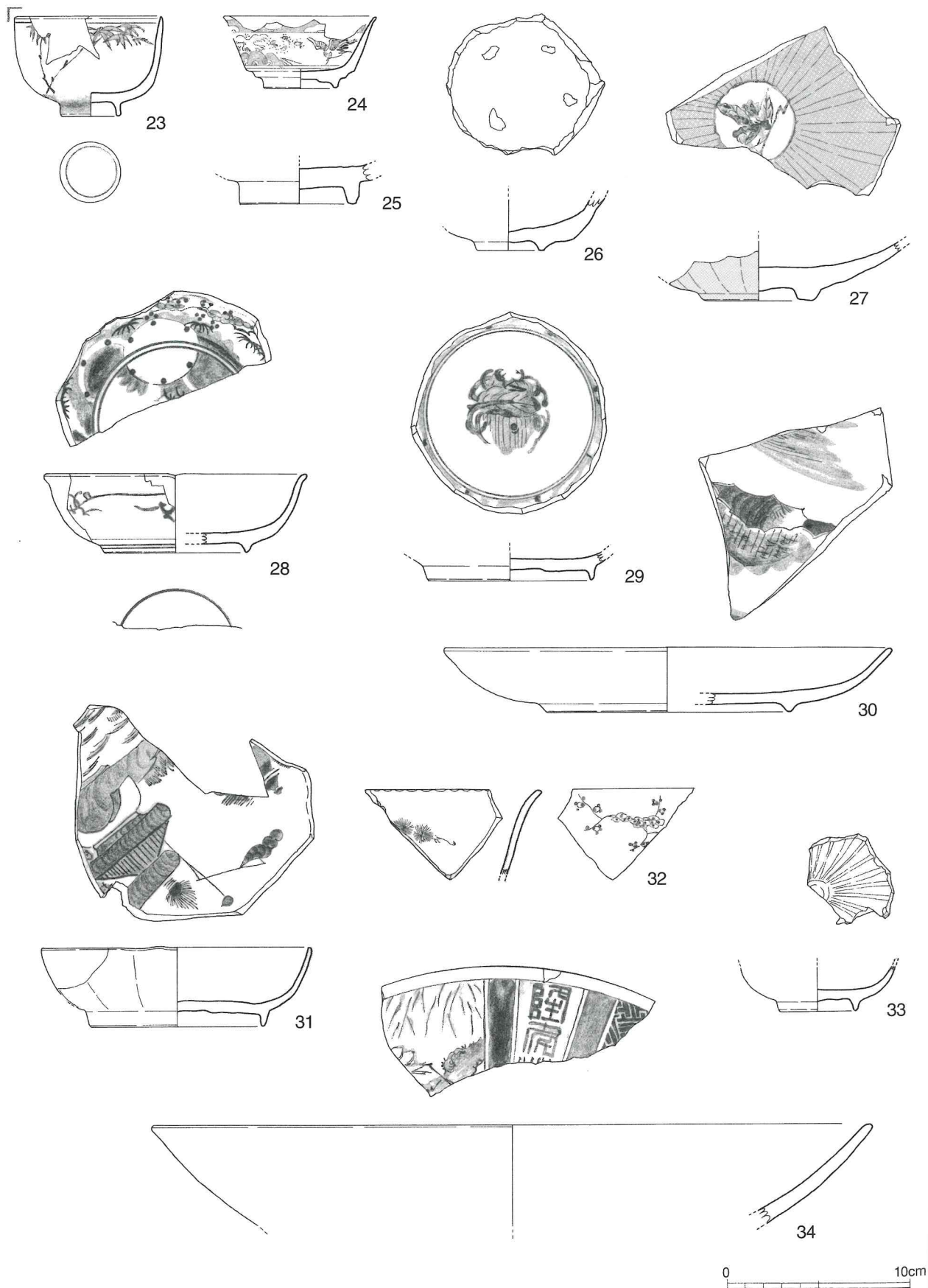
第9表 表土層出土陶磁器・土器観察表

法量()は反転復原径

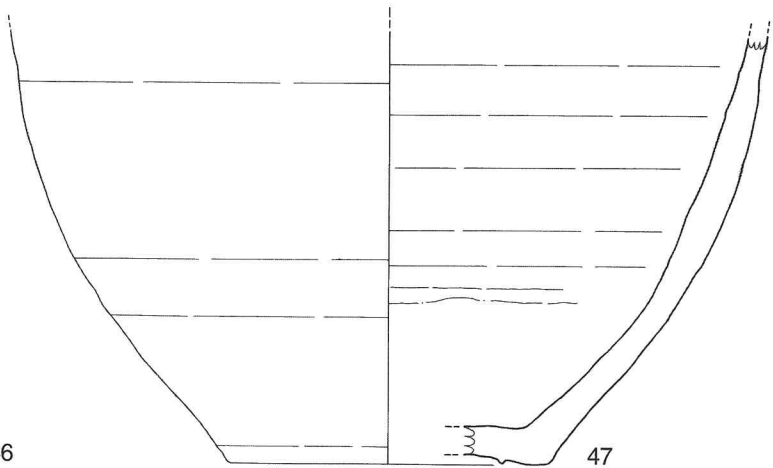
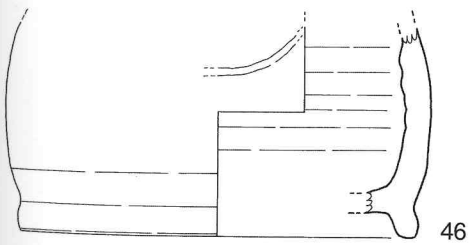
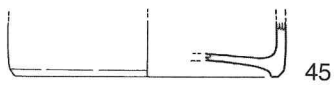
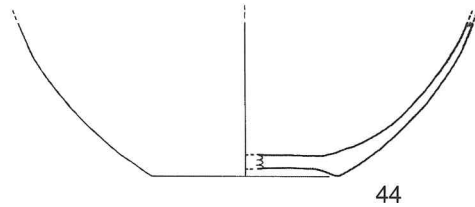
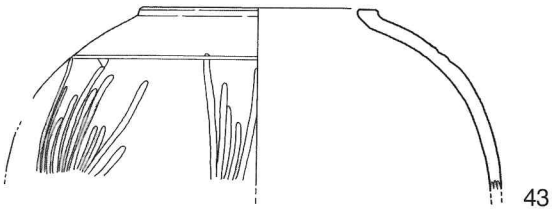
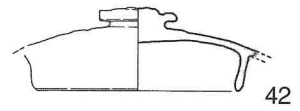
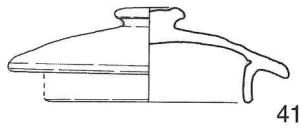
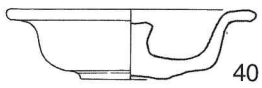
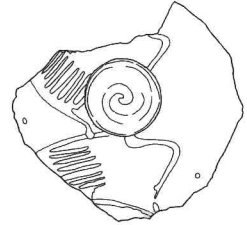
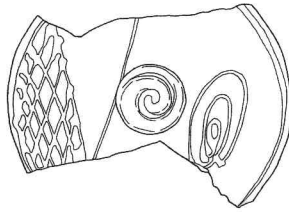
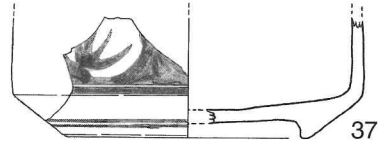
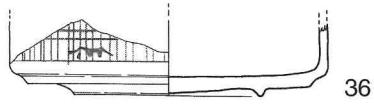
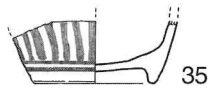
番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
1	磁器蓋	(13.0)	2.7	(4.6)	ロクロ	染付・透明	外:文字「福寿」	型紙摺		肥前	明治前半	コバルト	75
2	陶器壺	(14.8)	-	-	ロクロ	鉄釉・透明				関西?			
3	瓦質火鉢?	(23.0)	-	-	ロクロ								
4	土師焙烙	(38.4)	-	-	ロクロ						18C末~19C前半		



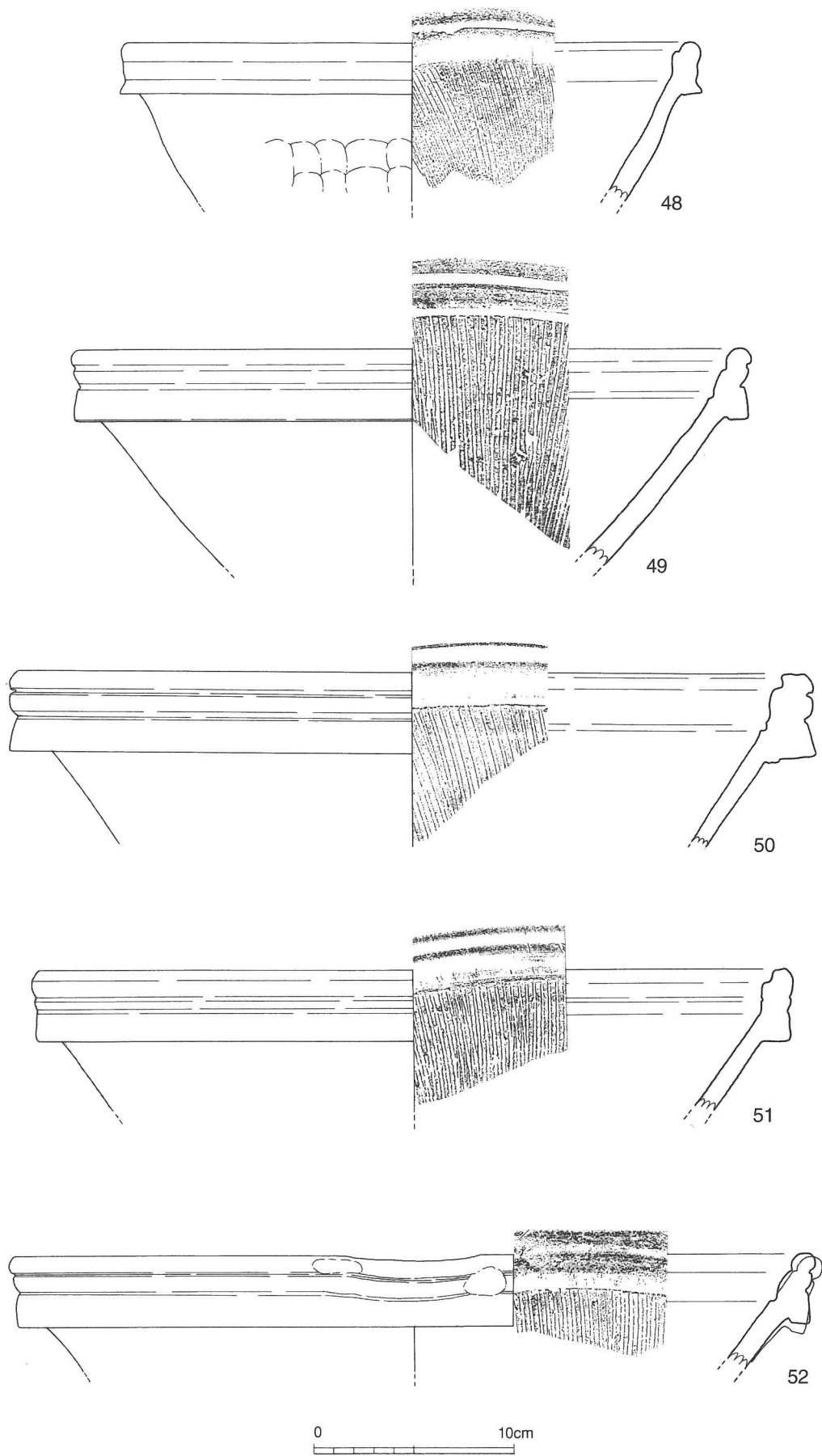
第49図 試掘調査出土遺物 (1) (S=1/3)



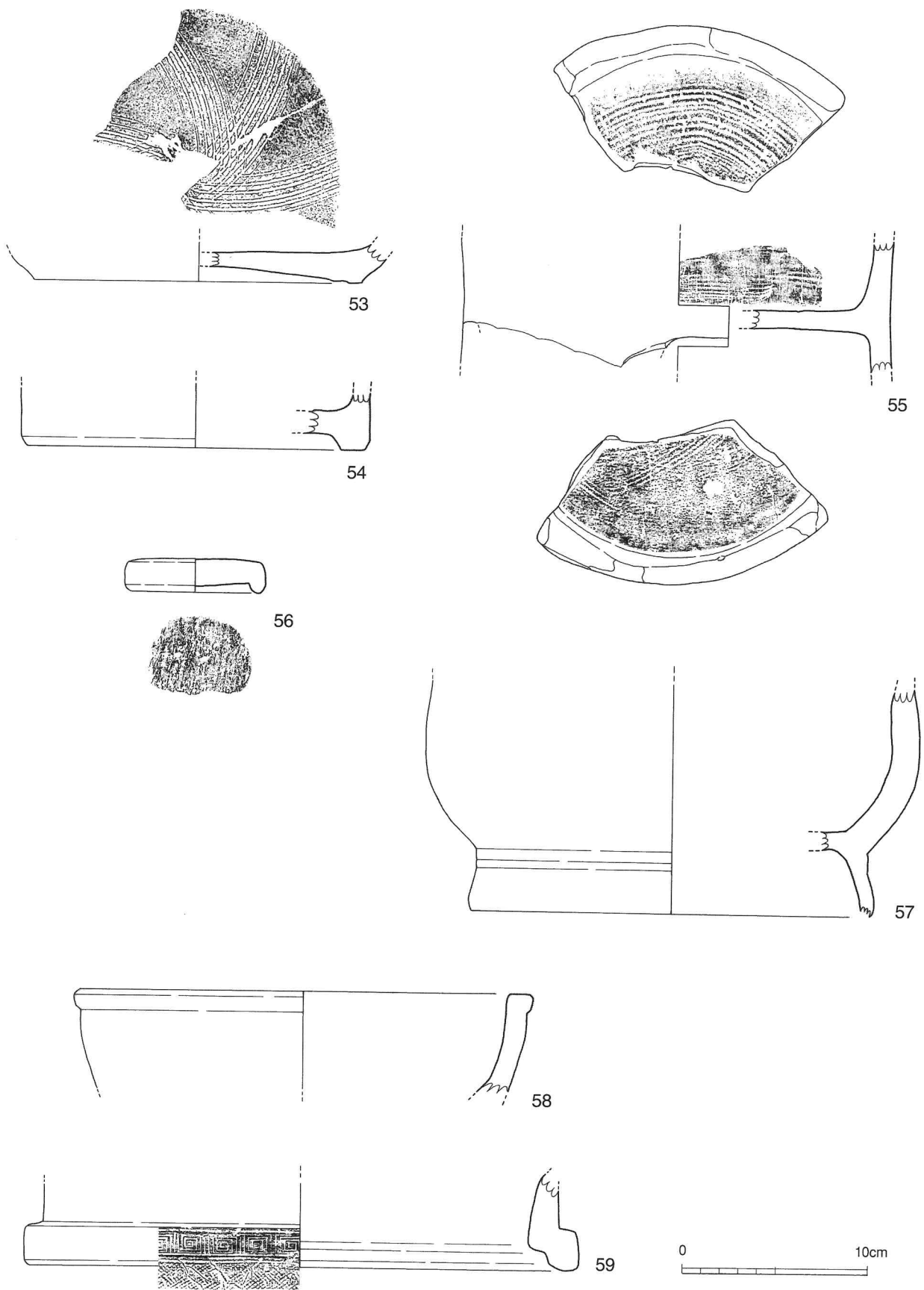
第50図 試掘調査出土遺物(2) (S=1/3)



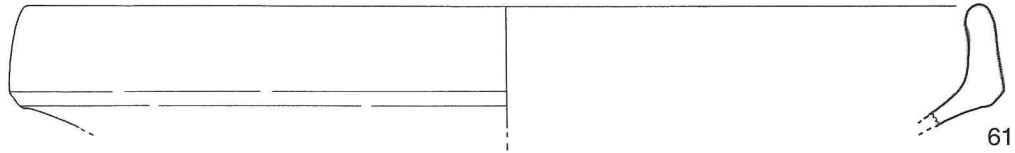
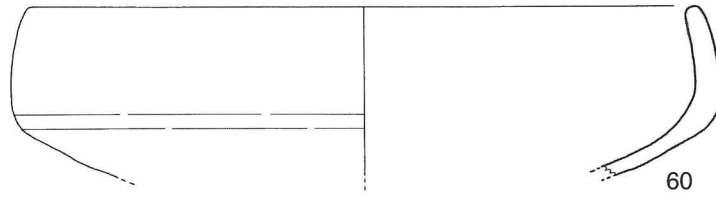
第51図 試掘調査出土遺物(3) (S=1/3)



第52図 試掘調査出土遺物（4）（S=1/3）



第53図 試掘調査出土遺物（5）（S=1/3）



第54図 試掘調査出土遺物（6）（S=1/3）

第10表 試掘調査出土陶磁器・土器観察表

法量（ ）は反転復原径

番号	器種	法量（cm）			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
1	磁器碗	(10.4)	5.1	(4.6)	ロク口	染付・透明	外：梅樹		大明年製 崩れ銘	肥前	18C前半～中頃		76
2	磁器碗	—	—	(4.2)	ロク口	染付・透明	外：草花		大明年製	肥前	18C前半～中頃		
3	磁器碗	—	—	4.4	ロク口	染付・透明	外：草花		大明年製	肥前	18C前半～中頃		
4	磁器碗	—	—	4.0	ロク口	染付・透明	外：竹笹			肥前	18C中頃～後半		
5	磁器碗	(10.3)	5.4	(4.2)	ロク口	染付・透明	外：雪輪 梅樹		銘あり	肥前	18C後半		
6	磁器碗	(9.9)	4.8	3.8	ロク口	染付・透明	外：梅樹			肥前	18C後半		
7	磁器碗	—	—	(4.6)	ロク口	染付・透明	見込：花唐草		富貴長春	肥前	18C後半		
8	陶器碗	(9.8)	5.7	(3.1)	ロク口	透明			露胎	関西	18C後半	小杉碗	
9	磁器碗	(10.0)	4.7	(3.8)	ロク口	染付・透明	外：若松 渦			肥前	1780～1810年代		
10	磁器碗	—	—	—	ロク口	色絵・透明	内：四方襷 外：唐花 唐草 区画文様			肥前	18C代		
11	磁器碗	(9.5)	—	—	ロク口	染付・透明	外：竹笹			肥前	1780～1810年代		
12	磁器碗	(8.8)	5.3	(3.8)	ロク口	染付・透明	外：鶴			肥前	1780～1810年代		
13	磁器碗	—	—	3.8	ロク口	染付・透明	外：鶴			肥前	1780～1810年代		
14	磁器碗	(8.6)	5.6	(3.2)	ロク口	染付・透明	外：稲束 見込：響			肥前	1780～1810年代		
15	磁器碗	(8.2)	5.1	(3.7)	ロク口	染付・透明	外：鶴 稲束			肥前	1780～1810年代		
16	磁器碗	—	—	3.8	ロク口	染付・透明	外：鶴			肥前	1780～1810年代		

法量 () は反転復原径

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
17	磁器碗	-	-	(3.3)	ロク口	染付・透明	見込:五弁花			肥前	1780~1810年代		
18	磁器碗	(10.1)	5.1	(4.1)	ロク口	染付・透明	外:雲龍			肥前	18C後半~19C初頭		
19	磁器碗	(8.5)	-	-	ロク口	染付・透明	外:宝			肥前	1780~1810年代		
20	磁器碗	-	-	(5.6)	ロク口	染付・透明				肥前	18C末~幕末		
21	陶器碗	(12.4)	-	-	ロク口	藁灰釉・鉄釉 白土				萩	19C		
22	陶器碗	-	-	4.4	ロク口	藁灰釉・鉄釉		露胎		萩	19C		
23	磁器碗	8.0	3.2	5.4	ロク口	染付・透明	外:竹笹			瀬戸美濃	近代~		77
24	磁器碗	8.4	4.0	3.9	ロク口	染付・透明	外:鳥岩	露胎		瀬戸美濃	近代~		
25	陶器皿	-	-	(6.5)	ロク口	透明				肥前 (内野山)	17C後半~18C前半	見込蛇ノ目釉剥ぎ	
26	陶器皿	-	-	3.7	ロク口	灰釉		露胎		肥前	1590~1610年代	胎土目積	
27	磁器皿	-	-	5.6	ロク口 型打	染付・青磁	見込:植物			波佐見 (三股)	1630~1640年代		
28	磁器皿	(14.2)	4.2	(7.8)	ロク口 型打	染付・透明	内:雪輪松竹梅 外:連続唐草	一重圏線		肥前	18C前半		
29	磁器皿	-	-	8.8	ロク口 型打	染付・透明	見込:宝			肥前	18C後半	蛇ノ目凹形高台	
30	磁器皿	(24.1)	3.5	(13.3)	ロク口 型打	染付・透明				肥前 (志田)	1820~1860年代		
31	磁器皿	(14.2)	4.3	9.4	ロク口 型打	染付・透明	見込:楼閣			肥前	18C後半	蛇ノ目凹形高台	
32	磁器鉢	-	-	-	ロク口	染付・透明	内:松 外:?			肥前	18C末~幕末		
33	磁器皿	-	-	(4.3)	ロク口	白磁				肥前系	19C前半~幕末		
34	磁器皿	(39.5)	-	-	ロク口	染付・透明	内:綾杉鳥 変形字			肥前	18C後半~19C前半		
35	磁器瓶	-	-	4.9	ロク口	染付・透明				肥前	18C後半~19C前半		78
36	磁器段重	-	-	7.6	ロク口	染付・透明	外:格子笹			肥前	幕末		
37	磁器蓋物	-	-	(9.8)	ロク口	染付・透明	外:植物			肥前系			
38	磁器徳利	-	-	3.6	ロク口	染付・透明	外:松				近代~	宮地獄参拝記念	
39	陶器蓋	(7.4)	2.7	(4.2)	ロク口	鉄釉				関西 or九州	18C後半~	土瓶蓋	
40	陶器蓋	(9.5)	2.8	(3.6)	ロク口	灰釉?				九州?	18C後半~	土瓶蓋	
41	陶器蓋	8.0	3.8	-	ロク口	白土・透明	外:斜格子渦	イッチン掛け		関西	18C後半~	土瓶蓋	
42	陶器蓋	(8.3)	3.3	-	ロク口	白土・透明	外:鳥崩し	イッチン掛け		関西	18C後半~	土瓶蓋	
43	陶器土瓶	9.4	-	-	ロク口	鉄釉	外:葉			九州	18C後半~		
44	陶器土瓶	-	-	(7.5)	ロク口	透明				関西	18C後半~		
45	陶器火容	-	-	(10.6)	ロク口	透明				関西	18C~19C代		
46	陶器手焙	-	-	(15.9)	ロク口	灰釉				瀬戸美濃	18C~19C代		

法量（ ）は反転復原径

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
47	陶器甕	—	—	(12.8)	ロクロ	鉄 釉				九州	18C~19C代		
48	陶器播鉢	(28.2)	—	—	ロクロ							指オサエ痕	79
49	陶器播鉢	—	—	—	ロクロ					堺	18C後半		
50	陶器播鉢	(39.0)	—	—	ロクロ					堺	18C後半		
51	陶器播鉢	(37.2)	—	—	ロクロ					堺	18C後半		
52	陶器播鉢	—	—	—	ロクロ					堺	18C後半		
53	陶器播鉢	—	—	(17.6)	ロクロ					堺	18C前半~中頃		80
54	土師火鉢	—	—	(18.2)								外面ミガキ	
55	瓦質焜炉	—	—	—								内面・外面底部に ハケ状工具痕	
56	土師 焼塩壺蓋	— 7.0	— 1.6	— —	板作り 内面布目					堺			
57	土師火鉢	—	—	(21.6)									
58	土師捏鉢	(22.2)	—	—	ロクロ								
59	瓦質火鉢	—	—	(29.4)	ロクロ ミガキ		外:雷						
60	土師焙烙	(26.8)	—	—	ロクロ						18C後半		81
61	土師焙烙	(38.0)	—	—	ロクロ						18C末~19C前半		

(2) 瓦類 (第55～59図)

瓦類はコンテナにして33箱出土している。しかし遺存状態や文様の有無などによって、選択して取り上げたため実際に出土した量はこれよりかなり多い。さらに紙幅の関係から瓦当文様をもつ軒平瓦・軒丸瓦類の一部と鬼瓦のみを掲載することになった。また刻印を有する瓦については刻印の拓本のみを掲載した。

軒平瓦 瓦当文様の異なるものを提示した。

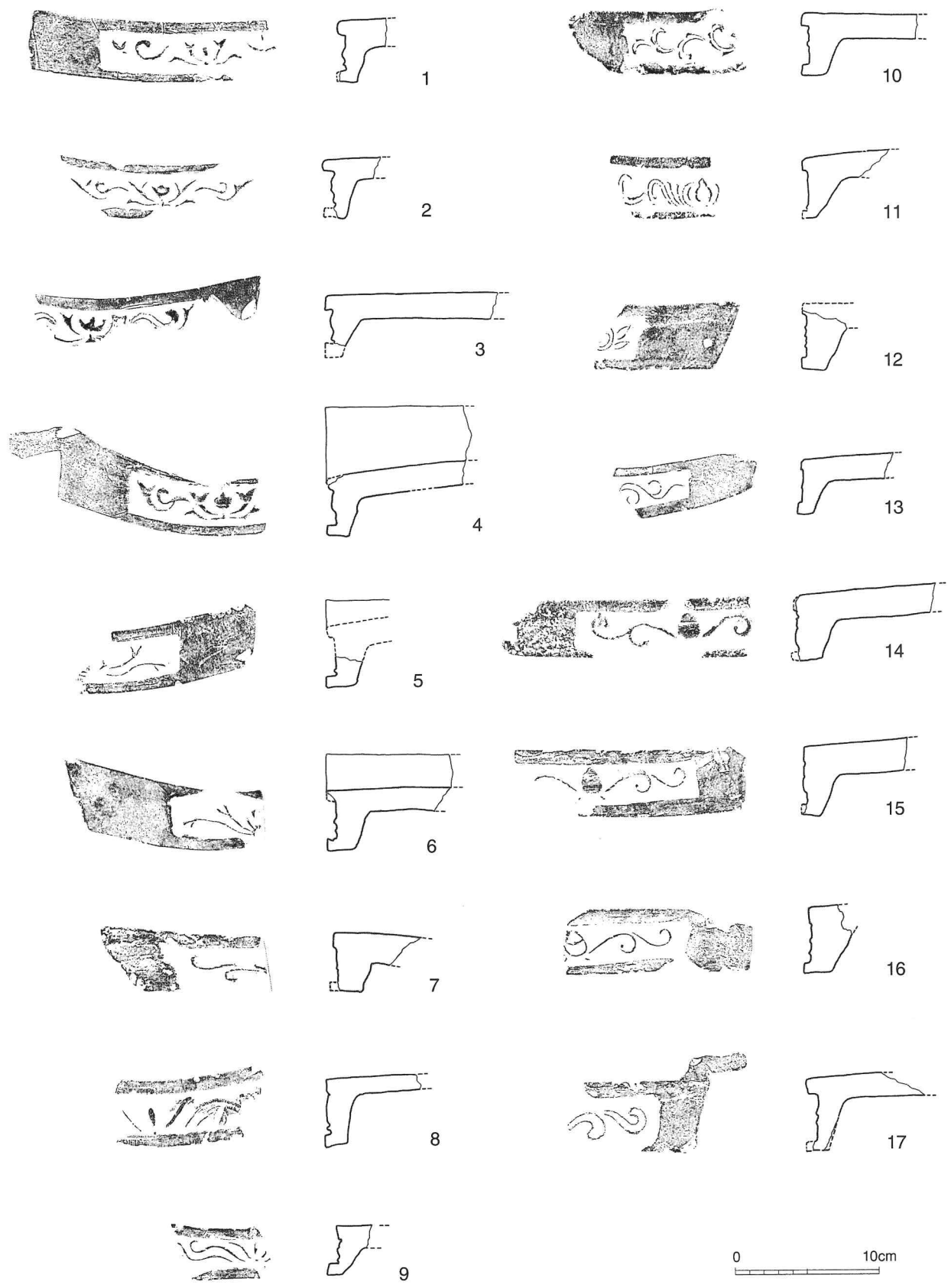
1～4はほぼ全体の文様分かるものである。1は中心飾りの3葉の下に珠点をもつ均整唐草文軒平瓦である。2～4も均整唐草文軒平瓦で、中心飾りに橘状文をもつ同一文様のヴァリエーションである。2は左右に伸びた唐草が細線であるのに対し3・4は肉厚であるのがそれぞれ特徴となっている。2・3は確認できないが4は軒棧瓦となる。5～13は欠損のため瓦当文様の一部しか確認できないものである。5・6は唐草文の形態が類似するが中心飾りが欠失するため同一文様かどうかは不明である。やはり均整唐草文軒平瓦と考えられる。8・9は三葉の下に珠点をもつ均整唐草文軒平瓦と考えられる。8の文様はやや肉厚9は細線で描かれ、瓦当の幅も8は9に比して大きい。14～17も軒平瓦であるが1～13とは異なり上面が平らである。基本的な形は板塀瓦とよばれるものに近い⁽⁴⁴⁾。14～16は中心飾りに宝珠をもつ均整唐草文軒平瓦である。同じモチーフを描いたものであるがそれぞれ細部に違いがみられる。

軒丸瓦 完形または瓦当径を復元できたもののみ、瓦当径の小さいものから大きいものの順で掲載した。

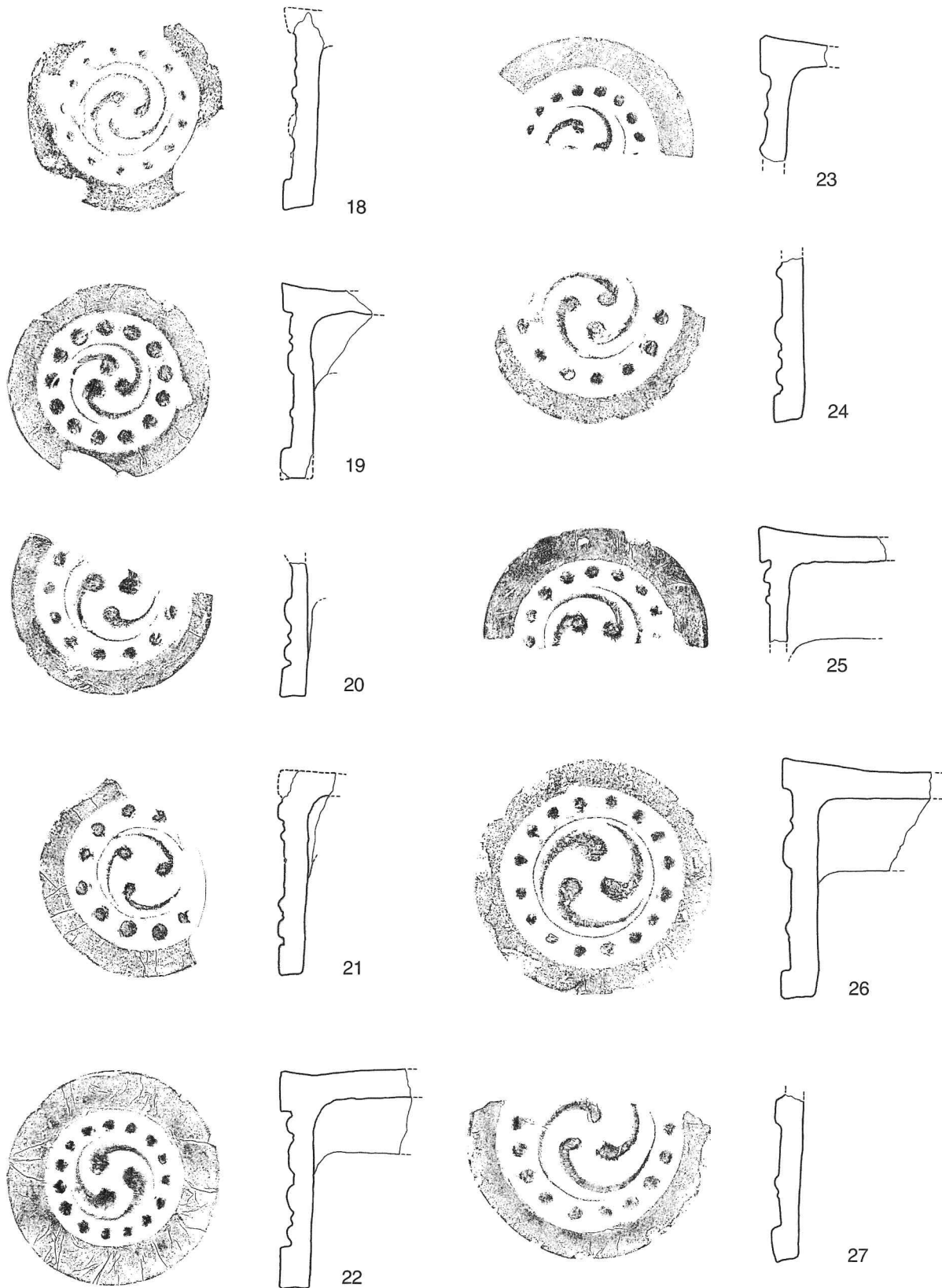
18は瓦当径13.5cm、左回転の巴文で周囲に13個の珠点を巡らす。巴の尾は接していない。19は瓦当径13.8cm、左回転の巴文で13個の珠点をもつ。尾は接していない。20は瓦当径13.9cm、左回転の巴文で珠点は13個になると予想される。尾は接していない。21は瓦当径14.0cm、左回転の巴文で珠点の復元数は12個である。珠点の内側に一重の圏線が巡り巴の尾はそれに接する。22は瓦当径が14.6cm、右回転の巴文で15個の珠点をもつ。巴の尾は接していない。23は復元瓦当径14.8cm、左回転の巴文で珠点は16個になると予想される。巴の尾は接していない。24は復元瓦当径15.0cm、左回転の巴文で珠点は13個になると予想される。尾は接していない。25は復元瓦当径が15.1cm、左回転の巴文で珠点は16個になると予想される。尾は接していない。26は瓦当径が16.0cm、左回転の巴文で16個の珠点をもつ。珠点の内側に一重の圏線が巡り尾はそれに接する。27は瓦当径が16.2cm、左回転の巴文で珠点は16個になると予想される。尾は接していない。28は瓦当径が16.5cm、左回転の巴文で16個の珠点をもつ。珠点の内側に一重の圏線が巡り巴の尾が接している。29は復元瓦当径が16.6cm、左回転の巴文で珠点は17個になると予想される。尾は接していない。30は復元瓦当径が17.0cm、左回転の巴文で珠点は17個になると予想される。尾は接していない。31～33は巴の周囲に珠点をもたないタイプのものである。瓦当径は順に15.2cm、15.6cm、16.5cm。いずれも巴文は左回転で巴の尾は接していない。

菊丸瓦 瓦当文様によって3つのタイプに分けられる。34～37は菊の花弁が8枚のもの、38は同様に花弁が8枚であるが内区と外区の区別のないもの、30・40は花弁が12枚のものである。瓦当径は34～37が順に8.0cm、8.5cm、7.8cm、7.6cm、38が7.7cm、39・40がそれぞれ7.5cm、7.4cmである。

鬼瓦 41は京覆輪型-2というタイプに属し下部が平らであることから、降棟・隅棟・寄棟屋根の大棟の端に使う切据鬼または一文字鬼とよばれるものである⁽⁴⁵⁾。1号埋桶から出土したが、共伴遺物が木製品のみであるため年代は不明である。



第55図 軒平瓦 (S=1/4)

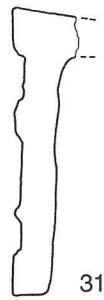
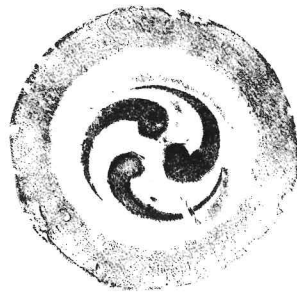


0 10cm

第56図 軒丸瓦 (S=1/4)



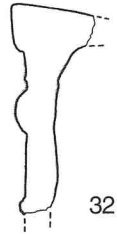
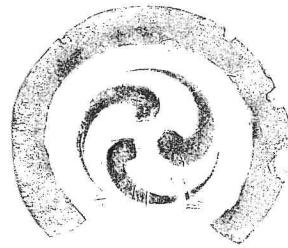
28



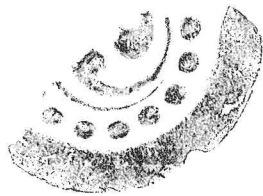
31



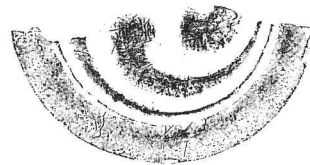
29



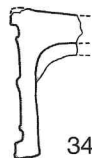
32



30



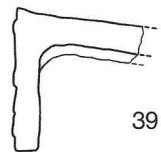
33



34



37



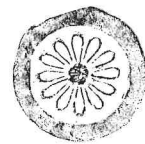
39



35



38



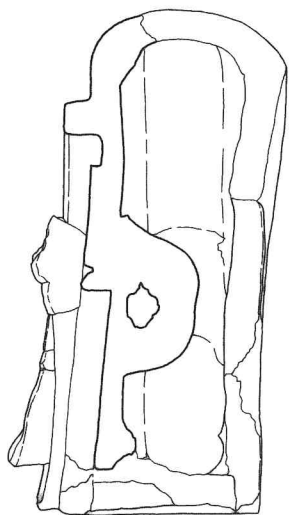
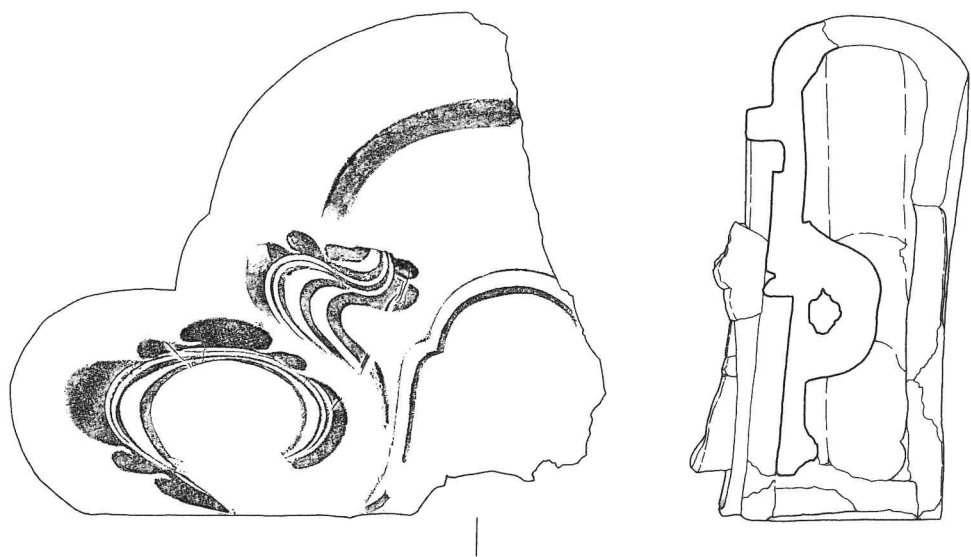
40



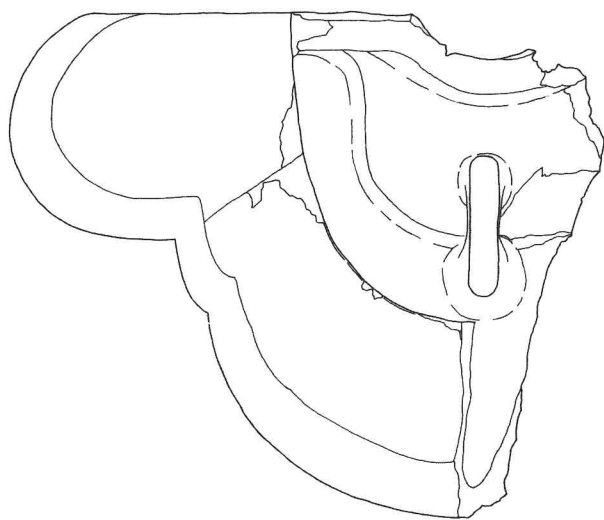
36



第57图 軒丸瓦・菊丸瓦 (S=1/4)



41



0 10cm

第58图 1号埋桶出土鬼瓦 (S=1/4)



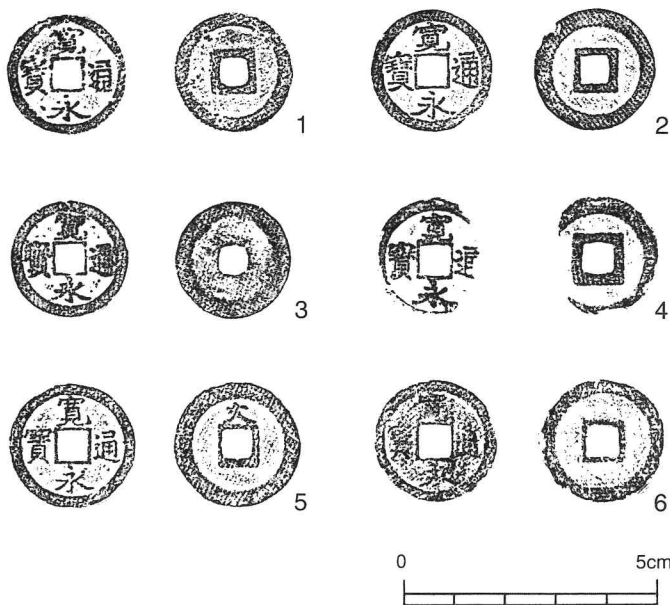
第59図 瓦刻印類 (S=1/1)

瓦の刻印 本遺跡では文字や記号の刻印をもつ瓦が数点確認されている。以下各刻印について若干の説明を加えたい。

1の「神」という刻印については府内城三ノ丸遺跡SK33・SX1でも同様のものが確認されており、現在の
大分県北海部郡佐賀関町幸崎（神崎）を示す可能性が指摘されている⁽⁴⁶⁾。この地域は当時肥後細川藩領であり瓦
生産が盛んであった。しかし今のところ確証は得られていない。2の「亀」についてはその意味するところは全
く不明である。3・4はいずれも記号で形態は類似するが同一の印版を使用したものではない。比較的よくみら
れるタイプであるが製作地などは特定されていない。5は「神瓦製」の3文字だけが判明している。この「神」
についても1と同様生産地と推定されている神崎を示す可能性もあるが断定はできない。6の「□□瓦師七兵衛」
は上部が欠損しているため製作地は不明である。7の「佐伯切畑村瓦師長蔵」は現在の
大分県弥生町須平地区で生産されたものである。この地域は佐伯藩領内での瓦の産地であった。現在もこの地区に残る文化14年銘をもつ
瓦焼庚申塔の台座には長蔵の名が刻まれている。8・9はいずれも欠損しているが2つの刻印を合成すると「□
岡駅前山本製」となる。佐伯地方では明治以降、上岡駅を含む現在の佐伯市鶴岡地区（当時は鶴岡村）での瓦生
産が盛んであった。よって刻印は「上岡駅前山本製」となると推定でき、8・9は明治以降にこの地域で製作さ
れたものと考えられる⁽⁴⁷⁾。

(3) 銅銭 (第60図)

すべて寛永通寶である。1～4は寛永3年(1626)から寛文8年(1668)の間、5・6は寛文8年(1668)以降に鑄造されたものである。一般に前者は古寛永銭、後者は新寛永銭とよばれる。「寶」の足が「ス」になっているもの(いわゆる「ス寶」)が古寛永、「ハ」になっているもの(いわゆる「ハ寶」)が新寛永であるというのが両者を区別する最も簡単な方法である。5は新寛永の中でも背面に「文」を入れる「文銭」と呼ばれるタイプである。1・3～6は整地層、2は試掘トレンチから出土した。



第60図 銅銭 (S=2/3)

(4) 金属製品 (第62図)

1～13は煙管で、このうち1～7は雁首、8～13は吸口である。羅字は雁首と吸口の中に一部が残存するのみであった。13以外はすべて整地層からの出土である。以下点数は少ないが雁首と吸口に分けて分類する⁽⁴⁸⁾。

雁首；I-a類(1) 脂返しが明確ではなく、火皿と首部が直接接合したように見えるもので、肩付の痕跡のような段をもつ。

I-b類(2・3) 脂返しは明確ではなく、火皿と首部が直接接合したように見えるもので、肩のないもの。

II類(4-7) 脂返しが緩く湾曲し、首部は膨らみながら伸びる。

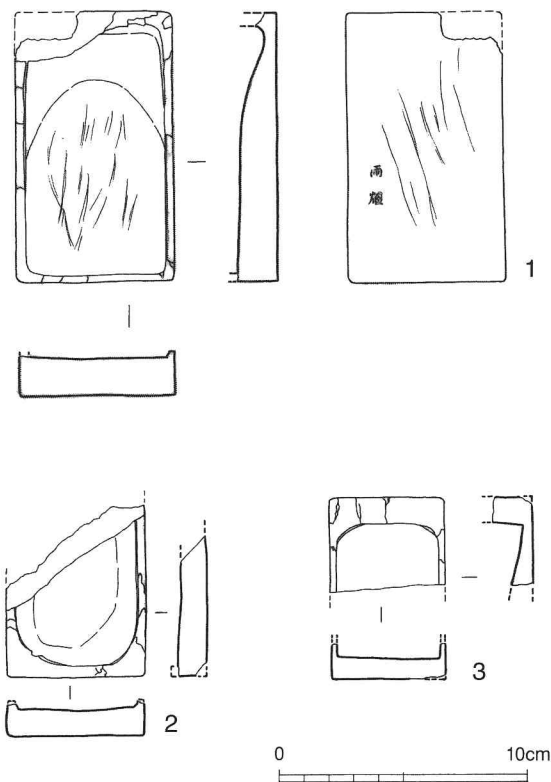
吸口；I類(8) 羅字接続部から直線的に伸び、3分の1程の位置から端部に向かって急にすぼまる。

II類(9-13) 羅字接続部から端部まで直線的に伸びる。

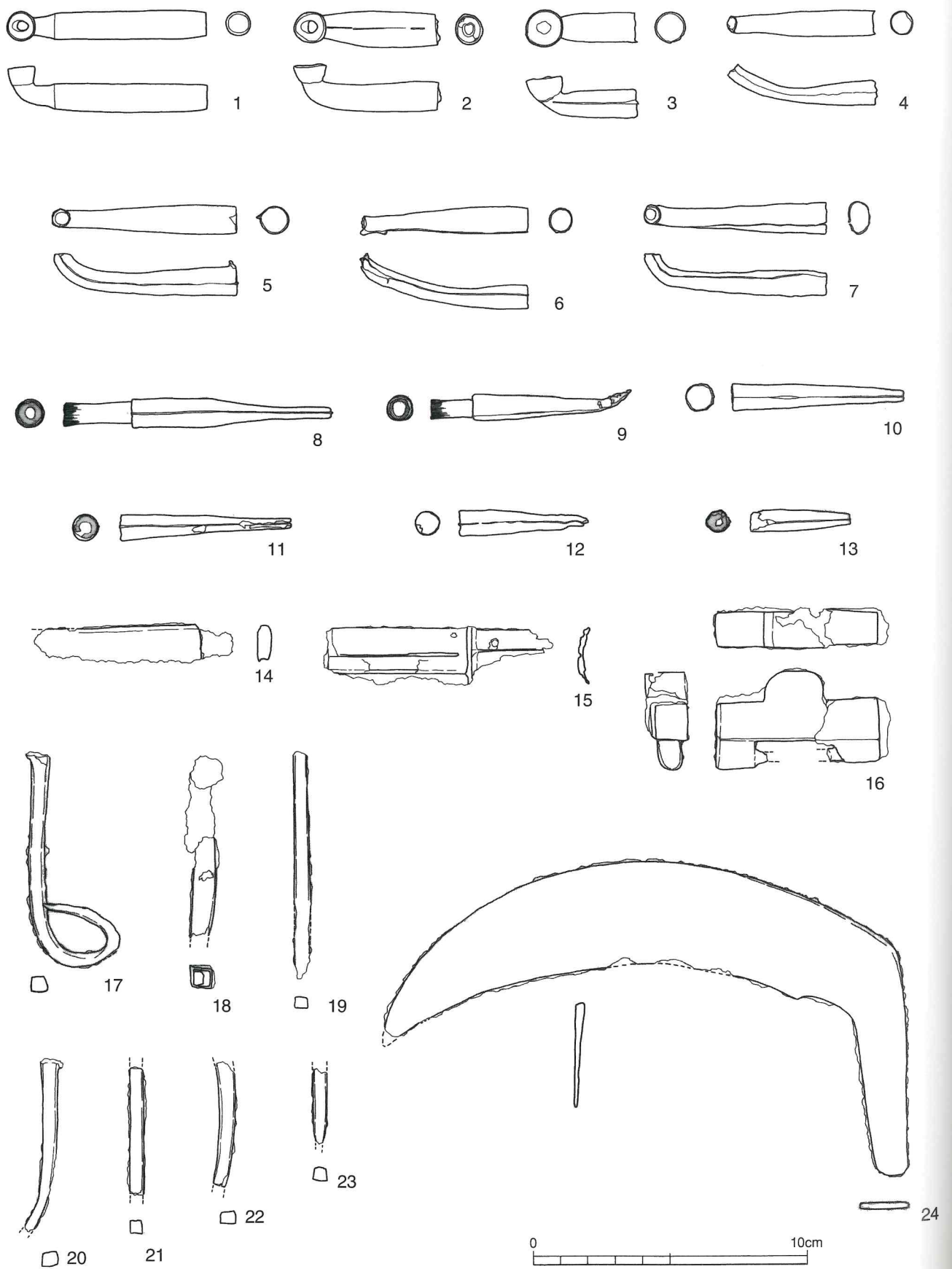
14・15は用途のはっきりしない鉄製品である。14は小刀のようなものであろうか。16は鉄製の錠前と推定される。17～23は鉄角釘、24は鉄鎌である。17・19が試掘トレンチ、24の鎌が1号埋桶から出土した以外は整地層から検出された。

(5) 硯 (第61図)

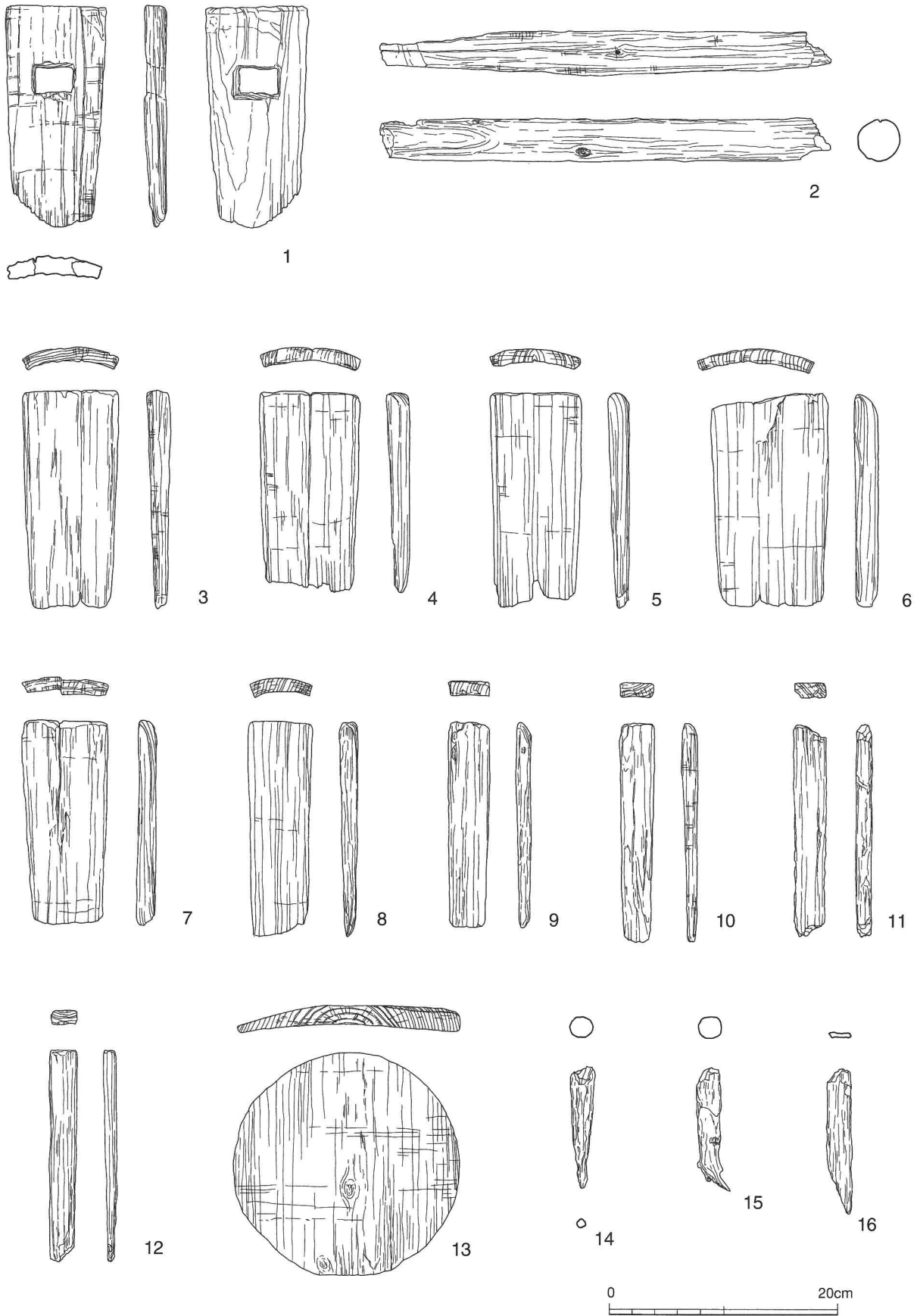
1は硯側が垂直に立ち上がり、硯陰も平らである。丘の中央部は使用によりやや窪み、海の部分が狭い。丘と硯陰に顕著な擦痕がみられ縁を人為的に削ったような形跡があることから、砥石に転用された可能性もある。硯陰部の左下に「雨畑」という刻印が彫り込まれている。産地を示すものと考えられるが具体的にどこの地域を指すか管見の限り不明である。2は赤間石を使用したものである。赤間石とは現在の山口県下関市に位置する赤間関で産出する石材である。硯側は垂直で、硯陰は平らである。丘の中央部には楕円形の使用痕が残る。3は海の部分のみ残存する。縁が意図的に削られており、硯側に擦ったような痕があることから砥石として2次的に利用した可能性もある⁽⁴⁹⁾。



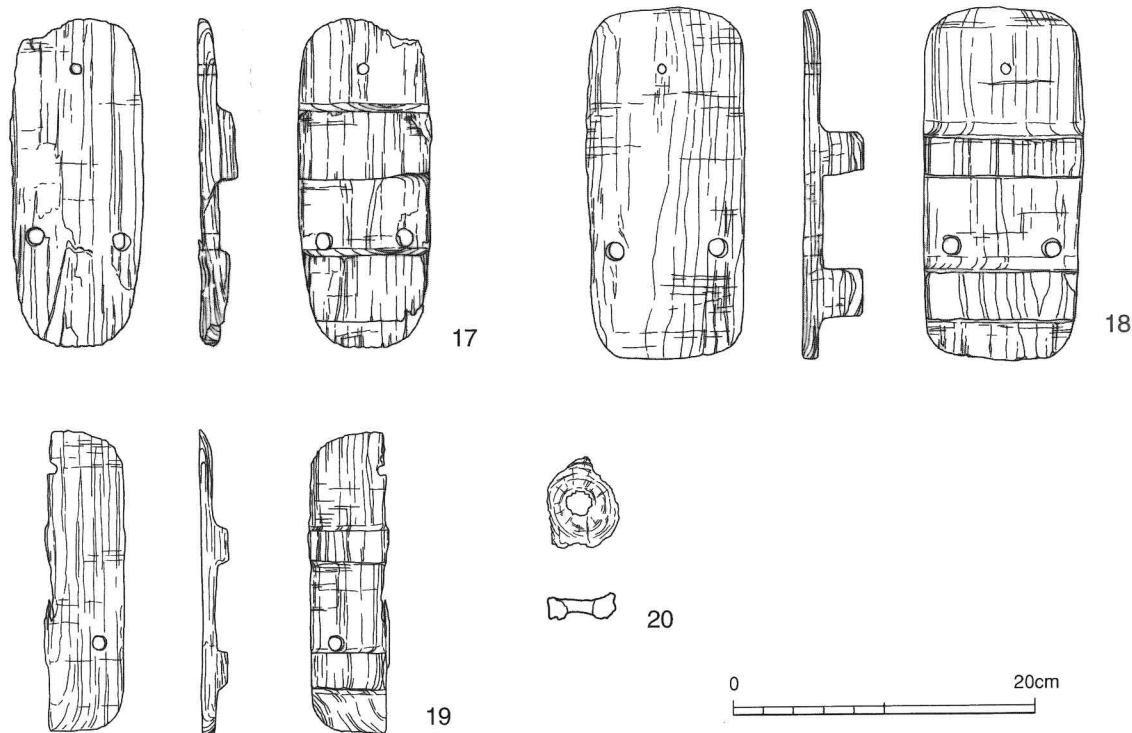
第61図 硯 (S=1/3)



第62図 金属製品 (S=1/2)



第63図 木製品 (1) (S=1/5)



第64図 木製品（2）（S=1/5）

（6）木製品 （第63・64図）

1～13は1号埋桶から出土したものである。1と2は同一製品の部品である可能性が高く、2は1に付属する柄のようなものと考えられる。2の断面は全体にはほぼ円形であるが、一方の端のみ薄く削られて楕円形を呈する。恐らくこの部分を1の長方形の孔に差し込んで使用するものと思われるが、用途は不明である。3～13は木桶と推定されるもので、3～12が側板、13が底板である。14～20は整地層から出土した。14～16・20は用途不明の木製品、17～19は下駄である。17は上面形が楕円形、18・19は隅丸長方形を呈し、いずれも一木作りで両歯とも直立する。17・19の後歯は摩滅により低くなっており、特に17の後歯後端は顕著に擦り減っている。18は下駄を正位置に置いたときに前歯・後歯とも右側が擦り減っている。

- 註1. 小林 謙一・両角まり「江戸における近世土師質塩壺類の研究」『東京考古』10 1992
2. 難波 洋三「徳川氏大坂城期の焙烙」『難波宮址の研究』 第九財団法人大阪市文化財協会 1992
3. 吉田 寛編『府内城三ノ丸遺跡』 大分県教育委員会 1993
4. 井汲隆夫他『内藤町遺跡』第Ⅱ分冊遺物編 東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会 1992
5. 菊田 徹編『末広焼』 白杵市文化財保護協力会 1986
6. 東中川忠美・家田淳一他 『内野山北窯跡』 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（20） 佐賀県教育委員会 1996
この種の陶器皿は内野山北窯跡報告書においてⅠ期とした層からのみ出土している。Ⅰ期の年代は1610年代～17世紀第2四半期頃に比定されており、従来1600～1630年代の幅で考えられてきた砂目積陶器より若干長く生産されていたと考えられている。よって本遺跡出土資料の年代もこれに準拠した。しかし内野山北出土資料が全体に施釉されているのに対し、図示した資料は高台畳付と高台内中央部が無釉である点には注意する必要がある。
7. 奥田直栄他『世界陶磁器全集』4 小学館 1977
8. 註4に同じ。
この種の蓋は内藤町遺跡報告書の〔器形分類表と分類基準〕で乗燭蓋として分類されている。
9. 白神典之「堺摺鉢考」『東洋陶磁』VOL.19 1992
10. 堀内秀樹「備前系焼締め播鉢の系譜」『東京考古』10 1992
11. 兵庫県教育委員会 『下相野窯址』 近畿自動車道舞鶴線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ 1992

- 注12. 渡辺 誠「焼塩」『講座日本技術の社会史』第二巻 塩業・漁業 1985
13. 小川 望「大名屋敷出土の焼塩壺」『江戸の食文化』 江戸遺跡研究会編 吉川弘文館 1992
14. 註1に同じ。
15. 註3に同じ。
16. 西田弘子・大橋康二「古伊万里」『別冊太陽』 平凡社 1988
17. 註9・10に同じ。
18. 註12・13に同じ。
19. 註3に同じ。
20. 佐賀県立九州陶磁文化館『嬉野町吉田2号窯跡』肥前地区古窯跡調査報告書 第6集 1989
21. 註3に同じ。
22. 註16に同じ。
23. 註9・10に同じ。
24. 註12に同じ。
25. 註3に同じ。
26. 佐賀県立九州陶磁文化館『柴田コレクション展』I 1990
141頁掲載の〔360.染付花鳥文大皿〕の体部内面の唐草文様に類似。
27. 表採品を観察すると大半が灰釉陶器で一部藁灰釉の製品もみられる。佐賀県立九州陶磁文化館（現佐賀県文化課）の大橋康二氏により、胎土目積段階の肥前陶器に併行する時期の製品である可能性が高いとのご教示を得た。
28. 佐賀県立九州陶磁文化館『柴田コレクション展』II 1991
249頁 652～654、251頁 661に類似。
29. 塩田町歴史民俗資料館『幕末期の志田焼』（第3回特別展 塩田のやきもの図録）1993
30. 註3・16・20に同じ。
大橋康二『下白川窯・年木谷1号窯』肥前地区古窯跡調査報告書 第5集 佐賀県立九州陶磁文化館 1988
同種の容器で上面に「肥前 烏犀円」と記されたものが生産地の佐賀県西松浦郡有田町年木谷1号窯と佐賀県藤津郡嬉野町吉田2号窯から出土している。このうち年木谷1号窯では烏犀円の容器を実際焼成したと考えられているが後者は生活で使用したものを廃棄した可能性が高いと指摘されている。また消費地遺跡では大分市府内城三ノ丸遺跡S K33から「肥後 渡辺 一処入 烏犀円」と書かれたものが出土した。本例は欠損のため「肥後 大□ 一□ 烏犀□」の6文字しか読み取れないが、烏犀円の容器であることは疑いないであろう。しかしこれまで知られていた上記2例とは文字内容が明らかに異なる。形態的には上面が丸みをもつ肥前窯跡出土品より上面が平らで体部との境が明瞭な府内城三ノ丸遺跡例の方が類似する。
31. 註7に同じ。
32. 註9・10に同じ。
33. 東京大学遺跡調査室『東京大学本郷構内の遺跡 医学部付属病院地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 1990
大塚達朗「焼塩壺研究の新展望」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』日本中世土器研究会 1991
34. 註12・13に同じ。
35. 註12・13に同じ。
36. 註33 大塚1991に同じ。
37. 註1・13に同じ。
38. 註2に同じ。
39. 註3に同じ。
40. 註12・13に同じ。
41. 註9・10に同じ。
42. 註2・3に同じ。
43. 註3に同じ。
府内城三ノ丸遺跡S K17から内底部に「岐671」の陽刻をもつものが出土している。
44. 坪井利弘『図鑑瓦屋根』改訂版 理工学社 1986
45. 註44に同じ。
46. 註3に同じ。
47. 佐伯市教育委員会『佐伯市史』 1974
佐伯市教育委員会『佐伯の昔話』 1988
佐伯市鶴岡地区では原料となる粘土が豊富であったため明治以降瓦の製造が盛んになり、大正年間には製造戸数が30軒ほどになっていた。第2次大戦後は粘土も少なくなり、セメント瓦が普及したこともあって瓦窯は急速に減少したが、当時を知る人の話によると昭和30年代まで製造を続けている所もあったようである。
48. 古泉 弘『江戸の考古学』ニューサイエンス社 1987
煙管各部位の名称および煙管の分類については古泉氏の論に準拠した。
49. 新宿区教育委員会『三栄町遺跡』1988

Ⅳ. 埋桶の用途推定に関する自然科学分析調査

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

天祐館遺跡は、番匠川左岸の沖積低地から段丘上にかけて立地する。本遺跡は第11代佐伯藩主の毛利高泰が構築した南御殿跡にあたり、明治3年に「天祐館」と改名されている。

今回の発掘調査により、文久3(1863)年に建てられた南御殿の基礎となる石組や溝状遺構、埋桶が確認されている。このうち、埋桶は文久3年の南御殿の絵図に相当する施設がみられないことから、それ以後につくられたものと判断されている。発掘調査所見では、埋桶の機能は便所の可能性があるとされているが、詳細は不明である。

今回は埋桶の用途に関する資料を得る目的で、珪藻分析、花粉・寄生虫卵分析、植物遺体同定を行った。

1. 試料

調査対象は、1号埋桶および2号埋桶の2遺構である。各埋桶は円筒形を呈し、底板と側板が検出されているが、発掘調査時には上半部が削られている。また、1号埋桶では鬼瓦、鉄鎌、木桶、2号埋桶では肥前産磁器蓋が出土した。

試料は、各埋桶の最下部から堆積物1点ずつを採取したものである。当社による観察では、土壌試料の土質は1号埋桶試料が褐灰色砂混じりシルト、2号埋桶試料が褐色灰色砂礫混じりシルトである。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

湿重約6gの試料について、過酸化水素水・塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施し、珪藻殻の濃縮を行う。検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プレウラックスで封入して、プレパラートを作製する。

検鏡は、光学顕微鏡(油浸600倍あるいは1000倍)で、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。珪藻化の少ない試料は、この限りではない。同時に完形殻と壊れた殻を区別して計数し、珪藻化石の保存度(完形殻数/総数×100)を求め、考察の際に参考とした。珪藻の種の同定は、K.Krammer & Lange-Bertalot(1986・1988・1991)などを用いた。なお、珪藻の生態性の解説を第11表に示した。

産出した化石が現地性の化石か他の場所から運搬・堆積した異地性の化石かを判断する目安として、完形殻の出現率を求め考察の際に考慮した。堆積環境の解析にあたり、塩分濃度に対する適応性から産出種を海水生種、海水～汽水生種、淡水生種に分類し、淡水生種については更に塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応性に基づいて生態区分する。そして、産出率2%以上の主要な分類群について、主要珪藻化石の層位分布図を作成する。堆積環境の解析にあたっては、安藤(1990)の環境指標種、伊藤・堀内(1991)を参考とする。

(2) 花粉分析・寄生虫卵分析

試料2.5ccを秤量し、フッ化水素酸による泥化を行った。しかし、有機物の割合が極端に少なかったため、臭化亜鉛(比重2.3)による重液分離を行い、有機物を濃集させた。分析残渣を定容し、一部を秤り取ってプレパラートを作製して、全ての種類(花粉・孢子化石、寄生虫卵)について同定・計数する。

結果は、検出された種類とその検出個数を示す一覧表および花粉・孢子化石、寄生虫卵の産状を示す図に表した。図中では、花粉・孢子化石は相対的な割合、寄生虫卵は土壌1ccあたりの個数で示した。

(3) 植物遺体同定

試料0.00ccを秤量し、数%の苛性ソーダ溶液を加えて泥化させた後、0.5mmの篩を通して水洗選別し、残渣を集める。残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実遺体を拾い出して同定・計数する。同定した種実遺体は、種類毎にホウ酸・ホウ砂水溶液中に保存する。

第11表 珪藻の生態性

塩分濃度に対する区分	塩分濃度に対する適応性	生育環境(例)
海水生種： 強塩生種 (Polyhalobous) 真塩生種 (Euhalobous)	塩分濃度40.0パーミル以上に出現するもの 海産性種、塩分濃度40.0～30.0パーミルに出現するもの	低緯度熱帯海域、塩水湖など 一般海域 (ex 大陸棚及び大陸棚以深の海域)
汽水生種： 中塩生種 (Mesohalobous)	塩分濃度30.0～0.5パーミルに 出現するもの 強中塩生種 (α -Mesohalobous) 弱中塩生種 (β -Mesohalobous)	河口・内湾・沿岸・塩水湖・潟など
淡水生種：貧塩生種 (Oligohalobous)	塩分濃度0.5パーミル以下に出現するもの	一般陸水域 (ex 湖沼・池・沼・河川・沼沢地・泉)
塩分・pH・流水に対する区分	塩分・pH・流水に対する適応性	
負塩-好塩性種 (Halophilous)	少量の塩分がある方がよく生育するもの	高塩類域 (塩水遡上域・温泉・耕作土壌)
負塩-不定性種 (Indifferent)	少量の塩分があってもこれによく耐えることができるもの	一般陸水域 (湖沼・池・沼・河川・沼沢地など)
負塩-嫌塩性種 (Halophobous)	少量の塩分にも耐えることができないもの	湿原・湿地・沼沢地
広域塩性種 (Euryhalinous)	低濃度から高濃度まで広い範囲の塩分濃度に適応して出現するもの	一般淡水～汽水域
真酸性種 (Acidobiontic)	pH7.0以下に出現、特にpH5.5以下の酸性水域で最もよく生育するもの	湿原・湿地・火口湖 (酸性水域)
好酸性種 (Acidophilous)	pH7.0付近に出現、pH7.0以下の水域で最もよく生育するもの	湿原・湿地・沼沢地
pH-不定性種 (Indifferent)	pH7.0付近の中性水域で最もよく生育するもの	一般陸水域 (ex 湖沼・池沼・河川)
好アルカリ性種 (Alkaliphilous)	pH7.0付近に出現、pH7.0以上の水域で最もよく生育するもの	
真アルカリ性種 (Alkalibiontic)	pH8.5以上のアルカリ性水域で最もよく生育するもの	アルカリ性水域
真止水性種 (Limnobiontic)	止水域にのみ出現するもの	流水の少ない湖沼・池沼
好止水性種 (Limnophilous)	止水域に特徴的であるが、流水域にも出現するもの	湖沼・池沼・流れの穏やかな川
流水不定性種 (Indifferent)	止水域にも流水域にも普通に出現するもの	河川・川・池沼・湖沼
好流水性種 (Rheophilous)	流水域に特徴的であるが、止水域にも出現するもの	河川・川・小川・上流域
真流水性種 (Rheobiontic)	流水域にのみ出現するもの	河川・川・流れの速い川・溪流・上流域
好気性種 (Aerophilous)	好気的環境 (Aerial habitats) 水域以外の常に大気に曝された特殊な環境に生育する珪藻の一群で 多少の湿り気と光さえあれば、土壌表層中のコケの表面に生育可能 特に、土壌中に生育する陸生珪藻を土壌珪藻という	<ul style="list-style-type: none"> 土壌表層中や土壌に生えたコケに付着 木の根元や幹に生えたコケに付着 濡れた岩の表面やそれに生えたコケに付着 漣の飛沫で湿ったコケや石垣・岩上のコケに付着 洞窟入口や内部の照明の当たった所に生えたコケに付着

註 塩分に対する区分はLowe(1974)、pHと流水に対する区分はHusted(1937-38)による。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表に示した。

3. 結果

(1) 珪藻化石の産状

結果を第12表、第65図に示す。珪藻化石は、1号埋桶ではやや少ないが、2号埋桶からは豊富に産出する。完形殻の出現率は、60%前後と比較的高い。陸上のコケの表面や土壌表面など多少の湿り気のある好気的環境に耐性のある陸生珪藻が多産する。とくに、1号埋桶では約70%と優占する。産出分類群数は、合計で26属74種類である。以下に、珪藻化石群集の特徴を述べる。

1号埋桶は、陸上珪藻のなかでも耐乾性の強いA群（伊藤・堀内，1991）のHantzschia amphioxys、Navicula mutica、Amphora montana、Navicula contentaが10~20%と多産する。これに付随して、好流水性種のCaloneis bacillum、Navicula elginensis var.neglecta、流水不定性のFrustulia vulgaris、Navicula elginensisを伴う。

2号埋桶は、水性珪藻の方が多く、流水不定性のAchnanthes hungarica、Nitzschia paleaが13%前後と多産し、同じく流水不定性のGomphonema parvulum、陸生珪藻のA群のNavicula contenta、Navicula mutica、水域にも認められる陸生珪藻のB群（伊藤・堀内，1991）のNavicula confervacea、N.seminulumなどを伴う。産出したAchnanthes hungarica、Nitzschia palea、Gomphonema parvulum、Navicula confervacea、N.seminulumは、現在の水域では有機汚濁の進んだ腐水性水域に多く認められる種群である（Asai,K.&Watanabe,T., 1995, Kobayashi,H. and S.Mayama, 1982）。

第12表 1号・2号埋桶の珪藻分析結果（1）

種 類	生 態 性			環 境 指 標 種	1号 埋 桶	2号 埋 桶
	塩 分	pH	流 水			
Actinocyclus ehrenbergii Ralfs	Euh			A	-	1
Coscinodiscus jonesianus (Greville) Ostenfeld	Euh				-	1
Cocconeis scutellum Ehrenberg	Euh-Meh			C1	-	2
Navicula salinarum Grunow	Meh			D2,E1	-	1
Nitzschia calida Grunow	Meh				-	1
Achnanthes exigua Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	2
Achnanthes hungarica Grunow	Ogh-hil	al-il	ind	U	-	30
Achnanthes rostrata Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	19	9
Aulacoseira italica (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	-
Caloneis bacillum (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	4	-
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	1	-
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	1
Caloneis tenuis (Greg.) Krammer	Ogh-ind	al-il	ind		-	1
Craticula ambigua (Ehr.) D. G. Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	1	-
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	-	1
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.) V. Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	1
Eunotia bigibba Kuetzing	Ogh-hob	ac-bi	ind	RA	1	-
Eunotia bilunaris (Ehr.) Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	1
Eunotia exigua (Breb.) Grunow	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	P	-	1
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	3
Eunotia pectinalis var. undulata (Ralfs.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	1
Eunotia cf. tenella (Grun.) Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		-	3
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	-
Fragilaria capucina var. gracilis (Oestr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	3
Fragilaria construens (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	2	-
Frustulia vulgaris (Thwait.) De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	4	1
Gomphonema augur var. turris (Ehr.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind		-	2
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	3
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	1	10
Gomphonema pseudoaugur Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	1
Gomphonema subtile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind		-	1
Gyrosigma scalproides (Rabh.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph		2	1

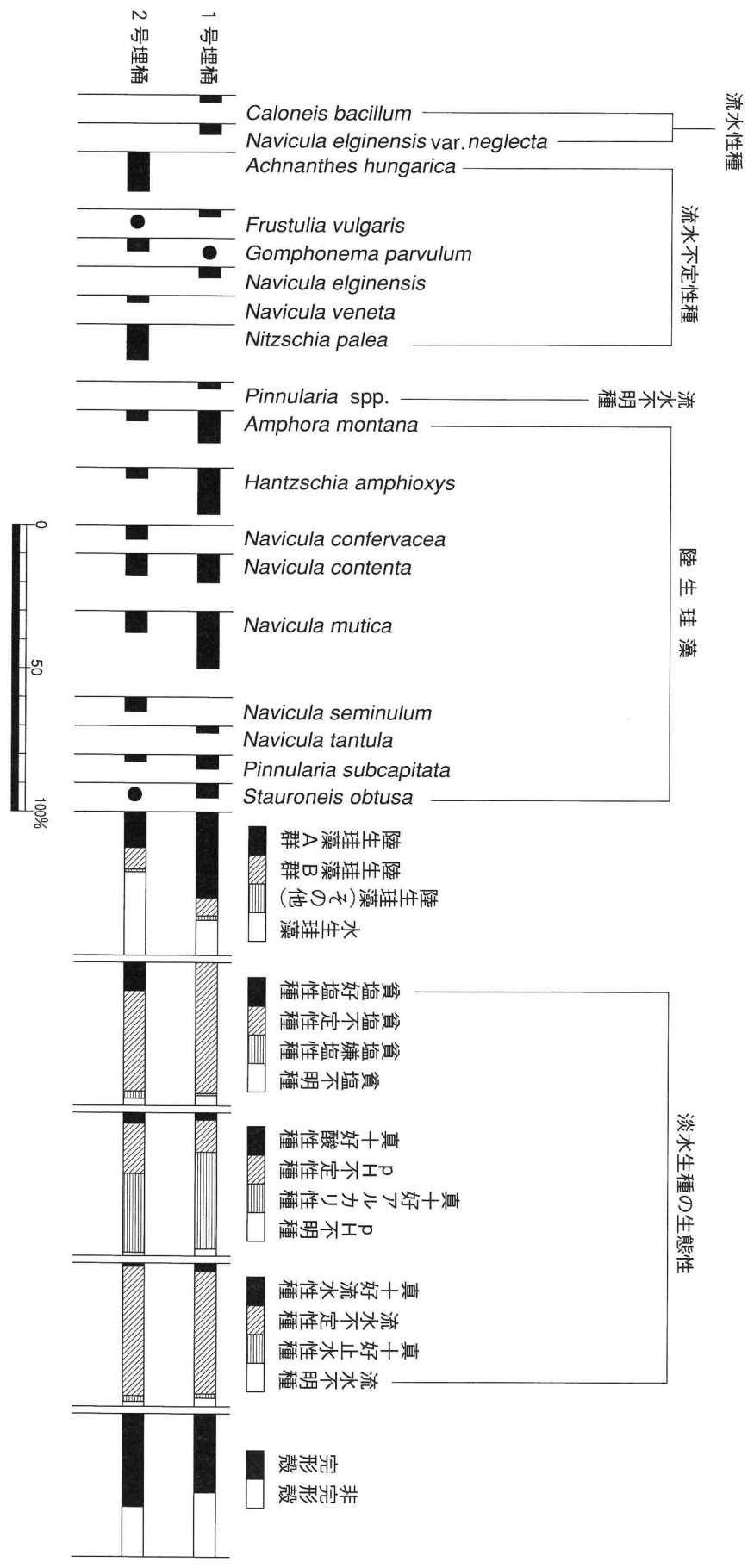
種 類	生 態 性			環 境 指 標 種	1号 埋 桶	2号 埋 桶
	塩 分	pH	流 水			
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	27	8
Navicula atomus (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	-	2
Navicula brekkaensis Petersen	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	1
Navicula cohnii (Hilse) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-bi	ind	RI	-	1
Navicula confervacea (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S	-	14
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	17	17
Navicula elginensis (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	7	-
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	6	-
Navicula goeppertiana (Bleisch) H. L. Smith	Ogh-hil	al-il	ind	S	-	2
Navicula gregaria Donkin	Ogh-hil	al-il	ind	U	-	1
Navicula ignota Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	1
Navicula kotschy Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		1	-
Navicula laevissima Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind		-	1
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	33	17
Navicula pupula Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	S	-	1
Navicula saxophila Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-
Navicula seminulum Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	-	11
Navicula subnympharum Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		-	2
Navicula tantula Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RI,U	4	-
Navicula veneta Kuetzing	Ogh-hil	al-il	ind	U	-	5
Navicula viridula (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	1
Navicula viridula var. rostellata (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	1
Navicula sp.-1	Ogh-unk	unk	unk		-	1
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	2
Neidium affine (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ind	l-bi		-	1
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	1	1
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-hil	al-il	ind	RB,U	-	4
Nitzschia palea (Kuetz.) W. Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	-	28
Nitzschia paleacea Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	3
Nitzschia perminuta (Grun.) Peragallo	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	2
Nitzschia tubicola Grunow	Ogh-unk	unk	unk		-	2
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-
Pinnularia appendiculata (Ag.) Cleve	Ogh-hob	ind	ind	RB	2	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	1	-
Pinnularia major Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	l-bi		-	1
Pinnularia microstauron (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ind	ind	S	2	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	8	5
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		4	-
Rhopalodia gibba (Ehr.) O. Muller	Ogh-ind	al-il	ind		-	1
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O. Muller	Ogh-hil	al-il	ind		1	-
Stauroneis obtusa Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	RB	9	2
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	-	1
Synedra ulna (Kuetz.) Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1
海水生種合計					0	2
海水-汽水生種合計					0	2
汽水生種合計					0	2
淡水生種合計					168	219
珪藻化石総数					168	225

凡例

- | | | |
|---------------------|---------------------|-------------------|
| H. R. : 塩分濃度に対する適応性 | pH : 水素イオン濃度に対する適応性 | C. R. : 流水に対する適応性 |
| Euh : 海水生種 | al-bi : 真アルカリ性種 | l-bi : 真止水性種 |
| Euh-Meh : 海水生種-汽水生種 | al-il : 好アルカリ性種 | l-ph : 好止水性種 |
| Meh : 汽水生種 | ind : pH不定性種 | ind : 流水不定性種 |
| Ogh-hil : 貧塩好塩性種 | ac-il : 好酸性種 | r-ph : 好流水性種 |
| Ogh-ind : 貧塩不定性種 | ac-bi : 真酸性種 | r-bi : 真流水性種 |
| Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種 | unk : pH不明種 | unk : 流水不明種 |
| Ogh-unk : 貧塩不明種 | | |

環境指標種

- A : 外洋指標種 C1 : 海洋藻場指標種 D2 : 汽水砂質干潟指標種 E1 : 海水泥質干潟指標種
(以上は小杉, 1988)
- K : 中~下流性河川指標種 O : 沼沢湿地付着生種 P : 高層湿原指標種 (以上は安藤, 1990)
- S : 好汚濁性種 U : 広適応性種 T : 好清水性種 (以上はAsai, K. & Watanabe, T. 1995)
- RI : 陸生珪藻 (RA : A群, RB : B群、伊藤・堀内, 1991)



第65図 1号・2号埋桶の主要珪藻化石群集
 海水-汽水-淡水生 産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として
 相対頻度で表した。いづれも化石総数が100個体以上検出された試料について示す。なお、●は産出率1%未満の種類を示す。

(2) 花粉化石・寄生虫卵の産状

結果を第13表、第66図に示す。

1号埋桶では、花粉・孢子化石はほとんど検出されない。また、寄生虫卵も1ccあたりの個体数が少ない。

2号埋桶では、木本花粉はマツ属、草本花粉はイネ科の割合が高い。寄生虫卵には、回虫卵、鞭虫卵、吸虫卵が検出される。しかし、最も多かったのは回虫卵で、1cc当たり300個程度である。

(3) 植物遺体の種類

検出された種類を第14表に示す。試料中からは、以下に述べる植物遺体が検出された。以下に、植物遺体として検出された種類の形態的特徴について記す。

・ミクリ属 (Sparganium sp.) ミクリ科

果実の破片が検出された。淡褐色、側面観は紡錘形、上面観は、円形に近い。完形時の大きさは推定で1cm程度。表面には、縦方向に筋が存在する。やや硬い。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae sp.)

果実が検出された。灰褐色で大きさ1mm程度。側面観は、広倒卵形。果皮は柔らかい。

・タデ属 (Polygonum sp.)

果実が検出された。黒色で大きさは2.5mm程度。3稜形で、表面は薄くて堅く、光沢がある。

・ギシギシ属 (Rumex sp.) タデ科

果実が検出された。褐色で、大きさは4mm程度。果実は完全に花被に包まれている。内花被は大きく薄い翼状になる。内花被の中筋は、こぶ状にふくれる。

・アカザ科-ヒユ科 (Chenopodiaceae-Amaranthaceae)

種子が検出された。黒色。側面観は、円形で、上面観は凸レンズ形を呈している。大きさは1mm程度。側面に「へそ」がある。表面は、細胞が亀甲状に配列している構造がみられる。

・ナデシコ科 (Caryophyllaceae sp.)

種子が検出された。黒色で、大きさは、1mm程度。表面には、荒い突起が密に配列している。

・キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属

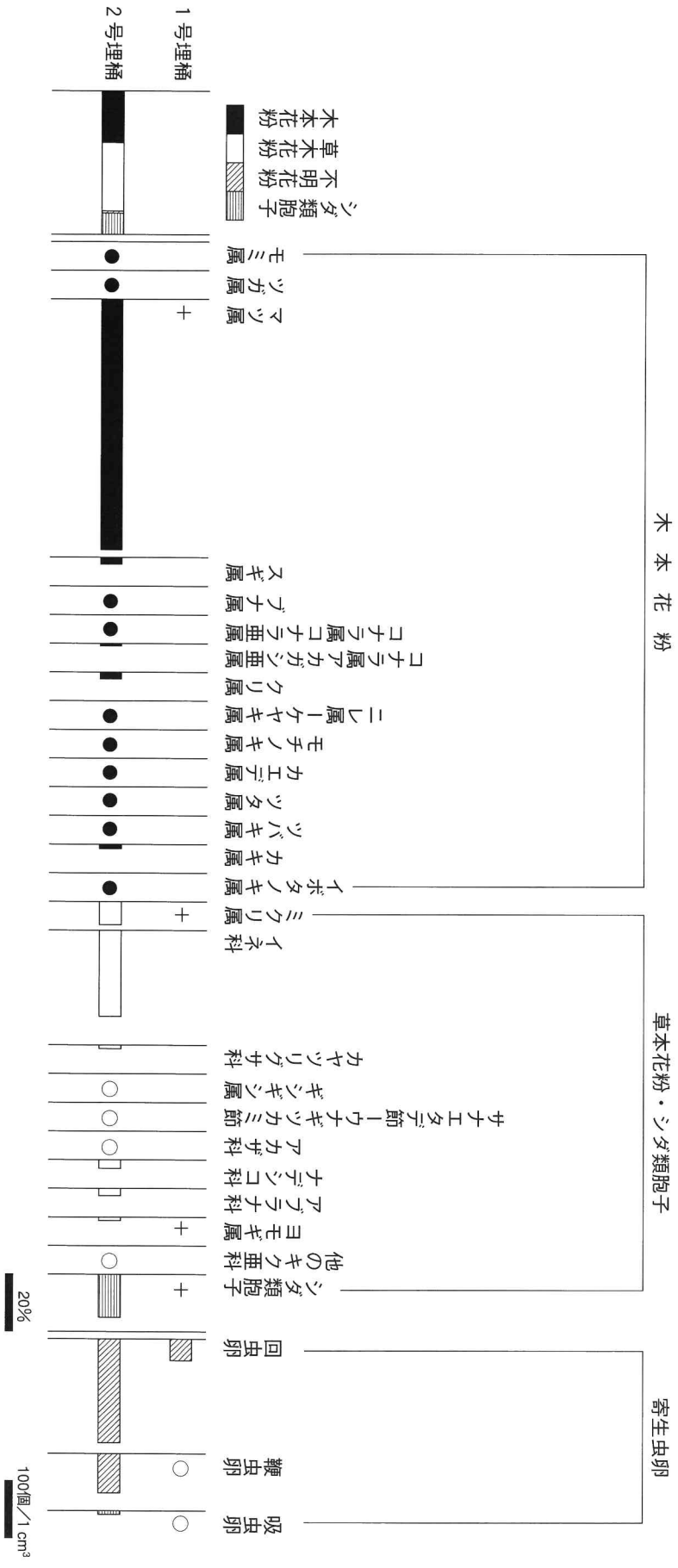
(Duchesnea-Potentilla-Fragaria sp.) バラ科

果実が検出された。大きさは1mm程度。楕円形で、果皮は堅く、表面には網目模様が見られる。

・ナス科 (Solanaceae sp.) ナス科

第13表 1号・2号埋桶の花粉・寄生虫卵分析結果

種 類	1号埋桶	2号埋桶
木本花粉		
モミ属	—	1
ツガ属	—	2
マツ属	9	177
スギ属	—	6
ブナ属	—	2
コナラ属コナラ亜属	—	2
コナラ属アカガシ亜属	—	3
クリ属	—	5
ニレ属-ケヤキ属	—	1
モチノキ属	—	1
カエデ属	—	1
ツタ属	—	1
ツバキ属	—	1
カキ属	—	3
イボタノキ属	—	1
草本花粉		
ミクリ属	7	46
イネ科	—	166
カヤツリグサ科	—	7
ギシギシ属	—	1
サナエタデ節-ウナギツカミ節	—	3
アカザ科	—	5
ナデシコ科	—	19
アブラナ科	—	16
ヨモギ属	1	9
他のキク亜科	—	3
不明花粉		
不明花粉	—	5
シダ類孢子		
シダ類孢子	12	80
合 計		
木本花粉	9	207
草本花粉	8	275
不明花粉	0	5
シダ類孢子	12	80
総花粉・孢子数	29	562
寄生虫卵		
回虫卵	23	71
鞭虫卵	1	22
吸虫卵	2	2



第66図 1号・2号埋桶の花粉化石・寄生虫卵の組成

木本花粉はその総数、草本花粉・シダ類胞子は、総花粉・胞子数から不明花粉を除いた値を基礎として百分率で産出する。
 なお、○●は1%未満、+は木本花粉の基数が100個体未満の試料において検出された種類を示す。
 寄生虫卵は、堆積物1 cm³あたりの個体数で示す。○は5個未満の検出を示す。

種子が検出された。腎臓形で、側面のくびれた部分に「へそ」があり、表面には「へそ」中心として同心円状に網目模様が発達する。大きさは3.5mm程度。表面は柔らかい。網目模様はやや細かく、畝は波うっている。

また、植物遺体の他に双翅目（昆虫類）のサナギとみられる個体が検出されている。

4. 考察

(1) 埋桶の用途について

1号埋桶試料では陸生珪藻が約70%と優占し、流水性種を伴うことが特徴である。現生の陸生珪藻の分布調査によれば、陸生珪藻の相対頻度の和が全体の70~80%以上であれば、その場所は池沼や川などの水域ではなく、しばしば乾燥する陸上の好氣的場所であるとされている（伊藤・堀内，1991）。今回の陸生珪藻の相対頻度の和はこの値に近く、好氣的な環境で埋積した可能性がある。また、埋桶遺構など閉塞的な状態であることを考慮すれば、流水性種の珪藻化石は遺構埋積と同時に周囲から混入したものと推測される。したがって、本試料から検出された寄生虫卵は1ccあたり50個程度と少ないが、遺構埋積とともに周囲から混入した可能性も考えられる。したがって、微化石分析の結果のみで1号埋桶の用途について検討することは難しい。

なお、1号埋桶試料からは昆虫類の双翅目のサナギが1個体検出されている。双翅目の代表的な種類はハエの仲間である。ハエのサナギは便槽内にみられるが、それ以外にゴミ捨て場や堆肥内にも多くみられるが、今回は検出個数が少ない。そのため、今回の場合には双翅目のサナギは便所として機能したことを示唆する指標にはならないものと思われる。

一方、2号埋桶でも陸生珪藻が多産した。また、1号埋桶と比較して、汚濁の進んだ富栄養水域に特徴的な種群が多産する点が異なる。これは埋桶の中が富栄養な水で満たされた時期があったことが示唆される。さらに花粉化石の保存状態は良好であり、寄生虫卵も保存状態が良く、回虫卵が多く検出される。トイレ遺構中の寄生虫卵については、藤原京の例では1ccあたり5,000個、松江城番所跡では1ccあたり10,000個以上を検出している（金原・金原，1994）。今回の例は300個程度であり、これらと比較してかなり少ない。しかし、便所跡以外の場所の土壌では寄生虫卵が1ccあたり100個未満であるとされ（金原・金原，1994）、本遺構内はこれよりは多い。また、検出数は少ないながらも、組成は上記の例と近似する。これらから、埋桶内には寄生虫卵を含む埋積物が残っていた可能性が示唆され、この埋桶が便所であった可能性がある。

なお、低率であったが、保存の良い外洋指標種（小杉，1988）の*Actinocyclus ehrenbergii*や海水泥質干潟指標種（小杉，1988）の*Navicula salinarum*、それに海水藻場指標種（小杉，1988）である*Cocconeis scutellum*が産出することは興味深い。これは、海水の塩が人体内に摂取され、排泄されたことを示唆するのかもしれない。本遺跡は番匠川左岸の沖積低地に立地しており、周囲の土壌中に海生種が二次堆積している可能性も残されているが、この点は周囲の土壌についても珪藻分析を実施し、海生種の有無を確認する必要があるだろう。

また、2号埋桶から検出された種実遺体は検出数が少なく、また可食植物もほとんど認められない。トイレ遺構中の種実遺体は、ウリ類、ナス属、キイチゴ属、ブドウ属など、果実が摂取される時に同時に食べられ、排泄されるものが多い（金原・金原，1994）。たとえば、紀尾井町遺跡のトイレといわれている遺構中からは、約2kgの土壌中から10,000個近い種実が検出されている。その中の大部分はウリ類であり、ゴマ、ナス科、サンショウ、キイチゴ属なども検出されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1988）。したがって、今回検出された種実遺体は糞便中に混入していた可能性は薄く、周囲に生育していた植物に起因するものと考えられる。

以上のように、1号・2号埋桶ともに便所として利用された可能性を示唆する微化石や植物遺体の特異的な産

第14表 1号・2号埋桶の植物遺体同定結果

遺 構 名	1号埋桶	2号埋桶
植物遺体 ミクリ属		1
カヤツリグサ科		4
タデ属	3	
ギシギシ属		1
ナデシコ科	7	約100
アカザ科-ヒユ科		7
キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属		3
ナス属		3
その他 双翅目のサナギ	1	

状は認められなかったが、2号埋桶については便所として利用されたことも可能性のひとつに考えられた。便所跡に関する調査例は前述のような例があるが、便所は非常に閉鎖的な空間であり、その痕跡も極めて局地的に残るため、地域毎の類例の蓄積が不可欠である。今後も、同様な遺構について検討を進め、調査例を増やすことが望まれる。

(2) 埋桶構築時の古植生について

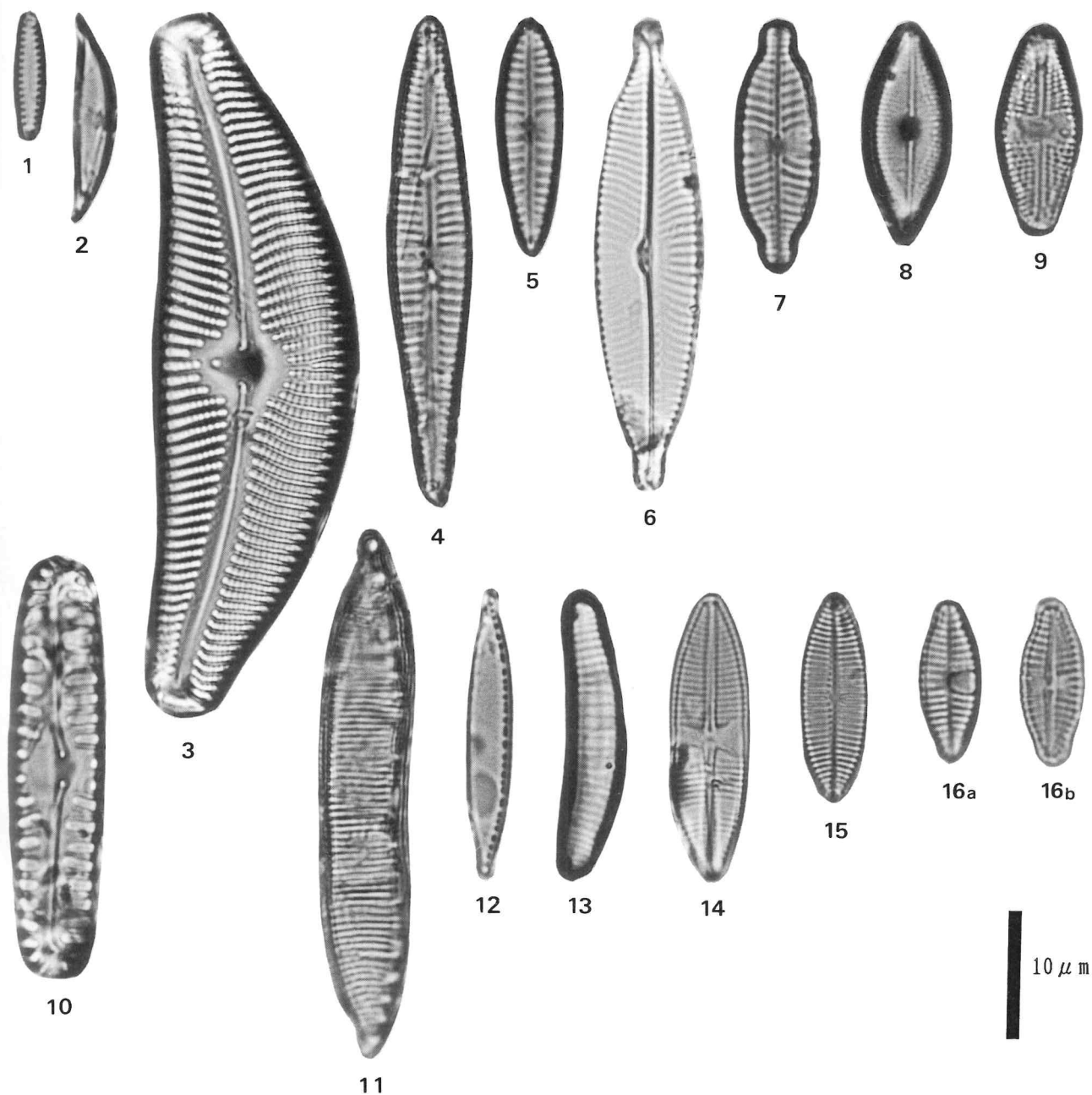
2号埋桶の花粉分析結果をみると、イネ科をはじめとする草本花粉の割合が高い。これらの草本類は人里近くに生育していたものに由来すると考えられる。一方、種実遺体で検出されるカヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、タデ属、ギシギシ属、イチゴ類も、人里近くによくみられる種類であることから、周囲に生育していたものと思われる。なお、花粉、種実ともにミクリ属が検出されている。ミクリ属は沼沢地などに生育する水生植物である。このことから、桶内の埋積土の由来は、湿地などの湿った場所であると思われる。

木本花粉をみると、マツ属が極めて高く、他の種類は少ない。有史以降にはマツ林が増加する傾向が全国的にみられ、これまでの調査などから九州地方では約1500年前から増加を開始すると考えられている(Hatanaka,1985)。今回の結果は、城内でマツ属が植栽されたことを反映しているものなのか、あるいは本遺跡周辺の後背山地の植生を反映しているのか詳細に検討することは難しい。自然堆積層の各層についても花粉分析を行うことにより、古植生の変遷を明らかにすることは重要であり、今後の課題とされる。

<引用文献>

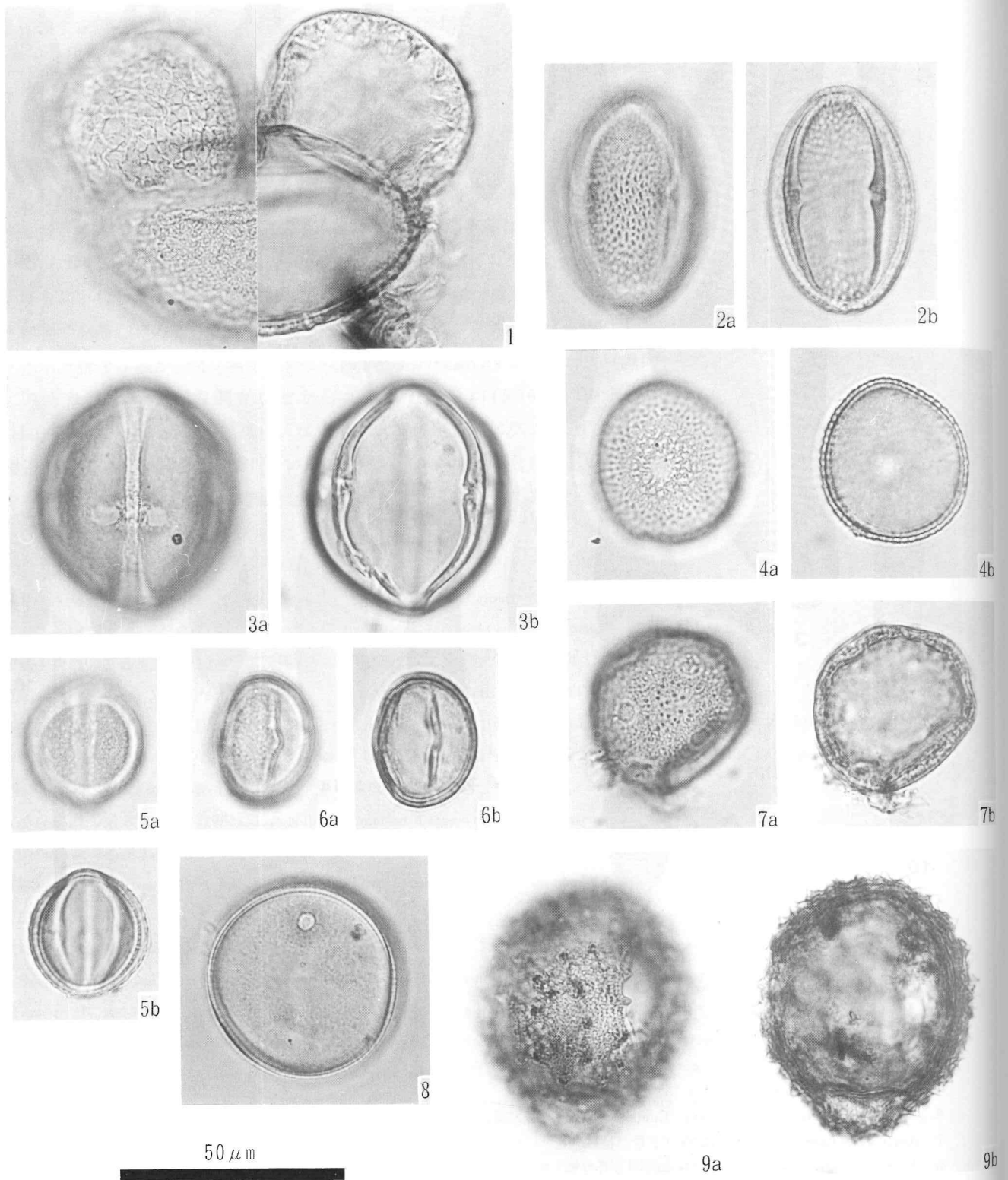
- Asai,K.&Watanabe,T.(1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophyllous and saproxenous taxa. *Diatom*,10,35-47.
- 安藤一男(1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. *東北地理*, 42,p.73-88.
- Hatanaka Ken-ichi (1985) PALYNOLOGICAL STADIES ON THE VEGETATIONAL SUCCESSION THE WURM GLACIAL AGE IN KYUSHU AND ADJACENT AREAS. *Journal of the Faculty of Literature, Kitakyushu University(Series B)*, 18,p.29-71.
- 伊藤良永・堀内誠示(1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. *珪藻学会誌*, 6,p.23-45.
- 小杉正人(1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. *第四紀研究*, 27,p.1-20.
- Kobayasi,H. and S.Mayama (1982) Most pollution-tolerant diatoms of sevely polluted river in the vicinity of Tokyo.*Jap.J.Phycolgy*,30,p.188-196.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) *Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa*,876p.,Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) *Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa*,536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) *Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa*,230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) *Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa*,248p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K.(1992) *PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26*.p.1-353. BERLIN·STUTTGART.
- Lowe, R.L.(1974) Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p. In *Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat.Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.*
- 金原正明・金原正子(1994) 堆積物中の情報の可視化. *可視化情報*, 14(53), p.79-84.
- パリオ・サーヴェイ株式会社(1988) SA46覆土. 「東京都千代田区紀尾井町遺跡調査報告書 本文編」, p.515-523, 千代田区紀尾井町遺跡調査会.

图版1 珪藻化石



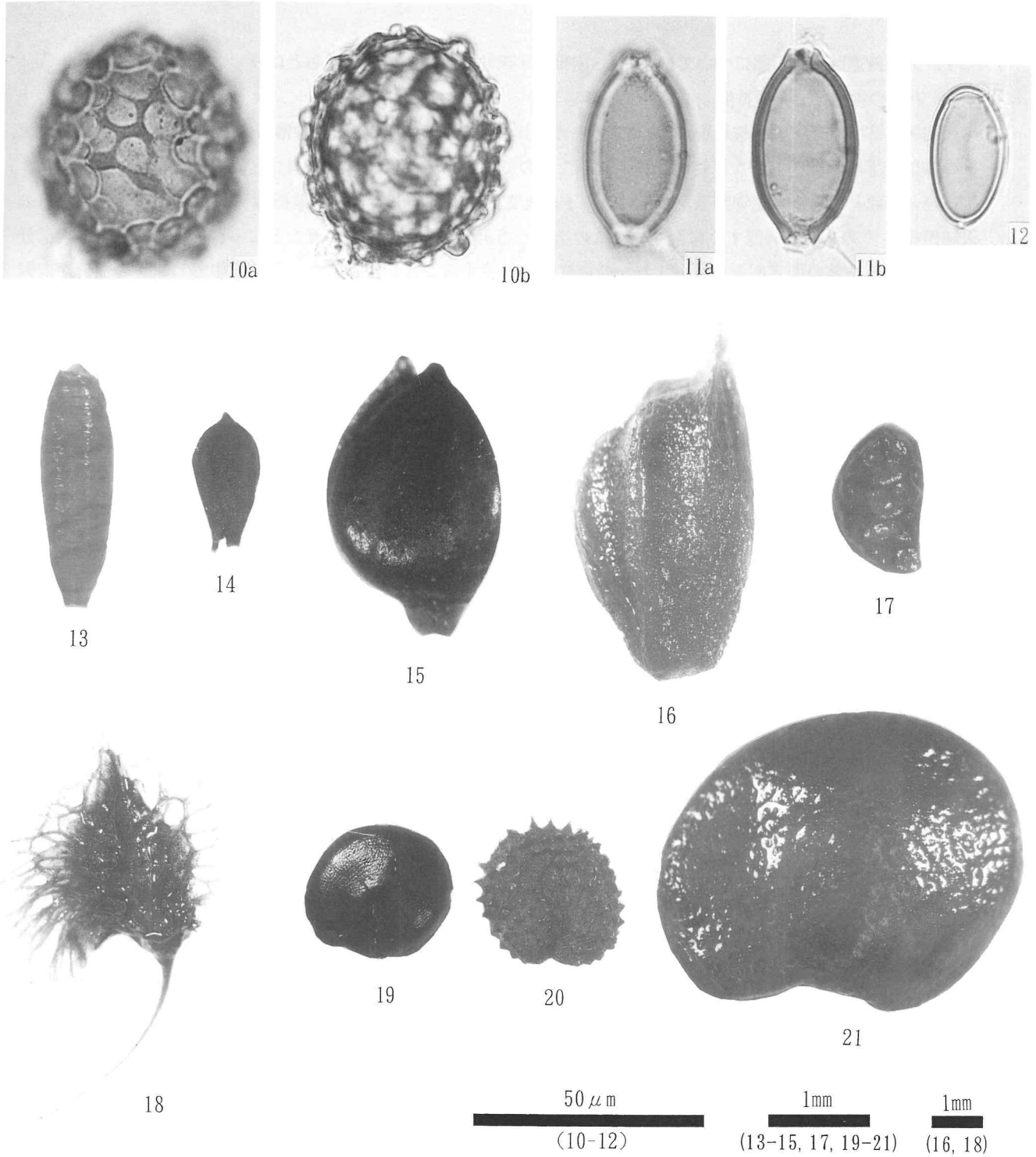
1. *Fragilaria brevistriata* Grunow (2号埋桶)
2. *Amphora montana* Krasske (2号埋桶)
3. *Cymbella tumida* (Bred. ex Kuetz.) V.Heurck (2号埋桶)
4. *Gomphonema gracile* Ehrenberg (2号埋桶)
5. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (2号埋桶)
6. *Navicula viridula* var. *rostellata* (Kuetz.) Cleve (2号埋桶)
7. *Navicula elginensis* (Greg.) Ralfs (2号埋桶)
8. *Navicula confervacea* (Kuetz.) Grunow (2号埋桶)
9. *Navicula mutica* Kuetzing (2号埋桶)
10. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (2号埋桶)
11. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (2号埋桶)
12. *Nitzschia palea* (Kuetz.) W.Smith (2号埋桶)
13. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst (2号埋桶)
14. *Achnanthes hungarica* Grunow (2号埋桶)
15. *Achnanthes hungarica* Grunow (2号埋桶)
16. *Achnanthes lanceolata* (Bred.) Grunow (2号埋桶)

図版 2 花粉化石



- | | |
|----------------|----------------------|
| 1. マ ツ属 (2号埋桶) | 2. ツ タ属 (2号埋桶) |
| 3. カ キ属 (2号埋桶) | 4. ミクリ属 (2号埋桶) |
| 5. ヨモギ属 (2号埋桶) | 6. コナラ属アカガシ亜属 (2号埋桶) |
| 7. アカザ科 (2号埋桶) | 8. イネ科 (2号埋桶) |
| 9. キク亜科 (2号埋桶) | |

図版3 寄生虫卵・植物遺体



- | | |
|--------------------|-----------------------------------|
| 10. 回虫卵 (2号埋桶) | 11. 鞭虫卵 (2号埋桶) |
| 12. 吸虫卵 (2号埋桶) | 13. 双翅目のサナギ (1号埋桶) |
| 14. カヤツリグサ科 (2号埋桶) | 15. タデ属 (1号埋桶) |
| 16. ミクリ属 (2号埋桶) | 17. キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 (2号埋桶) |
| 18. ギシギシ属 (2号埋桶) | 19. アカザ科-ヒユ科 (2号埋桶) |
| 20. ナデシコ科 (2号埋桶) | 21. ナス近似種 (2号埋桶) |

V. まとめ

1. 天祐館遺跡出土石組についての検討 —南御殿・天祐館指図との比較をもとに—

(1) 石組の性格と分布の特徴

天祐館遺跡では幕末頃の整地層から135基の石組が出土した。「明治四年頃佐伯藩時代屋敷図」(付図)は幕末前後の佐伯城下町の様子をかなり克明に描き記したものである。それによると本調査区にあたる箇所には天祐館・稽古場・御武具蔵などの建物が描かれている。その後文久3年(1863)の南御殿指図⁽¹⁾及び明治4年(1871)の天祐館指図⁽²⁾の存在を確認するに至り、2枚の指図と石組図面を照らし合わせたところ、出土した石組の大部分が南御殿・天祐館の両方あるいはいずれかの柱位置と一致することを確認した。第69図中でピンクの部分で南御殿、透明フィルムに図示したものが天祐館の平面図である。⁽³⁾以下、Ⅲ-2-(1)で行った分類に基づいて石組を類別に色分けした第67図、南御殿・天祐館と石組との位置関係を示した第69図を参照しながら各石組について考えてみたい。ここで再度簡単に分類の説明をする。A類(97基)は複数の胴木を敷いた上に多量の根石となる礎を置き、周りを杭で囲んだもの。B類(25基)は胴木を置かず礎の周囲に杭を巡らせたもの。C類(11基)は胴木も杭も伴わず礎のみで構築されているもの。D類(2基)は土坑の底に瓦片を敷きその上に礎を置くものである。これら石組と指図との比較によって次のようなことがわかった。石組群中最多のA類と次に多いB類は全て南御殿あるいは天祐館指図の柱位置と一致することから、両者の基礎として構築されたものである。C類については44・51・58・61・62・69・84・109号の8基は確実に建物基礎として使用されている。しかし同じくC類に分類した21・67・133号は基礎とは考えにくい用途不明の石組である。21号は石列という表現の方が適する形態を呈するもので、調査区の南西隅に位置し、29号石組を起点に西方向に弧を描きながら伸びる。人為的に並べられた可能性が高いが、指図に照らしてみても21号に対応するような施設は描かれていない。さらにD類(12・89号)についても性格は不明である。指図上での位置をみると12号は玄関南側の便所と考えられる部分と一致する。しかし便所の柱は6本であるのに対して基礎が1基のみという不自然な状態を呈している。また89号の位置は80・81・82・83・88・99・92・100・101・102・104号石組に囲まれた箇所に位置し、ここは指図では中庭の中央付近にあたる。これらの事実からみるとこの2基が南御殿・天祐館のいずれかの基礎として築かれたとは考えにくい。出土遺物についても19世紀前半より下るものは含まれておらず、南御殿より古い時期の遺構である可能性も考えるべきであろう。ただし他の基礎石組と同一線上に構築されている点を考慮すると疑問が残る。

以上、指図との対比によって出土した135基の石組中A類97基、B類25基とC類8基の計130基が建物基礎として作られたものであることが確実となった。ここで同じ建物の基礎として築かれた石組に構造の違いがみられる理由を考えてみたい。実はそれについては石組の分布を調べることである程度有効な答えを得ることができた。第67図をみるとB・C類が調査区西半分に集中することがわかる。特に最も三の丸寄りの1~11号はすべてB類に属す。本遺跡のように基礎部分に胴木を敷いたり礎を置いたりするのは建物の沈下対策であったと考えられる。そういった意味においては胴木をもつA類はもたないB・C類より嚴重な構造であるといえる。調査区のレベルは西の方(三の丸側)が東よりやや高くなっている。発掘調査中、東側では掘り下げによって地下から水が湧き出し、雨が降ると溜まった水がなかなか引かないというような状況であった。一方西側は水捌けも良く常に乾いた状態を保っていた。つまり調査区は西から東に緩やかに傾斜し、低くなるにしたがって地盤が脆弱になっていくと予想される。比較的レベルが高く水捌けも良い西側にB・C類が集中し、土地が低く水の湧き出す東側にはA類のみが設置されているという事実は、当時の技術者が建物の建築時に予め地盤の状態を把握したうえで基礎部分を造ったことを伺わせるものである。

(2) 南御殿・天祐館指図との比較と石組の前後関係

南御殿指図(第68図)には「南御殿五歩一間之圖」とあり、5歩を1間とする縮尺で書かれている。ここで問題になるのが1間の長さである。1間の長さには地域や時代によって違いがみられ、1間を6尺(約181.8cm)と

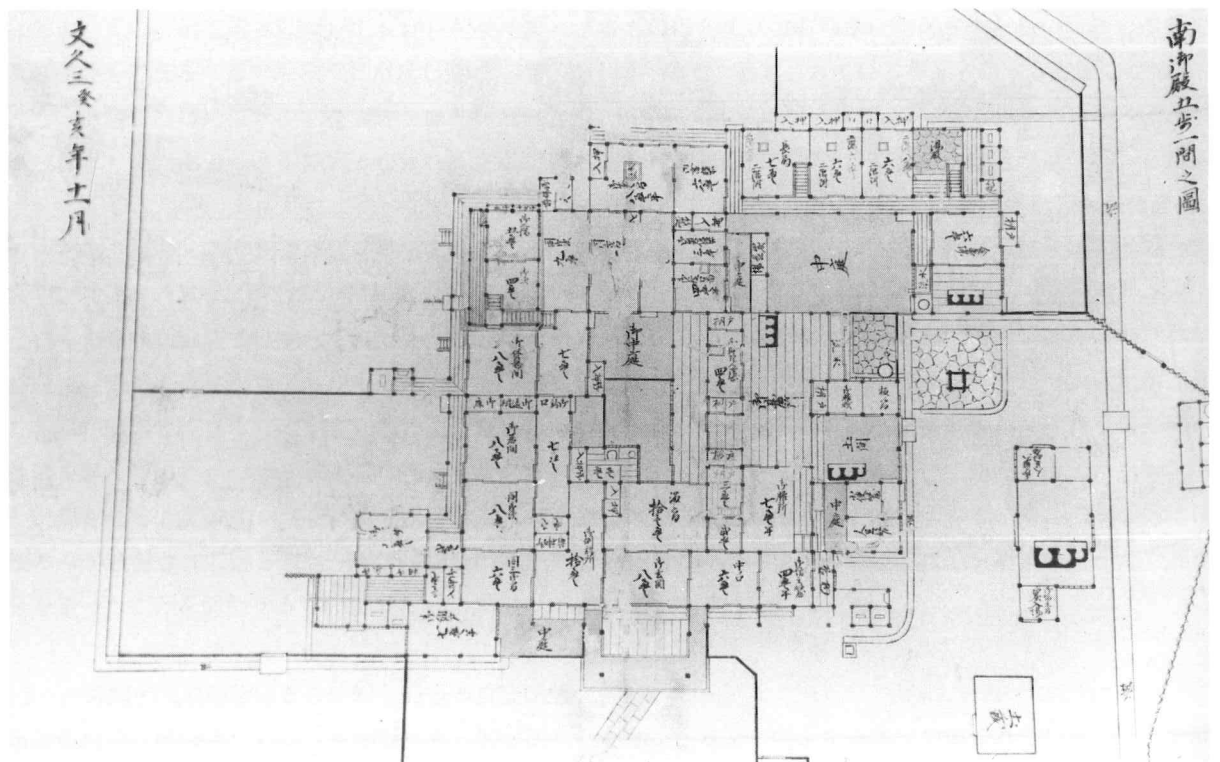


第67図 A～D類石組の分布 (S=1/200)

する江戸間（田舎間）、6尺3寸（約190.89cm）とする中京間（越前間）、6尺5寸（約196.95cm）とする京間が知られている⁴⁾。そこで南御殿設計に当たって使用した尺度を実際出土した石組から導き出してみることにした。まず1間を6尺、6尺3寸、6尺5寸に想定し、それぞれの場合で南御殿指図を縮尺100分の1する。次に同様に100分の1にした発掘調査図面と各々の指図を比較した結果、1間＝6尺5寸としたものが最も良く合致することが確認できた。従って南御殿建設工事では京間が基準尺度として採用されていたと考えられる。

ここで南御殿の間取りについて簡単に触れておきたい。第68図の南御殿指図をみると各部屋ごとに広さと用途について細かく記載されている。それらの中には「御居間」・「御休息間」・「御台所」など頭に「御」を記した場所と「食事場」・「小使部屋」など「御」の付けられていない場所がある。おそらく藩主の生活に関わる部屋や場所を記す場合にはすべて「御」を付けて区別したと考えられる。とすると南御殿は玄関に入って左側すなわち建物北半分程が藩主の居住空間で、南半分は長局・台所・小使部屋など女中や召使達の生活・活動空間であったと推測できる。また屋敷内部には数箇所中庭が配置されており、換気や明かり取りに利用されていたと考えられる。

次に石組と南御殿・天祐館との対応関係をみることにより、石組相互の前後関係を考えてみる。南御殿は、西は三の丸御殿、北は稽古場・御武具方、東は勘定所・奉行所などの役所、そして南は城山に囲まれた地点に立地する。第69図で南御殿と天祐館平面を比較すると、天祐館は一部増改築を行っているものの南御殿をほとんどそのまま利用していることが分かる。玄関は三の丸御殿に面した西側に置かれ、3・4・8・9号石組がその柱位置に一致する。調査区北隅で検出した1号石組から同一線上を東に伸びる93号までの石組列は、指図で見ると建物北側の廊下部分内側ラインに相当する。また20号は南西コーナーの人足部屋外側の基礎にあたり、113号は建物南隅にある湯殿横の廊下部分に一致する。これらの事実から、今回の調査では北側の一部を除いて南御殿のほぼ全体を検出できたことを確認した。一方、天祐館指図によると北側と東側に南御殿にはない張り出し部分が認められ、これらが増築部分と考えられる。さらに詳細にみていくと建物内部でも間取りの変更が行われている。このように増改築したと考えられる箇所と石組の位置とを照らし合わせて検証すると、51・61・62・69・114～117・126・129～130・132・134号石組は天祐館指図上にのみに対応する柱が認められる。つまり建物基礎である

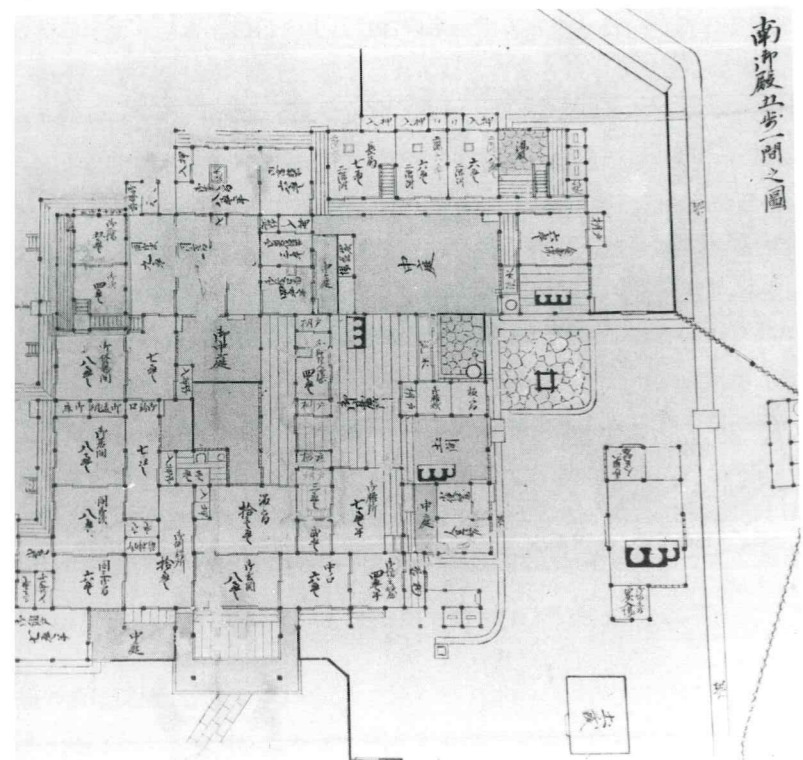


第68図 南御殿指図

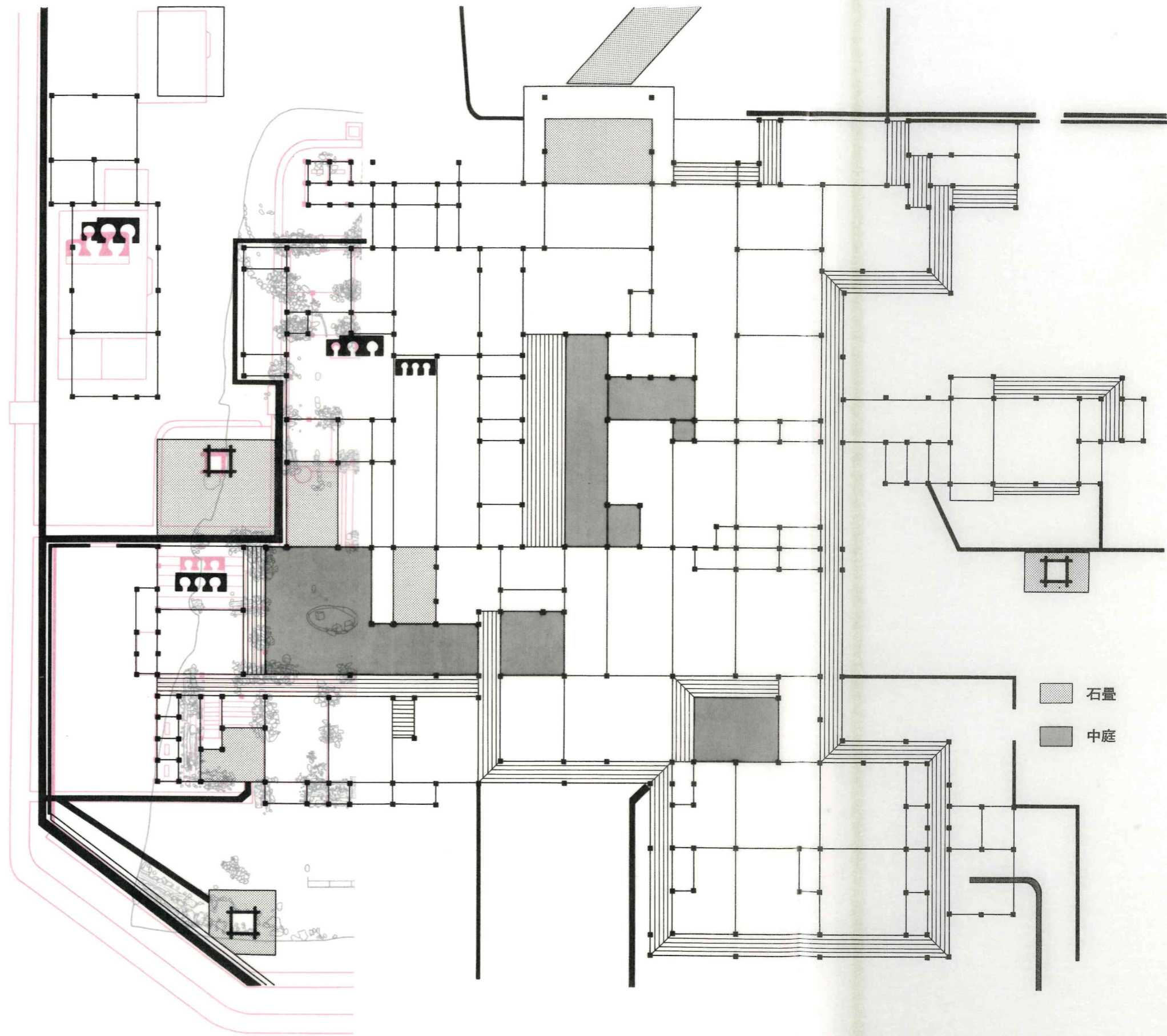
89cm) とする中京間 (越前間)、6尺5寸 (約196.95cm) とする京間が
 こって使用した尺度を實際出土した石組から導き出してみることにした。
 測定し、それぞれの場合で南御殿指図を縮尺100分の1する。次に同様に
 図を比較した結果、1間=6尺5寸としたものが最も良く合致すること
 は京間が基準尺度として採用されていたと考えられる。

独れておきたい。第68図の南御殿指図をみると各部屋ごとに広さと用途
 の中には「御居間」・「御休息間」・「御台所」など頭に「御」を記し
 「御」の付けられていない場所がある。おそらく藩主の生活に関わる部
 付けて区別したと考えられる。とすると南御殿は玄関に入って左側すな
 南半分は長局・台所・小使部屋など女中や召使達の生活・活動空間であ
 箇所中庭が配置されており、換気や明かり取りに利用されていたと考え

係をみることにより、石組相互の前後関係を考へてみる。南御殿は、西
 東は勘定所・奉行所などの役所、そして南は城山に囲まれた地点に立地
 較すると、天祐館は一部増改築を行っているものの南御殿をほとんどそ
 は三の丸御殿に面した西側に置かれ、3・4・8・9号石組がその柱位
 号石組から同一線上を東に伸びる93号までの石組列は、指図で見ると建
 。また20号は南西コーナーの人足部屋外側の基礎にあたり、113号は建
 。これらの事実から、今回の調査では北側の一部を除いて南御殿のほ
 方、天祐館指図によると北側と東側に南御殿にはない張り出し部分が認
 。さらに詳細にみていくと建物内部でも間取りの変更が行われている。
 と石組の位置とを照らし合わせて検証すると、51・61・62・69・114〜
 は天祐館指図上にのみに対応する柱が認められる。つまり建物基礎である



第68図 南御殿指図



第69図 天祐館遺跡出土石組と

130基の石組中まず南御殿建設時に114基が築かれ、上記の16基はその後の増改築時に新たに埋設されたものであるといえる。

以上各石組の前後関係について史料の上から検証してみたが、これとは別に実際に出土した石組を観察した結果から構築時期の異なる石組について気づいた点を述べる。A類に属する石組で南御殿建築当初に埋設されたものと後の増改築時に設置されたものには若干の違いが認められる。前者は胴木として使用された木材の本数や太さ・長さなどがまちまちで、中には別の建物の部材であったと考えられるものなども利用されている。後者は各石組とも必ず胴木の数は3本で太さは均一、長さも石組ごとにほぼ同じに切り揃えられていた。両者とも胴木を敷いた上に礫を載せ周囲を杭で囲むという構築手順は同じであるので同一分類に含めたが、前者が一度に大量の資材を確保するために構造上問題さえ無ければ利用できるものは何でも利用したという感じであるのに対し、後者にはかなり明確な規格性が感じられる。このような相違はそれを造った技術者の違いを強く暗示させるものであり、発掘調査の結果からもある程度両者の間に時間差を想定できる資料を提供できたと考えられる。

(3) 南御殿から天祐館への変遷と時代背景について（「藩政史料」を中心として）

まず南御殿建設の契機について説明したい。文久2年（1862）11代藩主毛利高泰は家督を12代高謙に譲り隠居する。この頃江戸では幕末の動乱期を迎え幕府の権威は揺らぎ始めていた。同年、実質的に参勤交代が廃止されると佐伯藩でも江戸藩邸を引き払い帰国することになった。佐伯藩では3代藩主毛利高直の時に築かれた三の丸御殿が藩政の中心であり藩主の居城であったが、上記のような理由から三の丸だけでは手狭になり新たに南御殿を建設するに至ったと考えられる。南御殿が建てられた時期とその後の変遷について、佐伯藩の藩政史料である『御用日記』あるいは明治期になってからの『藩廳日記』・『県廳日記』⁽⁵⁾を元に作成した年表を以下に掲載する。

第15表 南御殿から天祐館への変遷と時代背景

年 月 日	南御殿・天祐館建設過程	佐 伯	日 本
文久2年 11月27日 (1862)	南御殿建設の折初め		
文久3年 4月6日 (1863)	南御殿柱建て・地固め祈祷		
6月16日	南御殿建設開始		
7月20日	上棟		
8月26日	南御殿竣工		
9月4日	高泰南御殿に移る。		
慶応3年 (1867)			大政奉還
明治2年 3月4日 (1869)		高謙版籍を奉還する。	
6月3日		高謙知藩事に任命される。	
9月		高泰死去	
明治3年 7月28日 (1870)	南御殿表・奥増築の折初め		
8月15日	南御殿を天祐館と改める。		
9月19日	天祐館増築柱建て		
10月18日	上棟		
11月18日	天祐館竣工		
11月24日	高謙天祐館に移る。		
11月28日		熊本宇土より高謙夫人到着	
明治4年 7月5日 (1871)		藩庁完成	
7月14日		佐伯県成立 高謙知藩事解任	廃藩置県
8月19日		高謙東京に出発	
11月14日		佐伯県を廃し大分県に統合	

本調査地点に南御殿が完成したのは文久3年8月26日^{ちやうな}で、^{ちやうな}新初めから考えると9カ月もの期間を要している。ちなみに『御用日記』文久3年4月6日の貢には、柱建て・地固めのお祝いに掛の者に酒と肴を振る舞ったとして南御殿普請を担当した藩士の名前や技術者・人夫などの人数が列記されている。同様に明治3年10月18日の貢には改築を担当した人々が記されており、それらをまとめたのが第12表である。それによると南御殿建設は足軽

第16表 南御殿・天祐館の建設担当者人数

	南御殿 (文久3年)				天祐館 (明治3年)			
藩士	普請奉行	2	勘定掛	3	御用掛	2	計算方	1
	勘定方	1	人夫使足軽	4				
技術者	大工棟梁	1	役小人	1	歩卒	2	棟梁	2
	大工	110	木挽	35	役小人	1	定夫人足	5
	左官	4	石工	9	大工世話役	6	同助	14
	定夫	5	人足	2	木挽世話役	3	左官世話役	2
					石工世話役	3	諸職人	

も含めた藩士が11名、技術者や人夫は167名もの人間を動員した大工事であった。竣工後の9月4日には高泰が三の丸から移り住んでいる。当初南御殿は高泰のための隠居所として建てられたものであった。明治2年12代藩主毛利高謙は版籍を奉還し知藩事に任命される。同年高泰が死去すると、翌明治3年高謙は南御殿の増改築を行い建物の名称も天祐館と変更して三の丸から

転居している。『御用日記』の記録からこれが結婚に伴うものであったことが伺われる。しかし明治4年7月には明治新政府によって廃藩置県が断行され佐伯県が成立、高謙も知藩事の職を解かれ帰京することを命じられた。さらに同年11月には佐伯県も大分県に統合される。この時期以降天祐館に関するはっきりした記録はない。『佐伯市史』⁽⁶⁾では佐伯県ができた時に天祐館が県庁として転用され、その後大分県佐伯出張所に移行したと書かれている。しかし『藩廳日記』・『県廳日記』にはそのような記録はない。『藩廳日記』明治4年5月5日の貢には「一、先月廿九日相記候通、藩廳御普請中二付、端午之御礼、於天祐館申上候付、議政廳^正出頭不仕候」とあり、この意味は「藩庁が建設中なので端午の御礼を天祐館において申し上げ、議政庁へは行かなかった。」ということである。また、同年7月5日には「今日藩廳御普請御成就二付、・・・」とある。つまり明治4年5～7月頃は藩庁建設が進められており、それは天祐館とは別の建物であると考えられるのである。実はこの藩庁がどこに建てられたのかを考えるうえで重要な史料が残っている。「明治4年8月 縣廳五歩一間之図」⁽⁷⁾と書かれた指図がそれである。注目すべきはこれに三の丸と記されていることなのである。藩庁が完成したのが明治4年7月5日、廃藩置県により佐伯県が発足したのが7月14日、県庁指図に記された日付が明治4年8月である。以上の流れから、当初藩庁として建てられたものが県庁に転用されその所在は三の丸であったとするのが最も自然であり、天祐館はあくまで毛利家の居館として使用されていたと考えべきであろう。天祐館については明治5年頃一部を近くの旧三府役所跡に移築し毛利家の佐伯邸として使用されたと言われており⁽⁸⁾、文久3年の建設からわずか9年で一部を残し解体という運命をたどったと考えられる。

以上、調査地点が南御殿から天祐館へと移行していく過程とその時代背景を文献史料を元に探ってみた。天祐館遺跡が幕末～明治初頭という激動の時代の中であって、建設からわずか9年でその役割を終えた遺構であることが確認できた。まさに佐伯藩において維新の動乱を伝える良好な資料と言える。今後周辺の調査を進めることにより、この時期の城下の様子を考古学の立場から復元していくことが重要である。

なお本文を書くにあたって調査した『御用日記』・『藩廳日記』・『縣廳日記』の中から南御殿及び天祐館に関する部分の抜粋を次頁に掲載する。

- 註1. 佐伯市教育委員会蔵 「文久三年 南御殿五歩一間之圖」
 2. 天祐館指図については原本が不明である。本報告書で使用した図は、佐伯史談会会員佐藤 巧氏が写真を元に製図したものを使用させていただいた。
 3. 天祐館指図が原本でないためか南御殿指図と重ねると細部に若干のずれが生じる。
 4. 藤本 強 『埋もれた江戸』1990 平凡社
 東京大学医学附属病院地点における大聖寺藩上屋敷の調査で、この地点における当時の構築物の基準尺度には江戸間と越前間が使用されていたことが確認されている。
 5. 佐伯市教育委員会蔵 『御用日記』文久3年・明治3年7～12月 『藩廳日記』明治4年正月～7月 『縣廳日記』明治4年8～12月
 6. 佐伯市教育委員会 『佐伯市史』1974 298頁に掲載
 7・8. 緑の会 『佐伯の文化財 その一』1985 6頁に掲載

文久三年四月六日 『御用日記』

一、南御殿御普請奉行梶西平馬、国矢藤右衛門申聞候、今日就吉辰御柱建無御滞、且地固御祈禱、大明神主橋迫内記罷出、無御滞相濟候段申聞候付達 御聽候、

一、前条御柱建二付、御普請掛共御神酒差出候旨、御番頭七郎右衛門門出之候付、兩殿様 江 差上候上、拙者共始何 茂 致頂戴、御普請御勘定掛、其外掛之者共 江茂 為致頂戴候様、御番頭右同人 江 申渡候、前条御 柱建御祝、左之通被下置候段、平馬・藤右衛門呼出拙者共 申渡候処、御受御礼謁之候、衝・左傳太・賢之丞 江者 御番頭七郎右衛門より為申渡、其外掛之者共 江者 御勘定掛ヲ以為申付候処、御受御礼申之候段相達候旨、御番頭右同人申聞候二付、一同達 御聽候、尤何 茂 御普請役所ニおみて被下置候事ニ候

御普請奉行

御酒 梶西 平馬
御肴式種 国矢藤右衛門

同御勘定掛

右同断 野村 衡
杉原 左傳太
安藤 賢之丞

勘定方

御酒 山崎 四郎治
御肴壹種 松下 直六

人夫使

足輕 四人
右同断 大工棟梁 壹人
役小人 壹人
大工 百拾人
御酒 木挽 三拾五人
肴 左官 四人
石工 九人
定夫 五人
人足 貳人

文久三年六月十五日

一、南御殿御普請、明十六日より御取掛被 仰付候付、御普請奉行共呼出、拙者共より申渡候処、御受謁之候、御普請、御勘定掛、其外掛之者共 江茂 御番頭兵右衛門より夫々為申渡候処、御受謁之候旨申聞候付、達 御聽候

文久三年七月二十日

一、今日就吉辰、南御殿御普請、御上棟御祝式無御滞相濟候段、御普請奉行梶西平馬、国矢藤右衛門相達候二付、達 御聽候

文久三年八月二十七日

一、南御殿御普請、昨日限御皆出来相成候段、御普請奉行共相達二付、達 御聽候

文久三年八月二十八日

一、三ノ御丸 御移徒御祝、是迄御延引相成候処、来月四日就吉辰、右御祝、且 南御殿 江 大殿様御移徒二付、兩殿様小豆御粥・御吸物・御酒・御肴式種・壺汁五菜之御料理可被遊御祝式、列座御役人共 江 御目錄被下置、江戸御殿 御移徒之節之通、列座御役人共御家中末々迄御祝・御料理・御吸物・御酒・御肴可被下置候処、当節柄嚴敷御簡略之廉を以、兩御殿御用人共始、詰合之面々并御奥女中、足輕小人共 江 取肴御酒可被下置哉 与 相伺候処、伺之通被 仰出候付、御用意申付候様、御番頭衛士 江 申渡候

文久三年九月三日

- 一、先月廿八日相記候通、明四日就吉辰 三ノ御丸 御移徒御祝、且 大殿様 南御殿 江被遊 御引移候付、右為御歡御目見格以上時服麻上下着用、五ツ半時登城為相觸候様、御番頭兵右衛門 江申渡候

明治三年七月二十八日

- 一、権少参事芥兒申聞候、今日就吉辰、南御殿御表御奥御建繼御普請、御新初無御滞相濟候段、御用掛共相達候旨申聞候付、達 御聽候

明治三年八月十五日

- 一、南御殿、天祐館 与 被成御改候段被 仰出候ニ付、御番中席 〆 江為致通達候様、権少参事藤蔵 江申渡候

明治三年九月十九日

- 一、少参事啓佑申聞候、今日就吉辰、天祐館御表・御奥御建繼御普請御柱建、無御滞相濟候段、御用掛共相達候旨申聞候ニ付、達 御聽候

明治三年十月十八日

- 一、今日就吉辰、天祐館御建繼御普請、御上棟御祝式、無御滞相濟候段、御普請御用掛共相達候旨、黒木常右衛門申聞候付、達 御聽

明治三年十一月十九日

- 一、天祐館御普請、昨日限り御皆出来相成候段、御用掛共相達候付、達 御聽候

明治三年十一月二十八日

- 一、今午後 御輿様 御着輿ニ付、拙者始列座御役人と 茂 麻上下着用 天祐館 江相詰可申之処、御手挾ニ付、議政廳 江出頭、御着輿前何 茂 天祐館 江罷出候

明治四年五月五日 『藩廳日記』

- 一、先月廿九日相記候通、藩廳御普請中ニ付、端午之御礼、於天祐館申上候付、議政廳 江出頭不仕候

明治四年七月五日

- 一、今日藩廳御普請御成就ニ付、御祈祷且藩廳御祈祷御別段御祈祷ニ付、大明神主橋佐吉春樹并社人共罷出、稻荷社ニおゐて御祈祷、勤行候

明治四年七月二十九日

- 一、彦根縣より之窺書左之通、七月十五日御達 藩ヲ廢シ縣ヲ被置候事 辛未七月 太政官

明治四年八月十九日 『縣廳日記』

- 一、從五位様、為御帰京、今日四ツ時被遊御乗船候

2. 遺物

(1) 陶磁器

本遺跡では大量の近世陶磁器が出土しているが、この中で一括資料として取り扱えるのは総数わずか9点の側溝床面出土遺物のみである。整地層、瓦溜などからは遺物が多量に出土しているが、含まれる陶磁器の年代幅が大きすぎるため、産地組成または器種組成などの量的分析資料としては条件を満たしていない。そこでこの項ではほぼ近世全般の遺物が出土した整地層・瓦溜出土遺物について、その全体的な傾向と注目すべき遺物について検討を加えていきたい。

まず生産地に着目すると近世各時期を通して肥前製品の占める割合が最も高い。17世紀前半以前のものについては出土数が極めて少なく資料不足の感があるものの、やはり半数以上が肥前産(第31図120～125など)である。しかし肥前での磁器生産草創期ということもあり^①、志野(第37図193・194)、備前(第42図261・263)、中国(第29図91など)、波越(第29図92)など肥前以外の製品も散見される。ところが17世紀後半～18世紀前半に比定される陶磁器はその出土量が飛躍的に増加し、播鉢など一部の陶器以外はほぼ100%を肥前製品が占めるようになる。18世紀後半のものでは、肥前磁器の量的優位は動かないものの、陶器では肥前産に代わって関西産あるいは肥前以外の九州産の割合が高くなり、少数ではあるが瀬戸美濃産のものも混じるようになる。19世紀代についてもほぼ同じ状況を呈するが、少量の瀬戸美濃産磁器(第29図79など)が検出されている。また1点のみの出土であるが隣藩の臼杵領内で焼かれた末広焼の製品(第11図29)が含まれていたことも注目される。

器種別にみると全時期を通して出土量が多いのは碗・皿類である。碗については17世紀末以降出土量が増大する。その理由としてまず第一に考えられるのは安価な大量生産品が流通を始めたことである^②。コンニャク印判で装飾されたものやいわゆる「くらわんか碗」と呼ばれた粗製の碗などがそれである。全国的にみても磁器が日常の食器として広く一般に浸透していった時期と重なり、佐伯藩でも同様の傾向であったと推測できる。18世紀末～19世紀中頃のものとしては広東碗・端反碗など新しい型式の碗が出現する。それ以上に多く検出されたのが筒形碗・丸形碗などの湯呑碗である。本遺跡では特に丸形の湯呑碗が多く出土している。碗も用途によって使い分けられるようになったことが伺われる。皿類は、出土量の少ない17世紀前半以前の遺物中では碗よりその占める割合は高くなる。特に第31図125はいわゆる古九谷様式と呼ばれる初期の色絵^③で貴重なものであったと推定される。皿類全体については17世紀後半～18世紀前半に比定されるものが最も多く、18世紀以降のものを中心とする碗類とはやや年代構成に違いが見られる。この時期の出土品の中で特殊なものは第31図127～132の染付芙蓉手皿である。本来このタイプの製品は海外輸出用に製作されたものであるが、本遺跡からは図化しなかったものを含めるとかなりまとまった量が出土した。前述の古九谷様式の皿も含めこのような特殊なものが一般的に流通していたとは考えにくく、本調査区が佐伯城内に位置する点を考慮する必要があるだろう。この他出土量の多少はあるが猪口・小杯・瓶・播鉢などはほぼ江戸時代全般を通して存在する器種である。播鉢については出土量の少ない17世紀代は備前・丹波・肥前産が占め、数の増す18世紀以降は堺産がほぼ独占状態となるようである。他の陶磁器類の大半が肥前産であるのとは対照的な様相を呈する。この他の器種としては段重・土瓶・急須・両手鍋・行平鍋・灯火具・火容・火鉢・植木鉢などが出土している。これらは基本的に18世紀後半以降に比定されるものが多く、しかも大半は関西・瀬戸美濃もしくは、肥前以外の九州を産地とする陶器である。このように江戸後期には多くの新器種が登場する。しかもそれらの供給地は関西など肥前以外の生産地が中心で、一部のものを除いてほぼ独占状態であった肥前陶磁器のシェアは全国的にも相対的に下がっていくことになった。

以上、生産物の流通には生活スタイルの変化やその時々流行が敏感に反映されることが、出土陶磁器類の全体的な状況からも伺うことができた。さらに遠隔地に大量の商品を安全、確実に輸送できた背景には、強力な幕藩体制の下で社会が安定した流通機構が整備された結果であると言える。

(2) 土器

本遺跡から出土した土製品は、土師質土器焙烙、土師質土器小皿、焼塩壺、土師質・瓦質土器焜炉などが主な器種として揚げられる。しかし、土器類についても陶磁器同様良好な一括資料は得られていない。そこでここでは焙烙、焼塩壺の2器種について、他遺跡における編年などを参考にしながらみていくことにする。

焙烙

焙烙には土師質・瓦質のものがある。本遺跡出土品はすべて土師質土器で、これらを形態によって大きくA・Bの2種類に分類し、A類をさらに6つに細分した(第70図)。

A-1a類 口径31cm前後の深めの器形で、口縁部の向かい合う2カ所に粘土を貼り付け把手とするもの。把手の中心には貫通する孔をもつ。

A-1b類 口径32cmの深めの器形で、1類に類似するが把手の確認できなかったもの。

A-2a類 口径35.6cmの浅い器形で、口縁端部の向かい合う2カ所に貫通しない孔をもつもの。

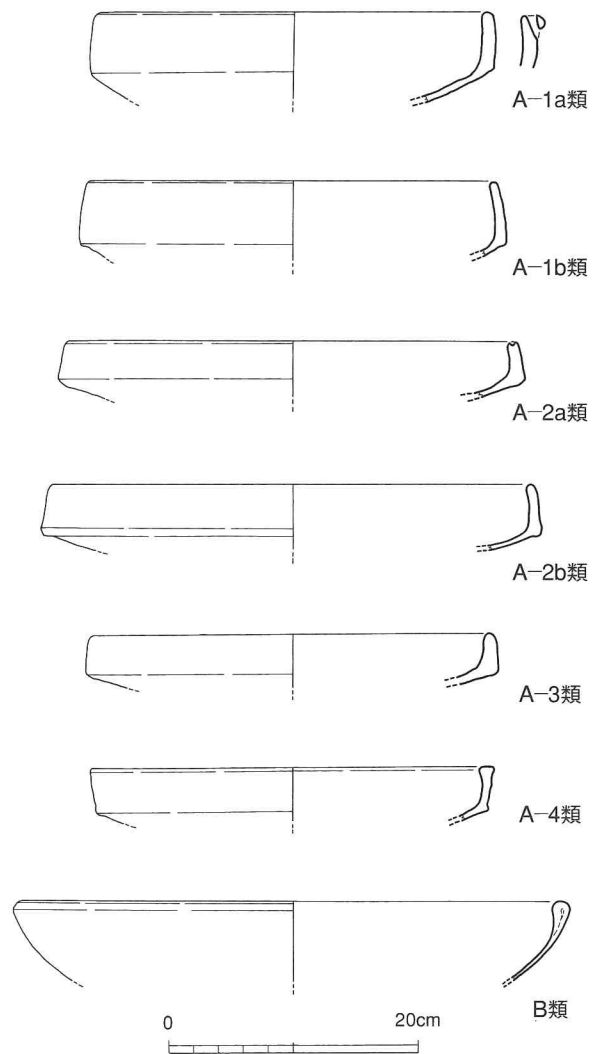
A-2b類 口径38cm前後の浅い器形で、3類に類似するがやや口径の大きいもの。

A-3類 口径30~31cmの浅い器形のもの。

A-4類 口径32cmの浅い器形で、口縁部が肥厚し端部が面を成すもの。

B類 口径43cmの深い器形で、口縁部は粘土を内側に折り曲げ肥厚させるもの。

以上の分類の中で年代が特定できるのは1号側溝床面から出土したA-1a類のみで、相伴遺物から18世紀前半~中葉と推定される。他は整地層あるいは瓦溜などからの出土であるため前後関係が不明である。そこで参考資料として府内城三ノ丸遺跡⁽⁴⁾(以下府内城と表記)と杵築小学校校内遺跡⁽⁵⁾(以下杵築小と表記)出土焙烙の変遷図を提示した(第71図)。これをA類と比較すると側溝床面出土A-1a類は府内城1または杵築小12・13と同一の形態であることがわかり、変遷図の年代とも合致する。さらにA-1b類は府内城2・3、杵築小16と、A-2a類は府内城4、杵築小14・15と、A-4類は府内城5、杵築小17とそれぞれ類似することがわかる。A-2b類についてはA-2a類に含まれるのかあるいは時期の下がる府内城6に対応するのか現時点では不明である。またA-3類も府内城、杵築小に類似する形態がない。ただし口縁部の形は異なるものの口径・器高などはA-4類に近い。以上のように天祐館遺跡出土A類焙烙は府内城ならびに杵築小出土焙烙と個々の器形に多くの共通点をもつことが確認できた。このことから直ちに府内城の編年を本遺跡に当てはめることには慎重になるべきであろう。しかし、府内城報告書の中で豊後地域海岸部の焙烙は大坂地域の強い影響下にあり、しかも豊前地域とは様相が異なることが指摘されている。同じ豊後海岸部である佐伯出土の焙烙が形態や形式変化において多くの共通した特徴をもつことに大きな問題はないとすると、おそら

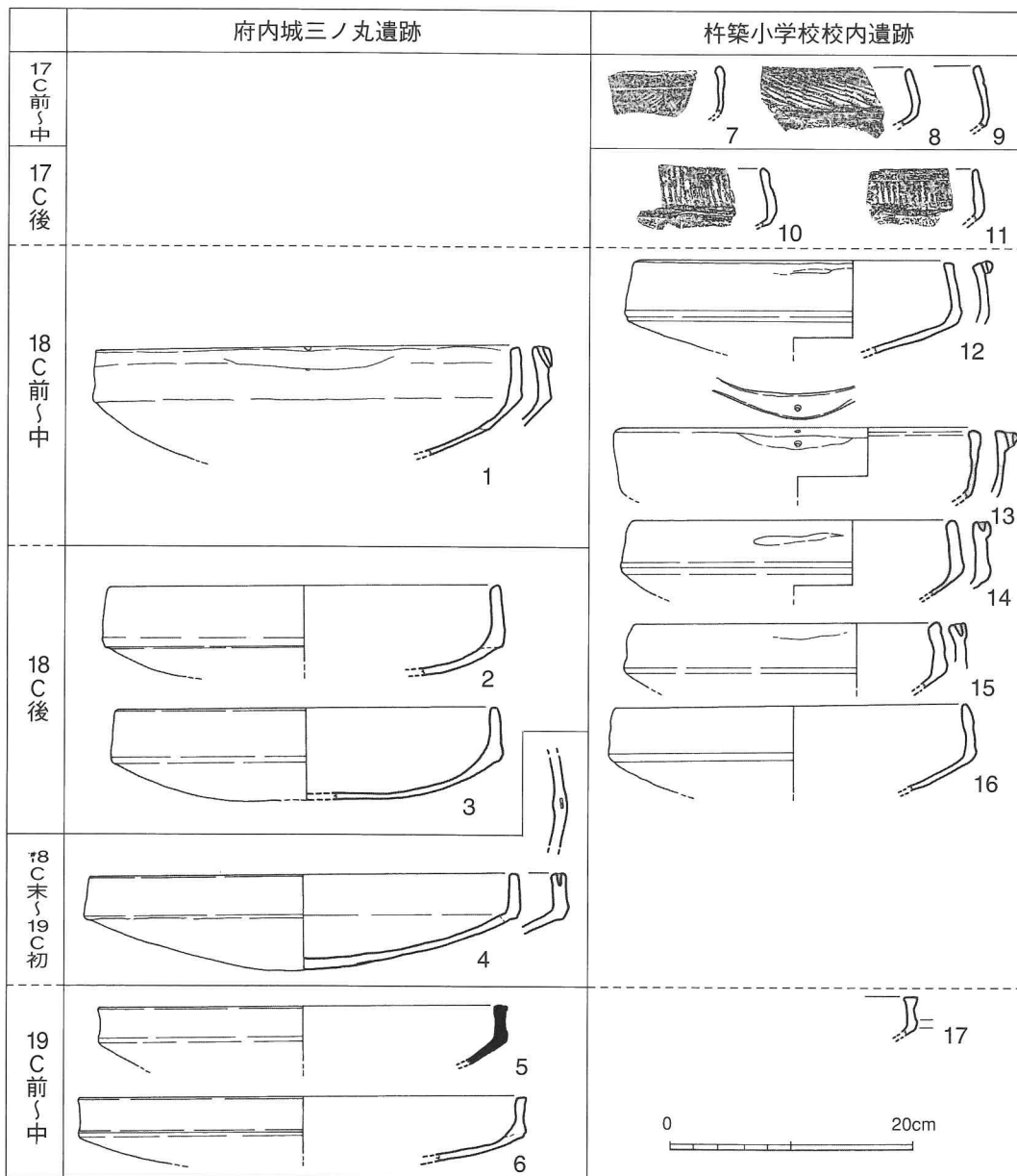


第70図 天祐館遺跡出土焙烙分類図 (S=1/6)

く時期が新しくなるに従い、口縁部の立ち上がりが低くなり把手も退化していくという府内城焙烙とほぼ同じ変遷をたどったことが予想できる。

ここでA類焙烙の生産地について若干検討してみたい。焙烙は型とロクロによって作られる素焼きの土器であるため器壁は薄く壊れやすいと考えられる。つまりリスクを伴う長距離の輸送には適さない製品である。このような理由から在地で生産、流通している可能性はかなり高いことが予想される。ところがA類焙烙の胎土を観察すると在産の土器の胎土にはみられない金雲母や赤色砂粒を多く含む。あくまでも目視による観察の結果であるが、このような特徴は本遺跡からも出土した堺産あるいは京都深草産の焼塩壺などの胎土に類似する。前述したように豊後海岸部焙烙の製作に大坂地域の技術が大きく影響していたとすると、あるいは原料の粘土を輸入し、地元で製作していたということも考えられる。大坂地域と豊後海岸部は瀬戸内海の海上輸送路によって結ばれており、あらゆる面で結び付きが強かったことは推測に固くない。

次にB類については形態のみならず製作技法もA類とは異なっている。管見のかぎり同種の器形の焙烙は県内



第71図 豊後における焙烙鍋の変遷 (S=1/6) 5は瓦質、他は土師質。
 時期が新しくなるに従い、口縁の立ち上がりが低くなり、把手も退化してゆくことに注意。
 (府内城 三ノ丸遺跡 1993より転載・一部改変)

での出土例はない。これについても胎土に金雲母を多量に含み在地の土で作ったものではない可能性があるが、その形態の系譜は不明である。

以上天祐館遺跡出土焙烙について簡単にまとめてみたが、共伴遺物のある遺構検出のものが1点のみという厳しい条件であったため詳細な検討はできなかった。A類焙烙についてはこれまで豊後地域海岸部の遺跡から出土したものと形態の特徴に大きな相違はみられないため、佐伯地域だけまったく独自の形態変化を遂げるとは考えにくい。したがって細かな差はあってもその変遷はほぼ同じ流れをたどると推測される。また生産地については近隣の地域であることが予想されるが、胎土の特徴から原料を関西から搬入していた可能性を提示しておきたい。

焼塩壺

焼塩壺とは、中に粗塩を詰めて窯で焼き、ニガリを取って食卓塩にするための蓋付き小型容器である。また、容器のまま全国に流通していたことから、生産だけでなく販売用の器でもあったことがわかる。焼塩壺の産地には堺湊、泉州麻生、播磨、京都深草などがあり、それぞれ形態や製作技法、刻印に特徴をもつ。本遺跡からも焼塩壺が若干量出土しており、中にいくつか注目すべき点がみられた。ここでは出土量の多かった蓋を中心にその特徴をみていくことにする。

本遺跡出土品には大きく分けて次の2つの系統のものがある（第72図）。

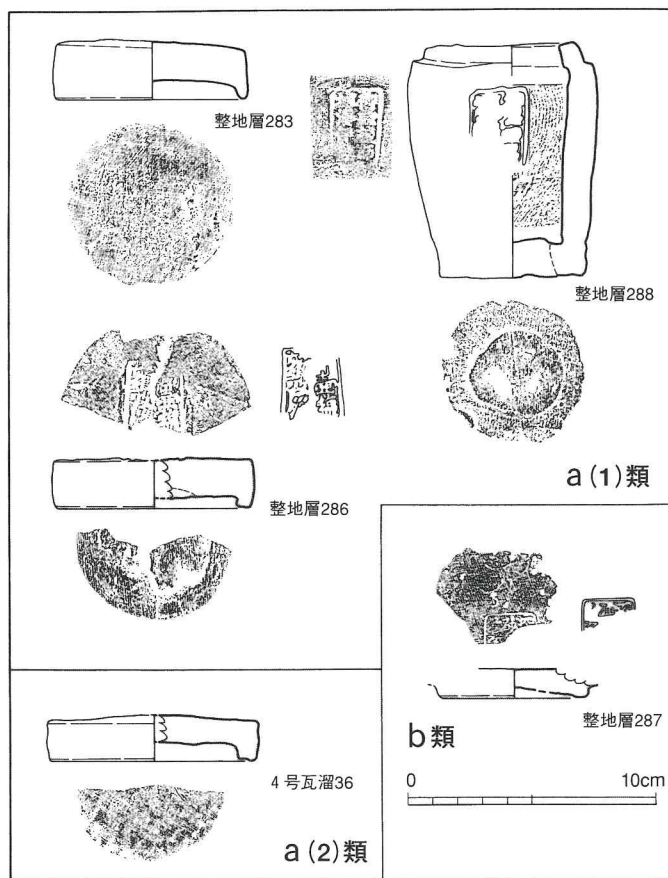
a類 板作り成形のもの

(1) 胎土に金雲母を含み、色調はややピンクがかかった橙色で、内面には布目痕を有する。外面に刻印をもつ蓋と身が各1点出土。

(2) 胎土に角閃石、長石を多量に含み、褐色あるいは淡褐色を呈し、内面に布目痕をもつ。蓋のみ出土。

b類 胎土に雲母を含み色調は灰白色、ロクロ成形で外面に刻印のあるもの。蓋のみ出土。

a(1)類はそれぞれ蓋、身1点ずつに刻印がみられ、両者とも一重方形枠内に推定8文字を4文字ずつ2列に均等配置している。蓋は下半分が欠損しさらに刻印左側が判読できない状態である。かろうじて右列の第2、3番目の文字である「壺塩」のみ読み取ることができた。これから考えられる刻印は「御壺塩師 堺湊伊織」、「御壺塩師 難波浄因」の2種類である。焼塩壺の蓋で後者が刻印されたものは東京大学医学部附属病院地点において出土しているが、前者の報告例は管見の限りではなく、この蓋の刻印も「御壺塩師 難波浄因」と推測できる。次に身の方であるが、こちらも摩滅が激しく文字を判読できない状態である。かろうじて残っている輪郭から判断すると「御壺塩師 堺湊伊織」である可能性が最も高い。2つの刻印は堺の同じ焼塩壺メーカーのもので、「ミなと 藤左衛門」という刻印から変遷したものである。これからただちに他の刻印をもたないa(1)類焼塩壺も藤左衛門系列の製品とは断定はできないが、堺周辺を含む一帯の生産地の製品である可能性は高い。a(2)類は形態的にはa(1)類と類似するが胎土、



第72図 天祐館遺跡出土焼塩壺分類 (S=1/3)

色調など相違点が多く、a(1)類とは異なる産地の製品と考えられる。特に2次焼成の痕跡が認められないという点は焼塩の製造容器としての機能を果たしていないことを示すものと考えられ、焼塩の生産には別の方法を用いていたことが推定できる。以上a類は渡辺誠B類に対応する⁶⁾。

b類はa類とはまったく形態が異なる。刻印はやはり欠損のためほとんど判読不能であるが、残存部分から「深」とみられる文字が1字確認でき、さらに胎土に雲母を含むことから京都伏見の深草産であると推定している。a(2)類同様器壁に2次焼成の色がなくやはり焼塩は別に製造した可能性が高い。渡辺D類に分類できる。

以上天祐館遺跡出土の焼塩壺には少なくとも3つの産地の製品が含まれていることが確認できた。量的に最も多いのは堺を含む周辺地域の製品と考えられるものであり、焼塩の多くを先進産地に頼っていたことが伺われる。その一方で少数ではあるが京都などからも搬入されており、特に産地が特定できないa(2)類については胎土の特徴から、豊後のいずれかの地域で生産された可能性も考えられ、今後資料の増加を期待したい。

註1. 肥前での磁器生産開始年代は確定していないが、記録などから寛永元年(1624)以前の1610年代頃と考えられている。佐賀県有田町の山辺田窯、天神森窯、原明窯などから砂目積みの磁器皿が出土しており、これが磁器生産創始期の製品と推定されている。

大橋康二 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 1989 ニューサイエンス社

大橋康二 「肥前磁器の変遷—技法と器形からみた—」『柴田コレクション展(Ⅰ)』1990 佐賀県立九州陶磁文化館

2. 18世紀後半以降になると日常の食器として使用されたと考えられる磁器製品の出土量が全国的に増大する。主としてこのような雑器類を量産したのは肥前の波佐見窯であった。

西田宏子・大橋康二 『別冊太陽 古伊万里』1988 平凡社

3. 日本で最初に色絵磁器の焼成が行われたのは肥前の有田でその時期は1640年代と考えられている。古九谷様式の名称で知られる色絵の磁器製品は1640~1660年代に肥前で生産された初期色絵であることが、有田の窯跡の調査や化学的分析などにより確認されている。

柴田明彦 「有田民窯磁器の変遷試論—1648年から1735年頃までの—」『柴田コレクション(Ⅰ)』1990 佐賀県立九州陶磁文化館

大橋康二 「肥前磁器の変遷—技法と器形からみた—」同上

4. 大分県教育委員会『府内城三ノ丸遺跡』1993

5. 大分県教育委員会『杵築小学校校内遺跡』1987

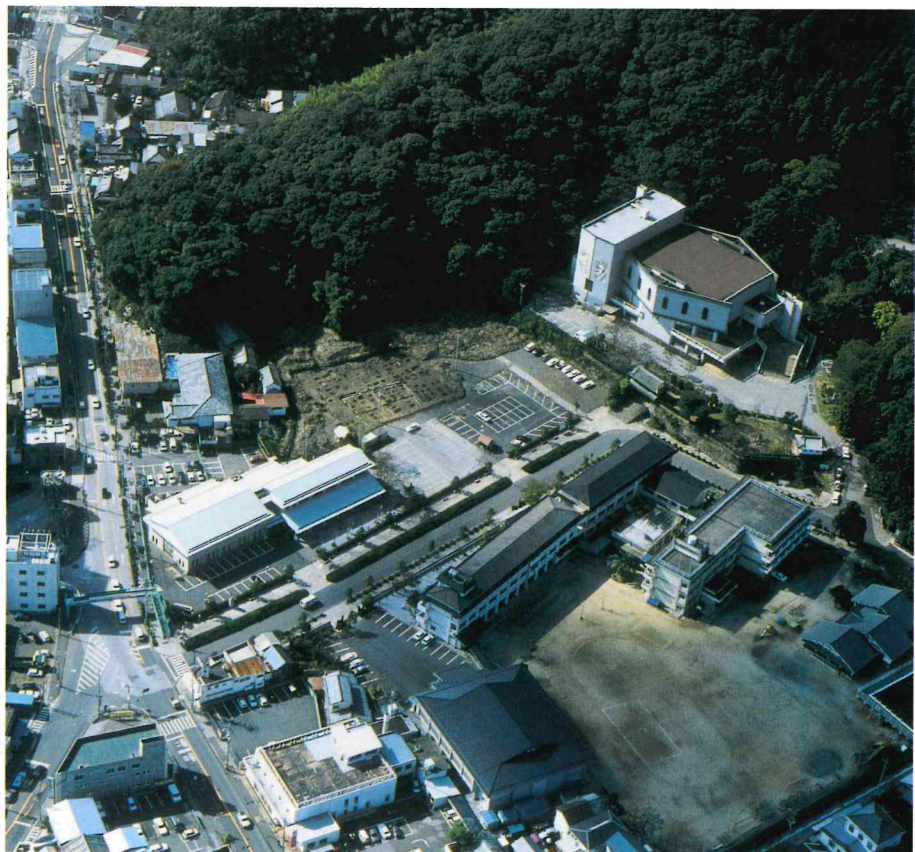
6. 渡辺 誠「焼塩」『講座・日本技術の社会史』第二巻 塩業・漁業 1985 日本評論社



天祐館遺跡

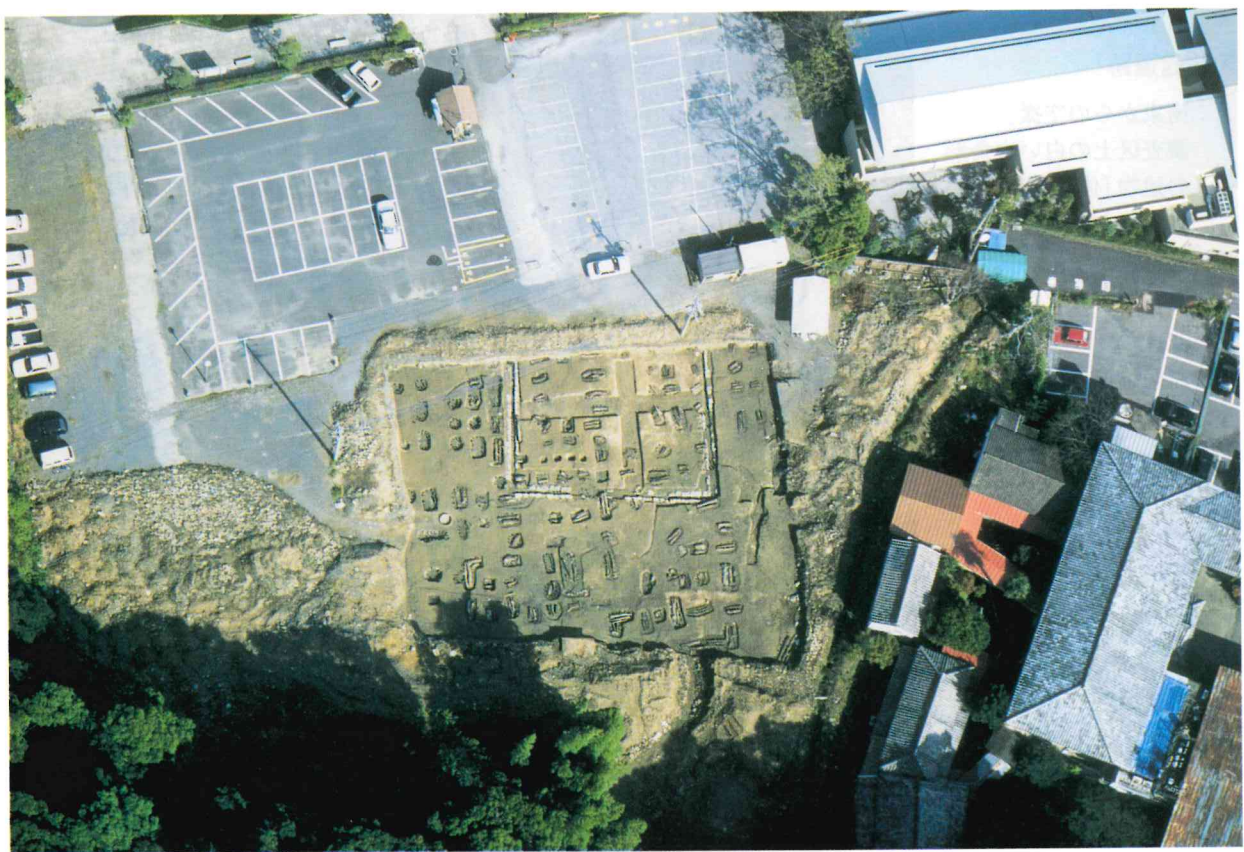
上：南東からの空撮。
 調査区上の白い六角形の建物（佐伯文化会館）の位置が三の丸跡。その背後が城山。

右：北東からの空撮。
 左側を走る道路は国道217号線





天祐館遺跡調査区全景（南から）



天祐館遺跡調査区全景（南から 根石除去後）



調査区遠景 (1)



調査区遠景 (2)



作業風景



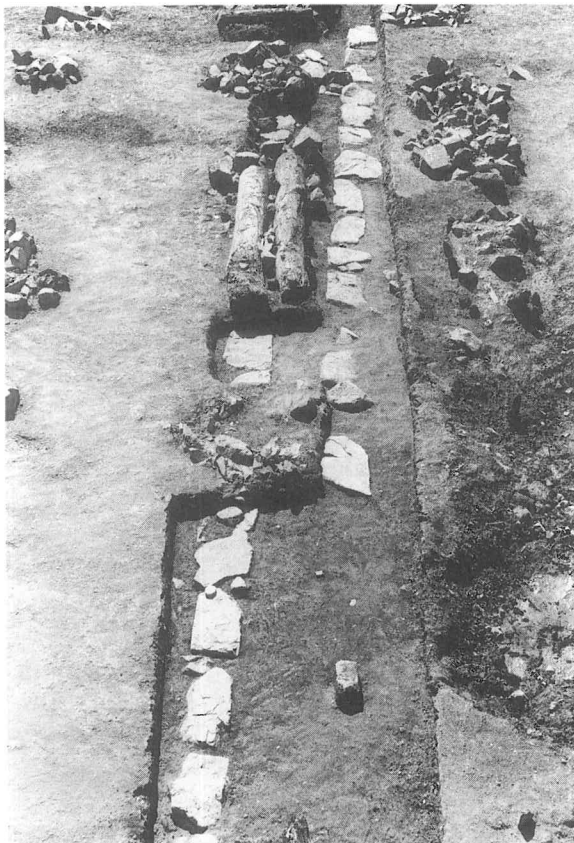
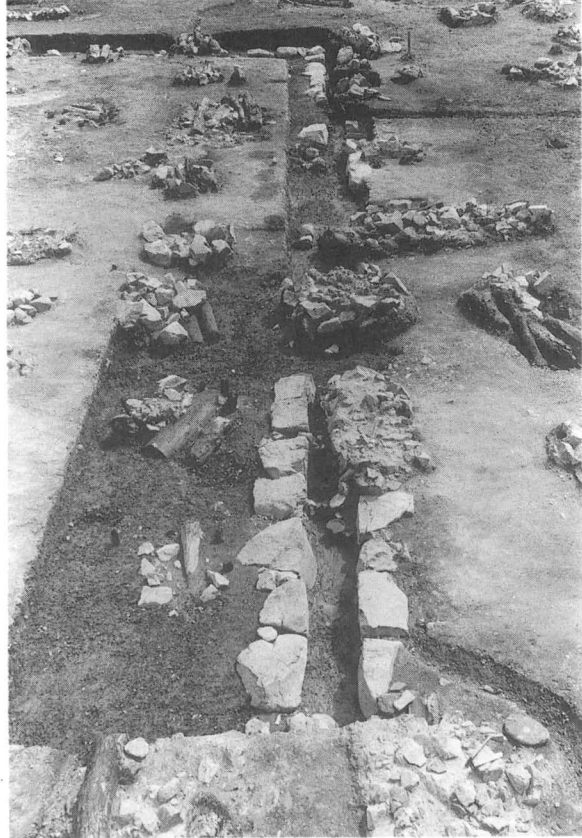
調査区全景（西側方向より撮影）



調査区全景
（根石除去後、西側方向より撮影）



調査区全景（東側方向より撮影）



(左上) 1号側溝 (東溝)
(左下) 同 (西溝)

(右上) 同 (南溝)
(右下) 1号側溝・64号石組切り合い関係



1号側溝焙烙出土状態



1号側溝側面



56号石組



49・50号石組



59号石組根石除去後



101・110号石組根石除去後



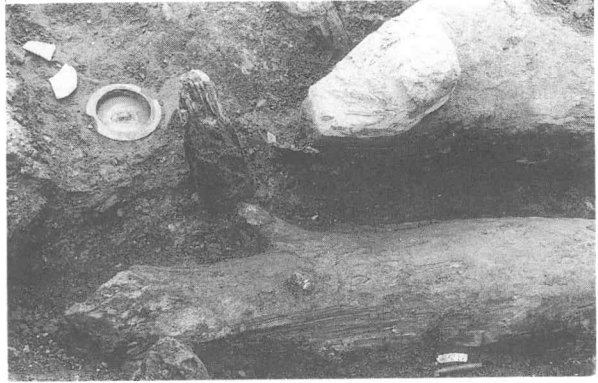
54号石組根石除去後



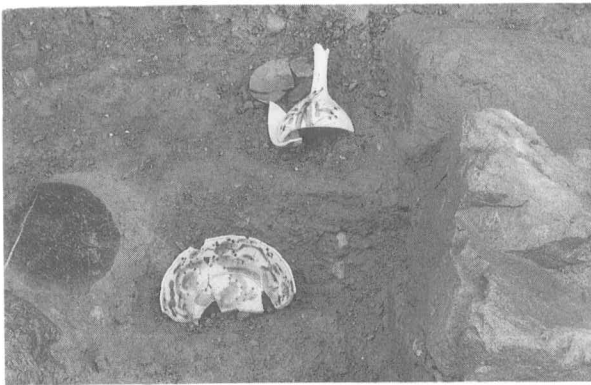
89号石組根石除去後



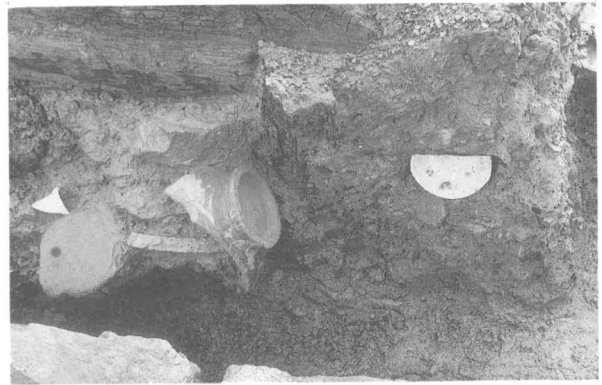
19号石組遺物出土状態



40号石組遺物出土状態



整地層遺物出土状態 (1)



整地層遺物出土状態 (2)



整地層焼塩壺出土状態



4号瓦溜菊丸瓦出土状態



1号埋桶 (鬼瓦・鉄鎌出土状態)



2号埋桶



1号側溝 1~8



1号側溝 9



1号瓦溜 1~12



1号瓦溜 13~20



1号瓦溜 21~31



28「瀬戸助」銘



1号瓦溜 32~38



1号瓦溜 39~46



1号瓦溜 47~52



1号瓦溜 53~60



1号瓦溜 61~71



58 扇形刻印



59 不明墨書



69 人物陽刻



1号瓦溜 72~75



1号瓦溜 76~80



1号瓦溜 81~88



1号瓦溜 89~96



1号瓦溜 97~101



2号瓦溜 1~9



2号瓦溜 10~15



15 「森」銘



2号瓦溜 16~25



2号瓦溜 26~30



3号瓦溜 1~11



3号瓦溜 12~16



4号瓦溜 1~7



4号瓦溜 8~15



4号瓦溜 16~22



4号瓦溜 23~30



4号瓦溜 31~34



4号瓦溜 35~41



整地層 1~11



整地層 12~19



整地層 20~28



整地層 29~40



整地層 41~49



整地層 50~54



整地層 55~62



整地層 63~73



整地層 74~83



整地層 84~92



整地層 92 左：内面 右：外面



整地層 93~105



整地層 106~119



整地層 120~126



整地層 127~132



整地層 133~139



整地層 140~145



整地層 146~152



146「清水」銘



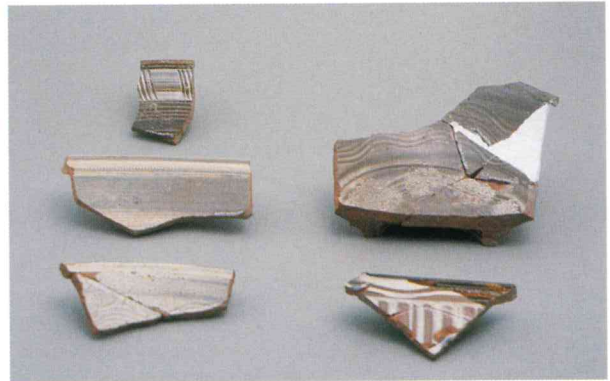
整地層 153~157



整地層 158~164



整地層 165~167



整地層 168~172



整地層 173~175



整地層 176~184



整地層 185~195



整地層 196~199



整地層 200~209



整地層 210~221



整地層 222~228



222 扇形刻印



238 軍配陽刻



整地層 229~237



整地層 238~246



整地層 247~251



整地層 252~256



整地層 257~260



整地層 261~266



整地層 267~274



整地層 275~281



整地層 282~289



286 刻印



287 刻印



288 刻印



整地層 290~296



Ⅲ層 1~13



1・2トレンチ(1~5)、2号埋桶(6)、廃屋土坑(7)



表土層 1~4



試掘調査 1~10



試掘調査 11~24



試掘調査 25~34



試掘調査 35~42



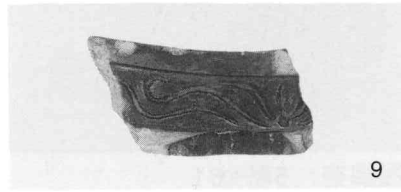
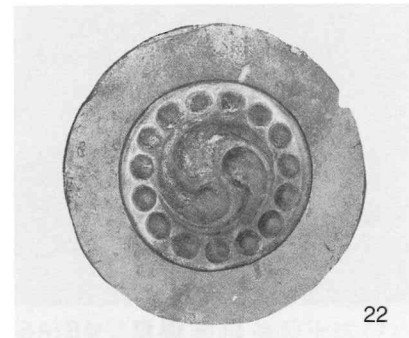
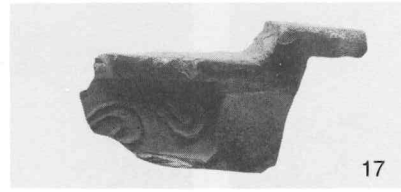
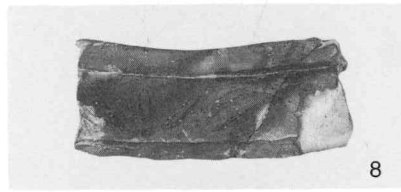
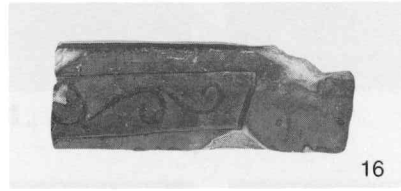
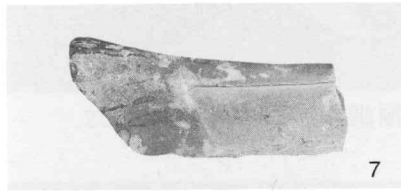
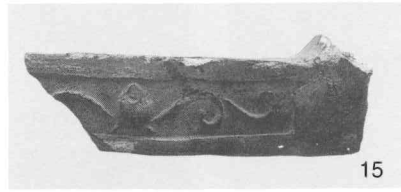
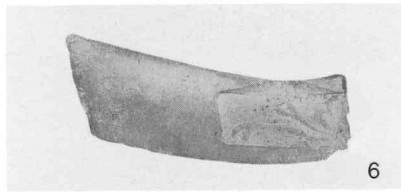
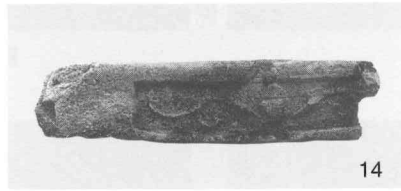
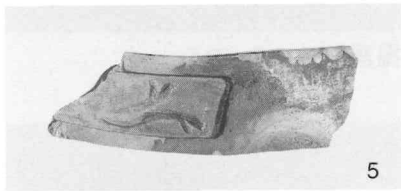
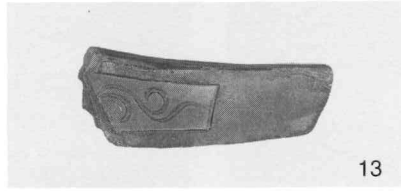
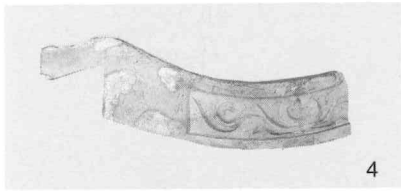
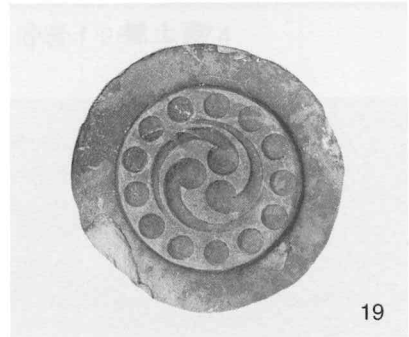
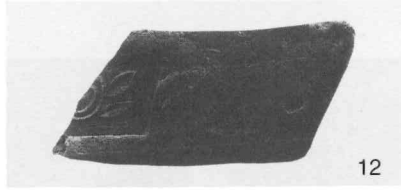
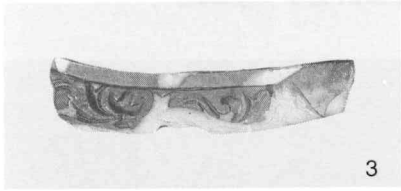
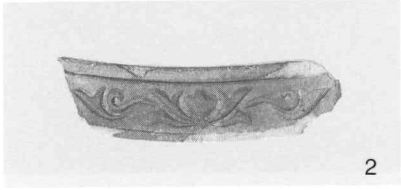
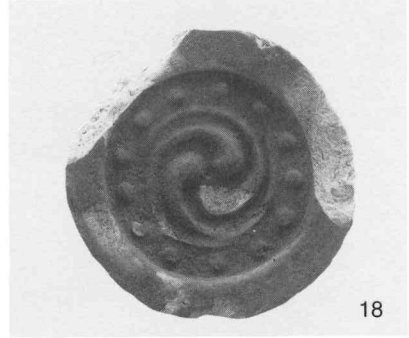
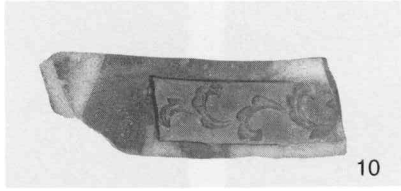
試掘調査 43~47

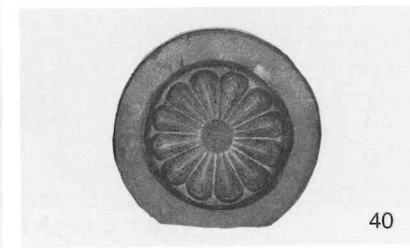
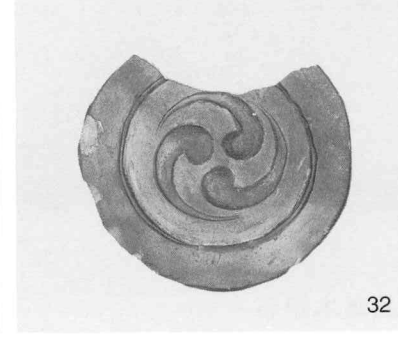
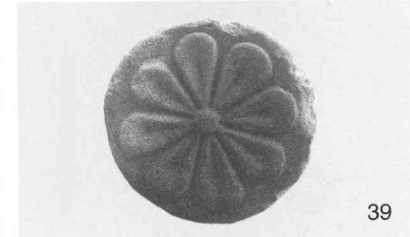
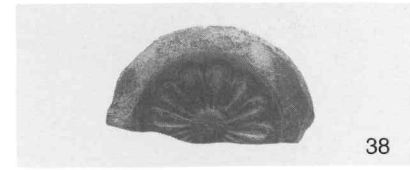
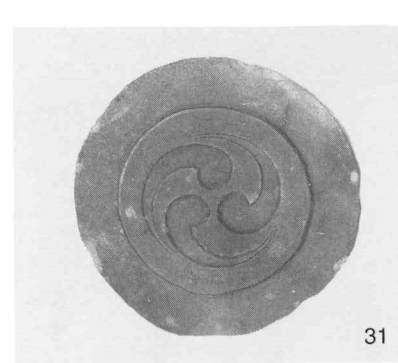
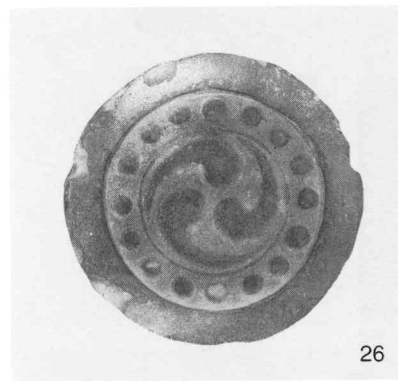
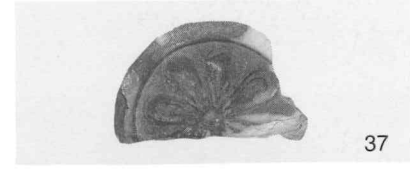
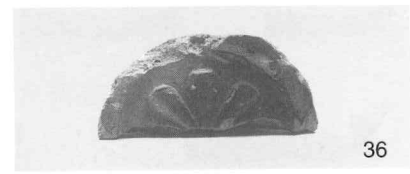
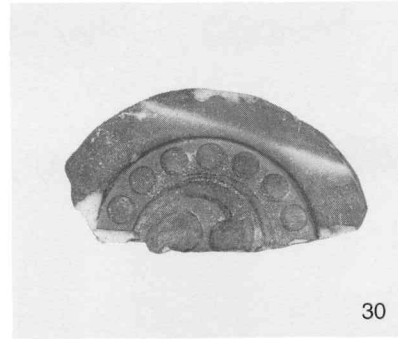
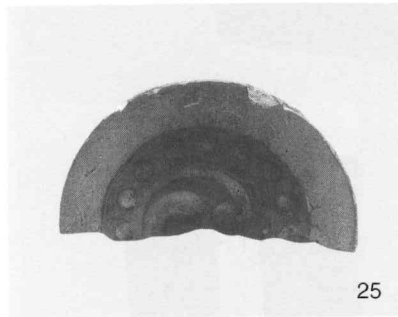
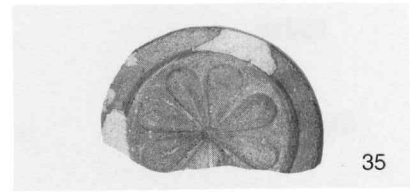
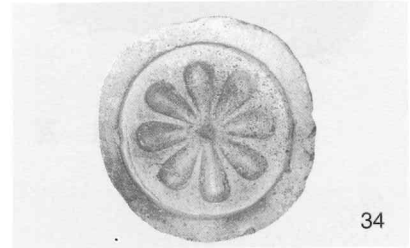
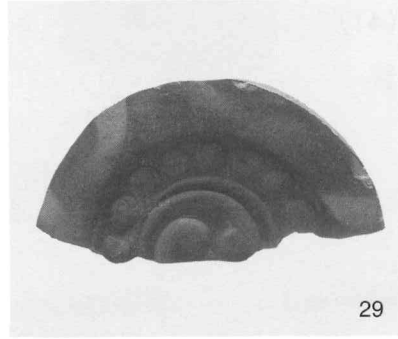
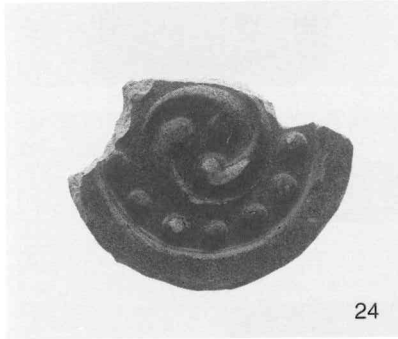
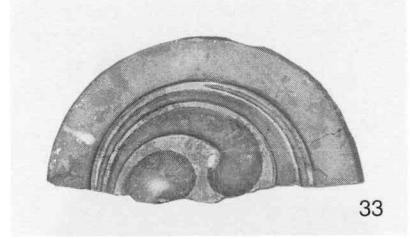


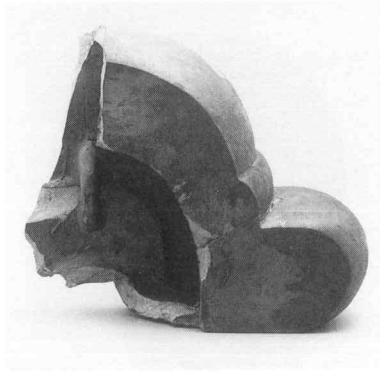
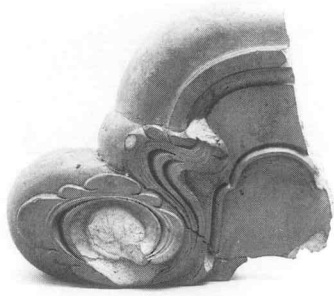
試掘調査 48~53



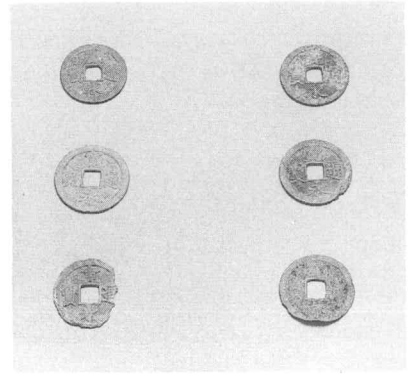
試掘調査 54~61



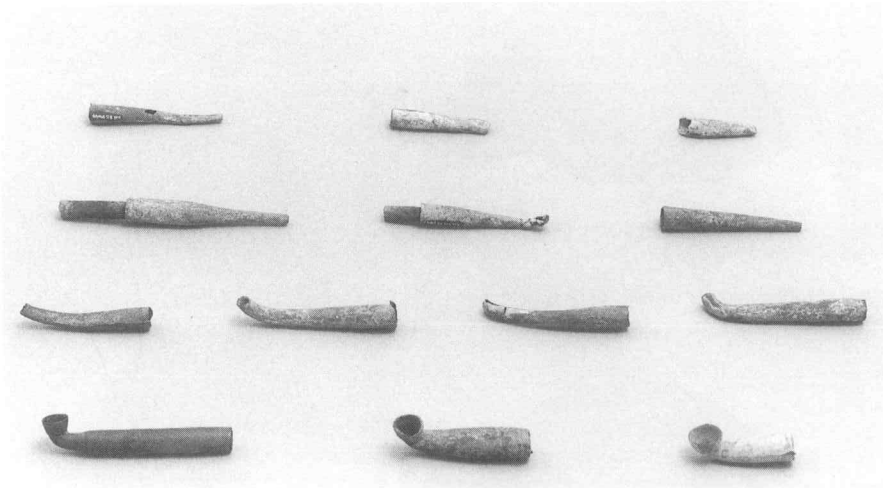




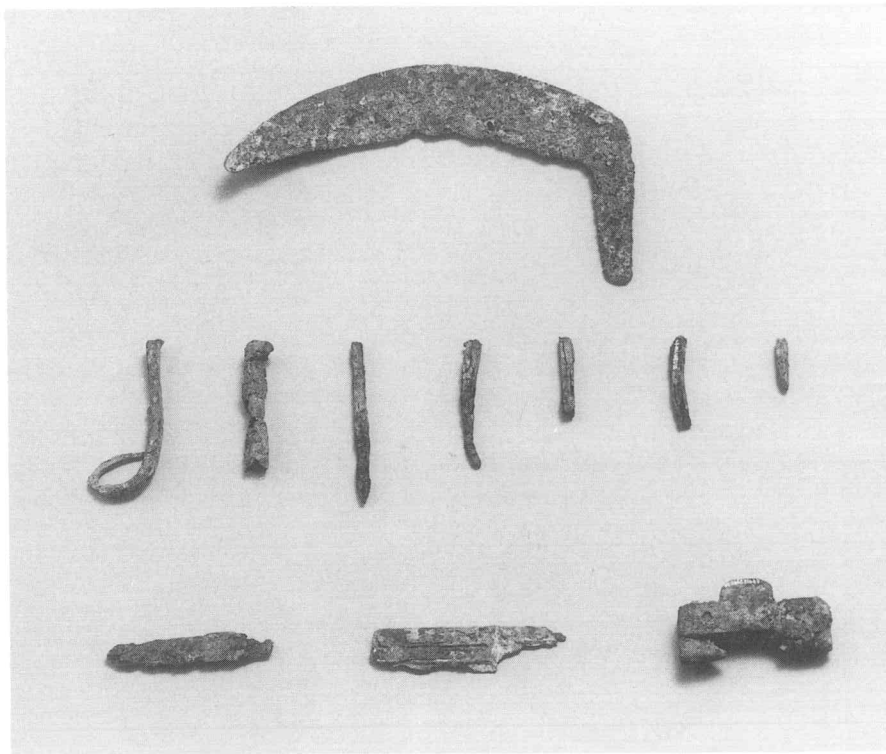
鬼瓦 (41)



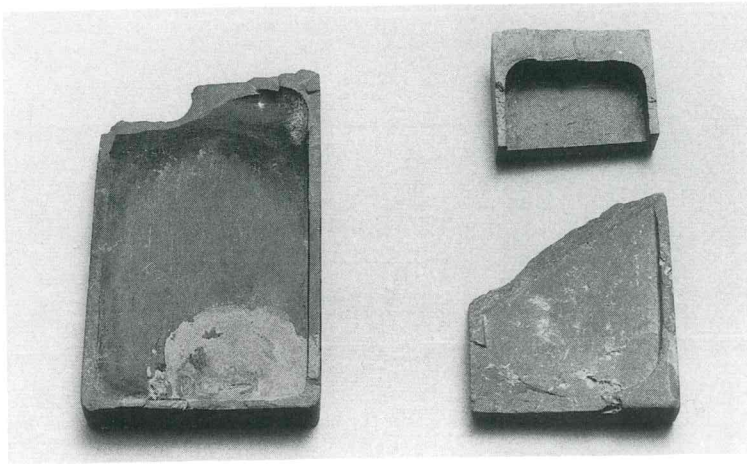
銅錢 (1~6)



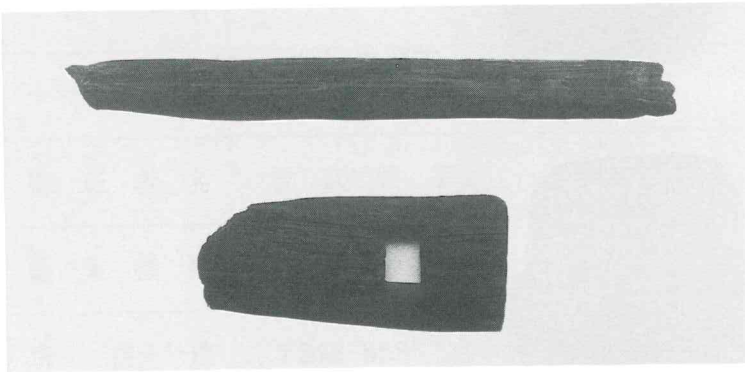
煙管 (1~13)



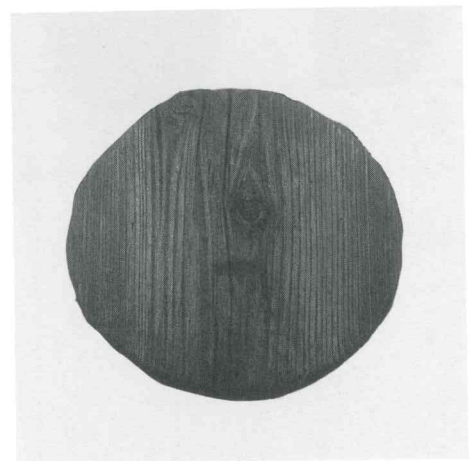
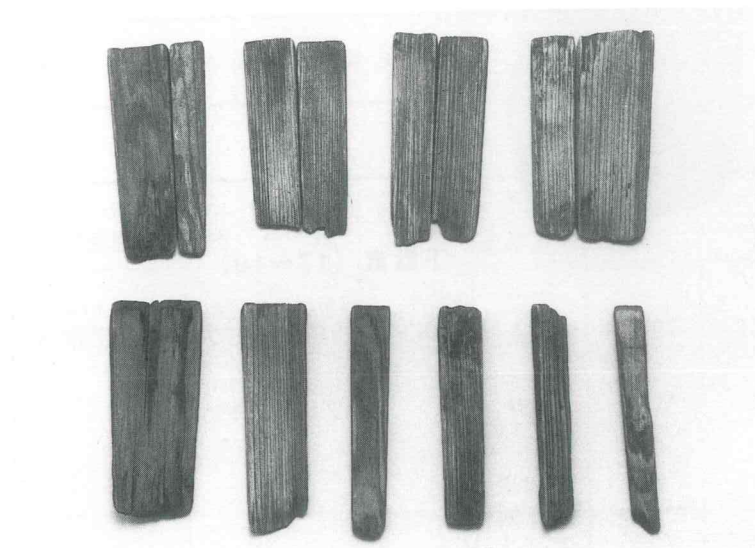
金属製品 (14~24)



硯 (1~3)



不明木製品 (1・2)



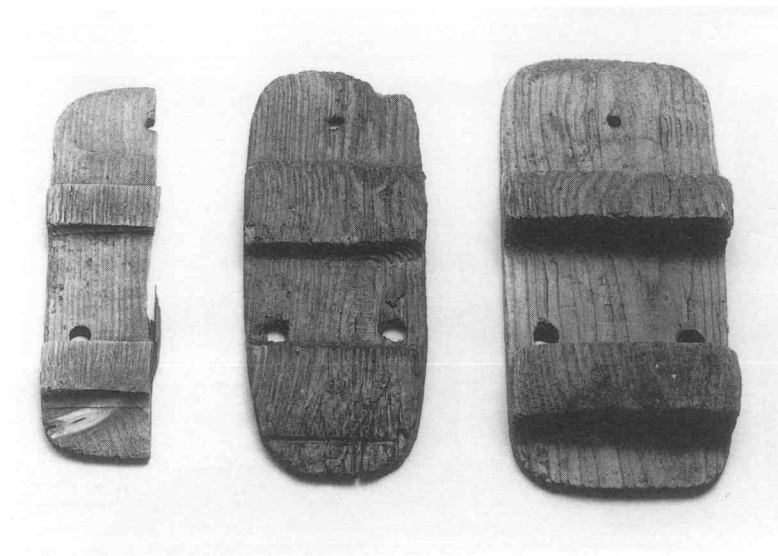
左上：木桶側板 (3~12)
右上：木桶底板 (13)



不明木製品 (14~16・20)



下駄表 (17~19)



下駄裏 (17~19)

報 告 書 抄 録

ふりがな	てんゆうかんいせき
書名	天 祐 館 遺 跡
副書名	美術館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編著者名	吉 武 牧 子
編集機関	佐伯市教育委員会
所在地	〒876-8585 大分県佐伯市中村南町4番1号
発行年月日	1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯 ° , ′ , ″	東 経 ° , ′ , ″	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てんゆうかんいせき 天祐館遺跡	おおいたけん さいきし 大分県佐伯市 おおてまち 大手町1丁目	430	430	32°	131°	1994.7	1,100m ²	美術館建設
			012	57′	53′	1994.11		
			佐伯 城下町 として 登録	14″	42″			

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
天祐館遺跡	屋敷跡 (城内)	近世	建物基礎石組群 側溝 瓦溜 埋桶	近世陶磁器・土器 瓦類・石製品 金属製品・木製品	屋敷跡に一致する指図発見。 出土陶磁器類の中に佐伯市 所在の波越窯の製品1点を 確認。

美術館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

天 祐 館 遺 跡

1998年3月31日

発 行 佐伯市教育委員会
〒876-8585 大分県佐伯市中村南町4番1号
TEL 0972-22-3111

印 刷 有限会社 勉強堂美術製版社
〒876-0832 大分県佐伯市船頭町2-52
TEL 0972-22-1324